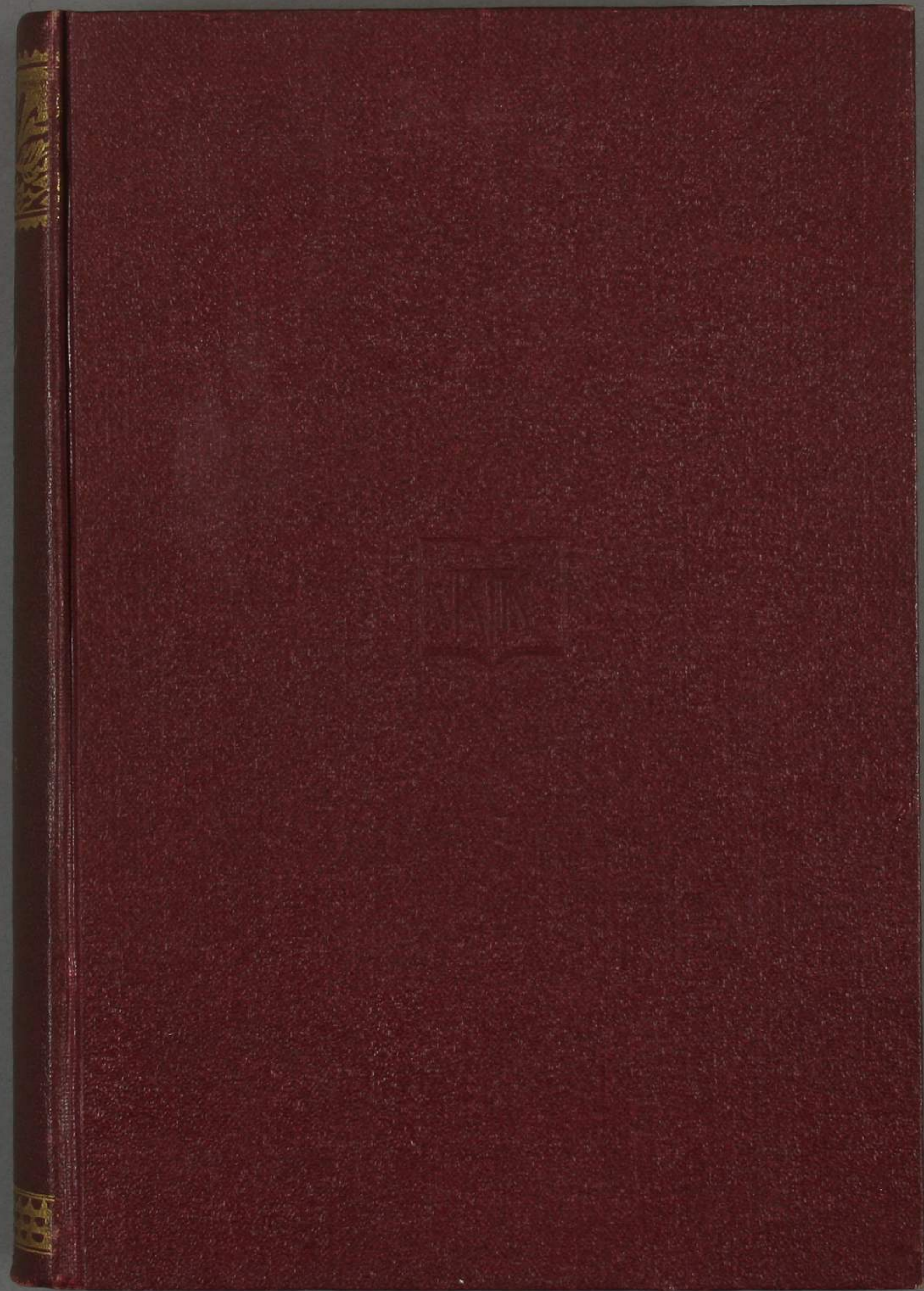




泡鳴全集

第九卷







泡鳴全集

第九卷

泡鳴全集

第九卷

夕潮

目次

女護海島……………二

世外の獨白……………一四

磯姫の曲。無性斗神。嫦娥の恨。

海邊雜吟(上)……………二七

明暗。海のなげき。君を思ひて。わが影法師。いさり火。解に
寄す。高岸沈思。

海邊雜吟(下)……………四二

朝出船。朝の夢。あしたの神。秘戀。倉吉。夏の眞晝。夕べの
神。高安月郊君に。遠つ島根。御富士。

靜思……………五

ああ世の歡樂。湖畔の靜思。圓き石。島の歌。有木の別所。散
り行く紅葉。天の橋立にて。葦さ少女。秋吟。二の筈。

豊太閤(史詩)……………九七

悲戀悲歌

戰捷の祈。清正望岳賦。明使追放。蔚山城。秀吉薨去。小海祠。

三界獨白

燭のゆらぎ。闇の横木。さきわの泉。

叙事三篇

血ぬれる鐘。田戸の海ぬし。高地の靈語。

旭日吟

叙情五篇

伊吹の螢。螢を踏みつづせる折に。雲翻々。常世の光。ねむりは醒めたり。

短曲二十一篇

一海の響。二無言の石。三自然のあゆみ。四残る憂ひ。五細き指輪。六夢の子。七薫ゆる火かげ。八さほの寂しみ。九檀の木。十小暗き道。十一まさふ怖れ。十二うれひ一すぢ。十三時劫の森かげ。十四いさゝ聲。十五鍵を與へよ。十六鏡を碎げよ。十

一六

一五

一七

一八

一九

七蛇の河姥。十八熱き眞砂。十九酒興。二十悲哀の俘。二十一苦悶の鎖。

脱營兵

海堡技師

序の幕

中の幕

詰の幕

闇の盃盤

短曲二十五篇

春曉。行く春。黄がねくちなは。黒き花。寧ろ夜なれや。闇を例へば。闇の闇。闇なる岡。君は暗きを。浪の戯れ。冷たき砂。よみ返り。御靈うぶや。過ぐるぬくみ。二の無言。黒き素船。渦巻く心。地なる響。千させの重み。あけぼの。ゆふぐれ。落日。樂の音。凝りし涙。胸のしぶき。光のゆふだち。追憶。永劫の力。のろひ。のろひの岩。二つ花藻。沖のテラス。石をい

二三

三九

三四

二六

三七

三五

だいて。細き水の緒。眞白男涙。

月と猫、外貳拾篇

月と猫。わがゆらぎ。喘息。闇の盃盤。朝。葉巻のくゆり香。

醉中吟。寝る君。女露男露。闇中悲歌。にほひ杉。男波の小

剝那。紅の星。夢はめぐりて。のろひ。日比谷公園。病室。枯

れ葉。中禪寺にて。この無言。孤寂。

海音獨白、其の他

海音獨白。ダナー獨白。死獸。人肉狂賣。凱旋兵。朱のじ

み。

黄金鱗

一六部奏。わが兒。三頁ひ厨子。四絶望。五水晶洞。

戀のしやりかうべ

死、外七篇

一胸のきしめき。二釘うつ響。三火葬。緑日。庭木の刈り込み。

ハンモク。僕その物。寒月。二のしやりかうべ。演説。

甲州の印象

四〇三

四四四

四七一

四九四

五三〇

樺太の雑感

一汽車。二乗り込み。三鑼詰製造所。四矛盾。五めの子。六焼

損林。七眞赤な太陽。八アシの花。九何の爲めに僕。一〇マオ

カのゆふべ。

札幌の印象

『闇の盃盤』補遺

無言妖女。土のにほひ。冬の夜。家根の小露。君さわれ。

最近の作

カンナの赤い一輪。淺草の女。犬の聲。監獄の壁。朽ち行く女

するせん道化者。蜜蜂の靈よ。兎の憤激。生活の寂しみ。ラザ

口の姉妹マルタ。瀬戸の火鉢。森ヶ崎の朝。外交政策。植ゑ忘

れた百合の赤芽。胸の海。きりぎりす。日光。中禪寺湖。今の

詩界。こやしの臭ひ。ゆふやけの富士を遠く。太陽よ。

五五〇

五七三

五七九

五八八

女護海島

序

白帆は遙かに戀しきものよ、
 をとこは心に頼みの綱か。
 大ぶね入り込むそのゆふぐれに、
 きそひて出で来る島人どもの
 化粧はあらたの黒がみ姿。
 優しき手に手に持つわら沓を、
 湊のみぎはに置き並べつゝも、

之をばうがたんにはひ島もりの
 結べる小紐のしるしにすがり、
 おのおの分れてみさをを守る。
 ああ、とこしへにも生きなんものが、
 一夜をいただくは如何なるさちぞ。
 すなはち頼みのとも綱切れて、
 その船遠くも歸へらん日には、
 歎きの涙にその身はなかば
 融けてや深みの人魚とならん。

(一)

颯々乎として風吹き来れば、
 みなぎる大洋二十重に倒れ、
 颯々乎として浪逆まけば、
 そびゆる椰子樹もかどみて恐る。

夕潮

岸べに あらぶる獅子とは 何ぞ。

見よ、見よ。巖石ぬれにぞ 濡れて、

かしら を 攀ぐるは 活くるに 似たり。

この島 まとふは 如何なる 蛇ぞや、

しり尾も 示めさず 動くに 遇へば、

天柱 やすき を これ 疑はる。

幾千百丈 みな底 深き

神秘の 奥より ゆるぎも 出でつ、

ああ、茫漠たる そら をば 仰ぎ、

いと さゝやかなる、汝、海島よ。

なが身 を 護るは アダムの子らか、

はた又 いくの 流人が するぞ。

静中 動あり、動中 静の、

寂寞 却て 一しほ 深し。

山にも、川にも、森にも、野にも、

住へる ものらの 影 だに 見えず。

(二)

山々 みどりの 肩をば 染めて、

白きは 御空の ひたひに 残る。

流れは 香樹の にほひを 乗せて、

ゆるくも 走りて おほ海に 入る。

野べには 鳥あり、その名を 知らず、

自由に 眠りて 羽がひを やすむ。

大獣 小畜 小みちに 遇へど、

その牙 その爪 用をも 爲さず。

喬木 灌木 こすゑは たわわ、

露けき 果物 食ふに まかす。

空気は 稀なる 力を 帯びて、

天なる 御門 ゆ 涼しく 流れ、

かどやき 照らすよ、小草の色の
青きは あまねく 地上に 敷きて、
文化の 足跡 少しも 受けず。
遠きも 近きも、左も 右も、
自然の けしきは 活き活き 踊る。
ああ、これ 仙境—— 無名の 主の
青牛 ゆたかに 關より 逃れ、
悠々 天壽を 終へにし 陸か。

(四)

晝夜は 分れて この地を 見舞ひ、
風雨と 戯れ、無手にて 歸り、
變化は 隠れて こゝにも 來れど、
歴日 あまりに もの長ければ、
天數 地數の 八卦に のらず。

剛柔 いまだに 交はらざれば、
難をば 生ぜぬ 有様 なるか。
物皆 おのづと 成り出でぬれば、
遠近 ともども 鋤取 取りて、
たがへず 勞苦は いづこに ありや。
うれひの 主體を とよめぬ 限り、
造化の 所有に 身づから なやみ、
火宅を 現する ものらはいづこ。
有形の ほだしを 遙かに 去りて、
無形の 位に 融合する か。
咎なく、悔なく 思はず、爲さぬ、
草木に 牝馬の いのちを 繋ぎ、
優しく 健きは かけのみ 走る。
ああ、生々の理 孤獨となりて、
いつまで、化育の いといと 高き、

夕

潮

去

對象^{ゆき}を別ちて、男子と成さぬ、
雲行き雨ふるこの島山^{しまやま}に、
六龍遂には顯はれざりや。

(四)

そも何ものぞや、音楽のごと、
なみ風静まる刹那^{せつな}と刹那、
そのひまかすめて幽かに聴ゆ。
山にはその山、川には川の、
おのおの發する御魂^{みたま}もあらん、
鳥にはその鳥、獸には獸の、
それぞれ固有のこわ音もあるを。
そも何ものぞや、音楽のごと、
なみ風かすめて幽かに聴ゆ。
その方向さへ確とはわかず、

たつみに向へばたつみに渡り、
いぬゐに向へばいぬゐにひどく。
魘魅^{ちみ}罔兩^{もうりやう}とはこれをや云はん。
見よ、見る限りは、とこ世の夏の
枝葉はやわらか、その水清し、
精魂^{せいこん}豈、また、若やがざらん。
剛健頗る自然にかなふ、
椰子の樹、棕櫚の樹、あなよす、さぼん、
芭蕉の葉かげに、蘇鐵のもとに、
たとへば、あれ野のかしこに、こゝに、
虫の音一時に高まる如く、
恨むか、歎くか、かこつか、泣くか、
悲しく哀れに聴えも來たる、
調べはをちこち一つのひどき。

(五)

ギリシヤのいにしへ 船人どもを
いざなふ 島根の それにも 似てよ、
へだてゝ 聴きなば 怪しき ひどき、
めあて を 定めて 近づき 見よや。
住民 ありけり——サイレン の ごと、
美なる は をんな の 機織りすがた。
前者 は、オルファス 琴引き の 爲め、
巧み を 耻ぢ入り 移石 と 化しぬ、
後者 は、却て、海 より 來たる
慰藉 をば 求めて 心 は 亂れ、
炎熱 烈しき 樹 の かげかけ に、
無聊 に 倦みて ぞ 織り出す 布 の、
長きが 如くに 夏の日 盡きず。

まなこ を 横ぎる 校の 手 ゆるく、
逃れて 出づる は 夢路 の うつゝ。
せめては そのまゝ 眠りに 入らば、
目ざめて 苦しき 煩悶 も なきに——
かよわき 力の 渠等 ぞ あはれ。
うつゝと 夢路 の 境 に ありて、
われから とめ得ぬ 歌 をも 杼をも、
ねむげに 合せて 又 くり返へす。
『はた地 は 織れども、着る人 あらず、
着る人 あれども、をみな子 ばかり。』

(六)

日本 の 荒武者 爲朝、むかし、
この根 を 襲ひて、美なるを 多く
小舟 に 引きゐて 南 に 去りぬ。

これ、この處の唯一の歴史。
 祖先はいづれぞ。開祖は誰ぞや。
 文明あかるき光を惜み、
 學術その口つぐみて云はず、
 木訥平易は、神代の如し。
 小波に尋ねば、小波は隠れ、
 大浪招けば、大浪にげん、
 こすゑに訴へば、こすゑはゆらぎ、
 木の實に語れば、木の實は落ちん。
 ああ、單調子の安逸、安臥、
 無理想、無何有に勞れも果てつ。
 小蜘蛛の織り爲す網になぞらへて、
 芭蕉布作るが手足の動き、
 なほ飽き足らざる心の糧よ――
 いづこの果よりなぐさめ來たる。

運命トする卦はたゞ潜み、
 牝馬は空しくいな鳴くばかり。
 島民とこ世にその數あまた、
 柔順さながら配偶を得ず。
 さびしきその身をいだけば、胸に
 燃え立つほのほの暑さに堪へず、
 南の岸べに冷氣を呼べば、
 天地はかをりて感ある乙女。
 ああ、また同性、同性を産む。

一 戀の曲

世の露白

世外の獨白

一 磯姫の曲

岩にあら波音ぞ高く、
朝日のほりてころろ寂し。
われはいつこの果を來たり、
われはいつこの果に行くや。
かぎり知られぬ濱は、東
西にのび行く晝の如し。
みどり黒がみ白き越えて、
せなに亂るゝあらし烈し。

ぬれし砂地にわが素足の
落ちて、一すぢ引くはうれひ、
遠き波より消えも行き、
更らによせ來る波のうねり。
われは友なく此世の岸に
立てばかなしみうしほ成して、
あはれ、いつこの果を來たり、
あはれ、いつこの果に行くや。
胸もどよめく海の音の
凝りしいはほの上にははり、
沈むゆふ日の光見れば、
ひとりわが身のかげぞ薄き。

見よや、すなだる人の子らは、
かたへよぎりて家路行けど、
われは磯姫、ひとり残り、
わらひさどめく目には入らず。

夜の氣落ち來てこの世つみみ、
萬物ねむりに入らん時も、
われはとこ世に果ころ來醒めて、
沖のふるさと胸にゑがく。

あはれ、深みのあわび貝よ。
なれが住まひは遠くらくあれど、
かなしみもなく、憂さをも見えず、
あるがまゝなるすがた戀し。

われも生れは海路なれど、
母を見知らず、父を知らず、
めぐる月日のしほに浮きて、
かくも夜る晝やすきを得ず。

岩にあら波音ぞ高く、
朝日のぼりてこゝろ寂し。
われは深みの底を出で、
またもうれひの深き知りぬ。

二 無性斗神

ああ、われ、大地の御胎にありて、
をのこと生まるゝわづらひ免がれ、
ああ、われ、御つちを母とし出で、

をみなと歌はる 恥ぢをば避けつ。

見よ、世の強きは、夜を日に繼いで、
名利の爲めにはおのれを忘る。

見よ、世の弱きは、あしたにゆふに、
おのれを折りてもかたちを恥ける。

見よ、世の猛きは、春また秋に、

虎の子 熊の子 輪廻のものと。

見よ、世の美なるは、年また年に、

直立種族の種をば殖やす。

人こそ知らされ、その子の脊には

大なる毛ものの這ひあがれるを。

人こそ知らされ、その子の手には

毛深き 前足 つきまとへるを。

いな、いな、知らされ、その子の父母も

もとより一つの道をば這ひつ、

月日の如くに今分るれど、

もとこれ谷間のしづの子 猪の子。

互ひに まろびて いただくは 何ぞ、

おのれの生みにし おのれの姿。

影より影をば 楽しみ 活くる

人間、あはれや、その身を知らず。

ああ、この燦たる世界にありて、

なほ且人の世いかでか 醒めぬ、

見にくき 髪の毛 かしらにのせて、

いつまで まよひの 御殿みどの にねむる。

見よ、わがむくろは大地に成れど、
恥ぢあり、名あるのきぬをば着けず、
小暗こくらき森より踊りも出でよ、
われをばいだきて御空みそらのきはみ。

ゆふべにほゝるむわがかどやきは
しゝ射る人らの真弓を照らし、
朝あげにまたゝくわがまなざしは
軒端のきにつるせる獲物とらにうつる。

あはれや、人間、その日を狩りて、
明日あすはもわが矢やにうたれて死なむ。
両性りやうせい相待あひまつその夢の間は、

再びわが目に觸るゝを避けよ。

三姉娥の恨

西水さいすい また行く三百五十里、

かの西王母さいわうぼぞわが恨みなる。

玉山ぎよ 出だすは璧へきのみなりせば、

磨ときてわが手に巻くべきものを、

不老ふろうのくすりに不死なるかをりぞ

わが身をあさむきあやまたしめぬ。

かの神蓬頭かみかぶの姿をあらはし、

くすしき賜物たまわがつま罪つとに

授けしその夜ぞ、われ、世を思へば、

世人よびとも同じくその伴ともからか、

黙にも等しき 髪の毛 いたゞき、
死ぬれば、長き尾 示めすと 見えぬ。

妙なる 世界 ぞ ひたすら くゆりて、

いと ほがらかなる つき夜 の 如し。

わが世を 忘れつ、わがつま 忘れつ、

また おのれを さへ 忘れて、あはれ、

たゞ かの薬 の 櫛匣 を いただきて、

高ぞら御殿 に 逃げ こそ 來つれ。

御空 は 燦爛、星、花 降らして、

眞寶 の 光 に 錦 を 飾さり、

黄金 まばゆき うてな の うち には、

手枕 しばし の 夢、幾むすび。

さは云へ、わが魂 たゞ 一とき だも

やすき を 得たる の ためし は あらず。

あま飛ぶ おほ鳥、小鳥 の 羽がひ は、

羽ばたき 毎にも 眞玉 を はたき、

碧緑 は 露 とも 散り布く 晴れ庭、

あまたの 腰元 薄ぎぬ にほふ。

さは云へ、わがたま、たゞ 一とき だも

やすき を 得たる の ためし は あらず。

萬燭 暗々 しら雪 はちらひ、

夜を さへ 晝間 の 不老 の 宮の、

とばり は 紫、その色 深くも、

かをりて おほゆる 不死なる いのち。

さは云へ、わがたま、たゞ 一とき だも

やすき を 得たる の ためし は あらず。

ああ、汝、しら雲——もろき一はしら雲。

却つて戀しきなんぢのすがた。

五色の光にかさなり合ひつゝ、

先きなる影より消え行く。さまは、

たとへばあかつき、熟睡の床より、

暖夢 つぎつぎのがるゝ如し。

わが身も、歡樂あまき が如くに、

ほろびて またまた生まるゝならば、

寂しみ非想の天まで積むとも、

苦しき思ひの とどまるまじを。

わが壽は、三千三百歳をも

刹那にかぞへて、なほ盡きざるよ。

涙にあふるゝ下界を離れて、

却つて苦しき一しほ増しぬ。

なまじい久遠にのぞみを求めて、

得たるは空しきつき夜のくらゐ。

澄みては、むらがるとこ世の暗黒を、

ころろは孤寂のあし場に迷ふ。

無限の刹那のその數かぞへて、

わが胸おそれにおのゝき震ひ——

見よ、やみ遠くも見え透く雲間ゆ、

聲なく刻めるうれひは迫る。

ああ、このいのちはうつろの酒麩、

永劫わが魂ねむりを盛らす。

西山

西水

また行く三百五十里、

湖

二五

かの西王母せいわうぼぞわが恨みなる。

玉山出だすは壁かべのみなりせば、

磨きてわが手に巻くべきものを、

不老の薬に不死なるかをりぞ

わが身をあざむきあやまたしめぬ。

海邊雜吟(上)

一 明 暗

君とふたりたどりし

濱なみべに出で、けふ、又

ゆるぎ浪なみをながめて、

ころ動うごく夕ゆふがた。

君が行きしふな路は

岩井いわいの鼻はなより消え、

遠き富士のすがたを

夜ぎりとぎす小入り江こいりえ。

つかれ 歸る 漁夫ら の

船 は 見えぬ 櫓の音、

あはれ、寂として、たゞ

有るは 月と わが事、

ひかる 海を 渡りて、

黒み 來たる ぬる風、

のびて 立てば、胸には

悲喜の おもひ かきませ。

廣く、明く、小暗き、

噫、この海のおも 見よ、

君と むかし語りの

戀も 斯の如きよ。

二 海のなげき

富士のあなたに 夕ばえ 消えて、

せなに 夜神の 迫りぞ來たる、

わが身 ひとりの 濱べに 立ちて

海の なげきを 窺かに 聽けば、

これも いためる 有情の 言葉――

『日々に 思へば 思は まさる、

まさる 思の 深きを つつむ

胸は、あらしに かけ亂されて、

やすむ ひまなき 迷の影の、

暗き うれひ は いのちの 底に

清き 眞珠の 眞玉を 産みて、

人に 示さぬ この 秘め事よ。

『秘して つゝみて、つゝみて 秘して、
ゆるく 満ち張る 浪より 浪に
天は うつれど、照る日は 照れど、
とけて 流るゝ光の奥は
いつも やみ路の力に 振ふ。
夜々の 星々の その數 あまた、
沈む とし月 限りも 知らず。』

『みどり 混沌^{こんごん} よどむ が うちに
活きて 踊りて、且、悲みの
過去も 一つに、未來も ことに、
今を 盛りの 満干^{みそか}の 潮は
潮の いづこに はてしを 得んか。
亡ぶ ものこそ うらやましけれ、
いつか 心の 憂さを ば 晴らす。』

『やまと建^{たけ} が 立花姫 を
近く 沈めて、遠くも いにし、
昔がたり の 勇氣を 鼓して、
いたく 忍べは しのぶに 餘る。
ゆふべ 寂しく ひろがる おも の
恨み、無限の 浪間を 渡り、
淺き みぎは に 寄せては 返す。』

あはれ、とこ世に 若ゆる 海よ。
海よ、わが身と なやみを 分て。
あたり 靜かに、山々 黒き、
空に 残るは 三日^{みか}月 ばかり。
『戀』と 眞砂に 指もて 書けば、
白き 小浪は 手を さし延ばし、
さつと ぬぐひて 引きしりぞきぬ。

三 君を思ひて

君を思ひて 濱へを行けば
濱の真砂の 數さへ かさむ。
わが身も かくや 碎け行く。

君を思ひて なぎさに 立てば、
浪のうねりの 道こそ あはれ。
わが身も かくや 消えて行く。

君を思ひて 三日月 見れば、
暗き磯わの 音にも 響く。
わが身も かくや 細り行く。

行きも やられず、去りもし えせず、
まどふ 心に いさり火もゆる。
わが身も 遠く 浮ぶ身か。

君を思ひて 筆すみ 執れど、
苦吟 一夜さ 詩の句を 爲さず。
ああ、われ 若き 戀や する。

四 わが影法師

われ行けば、かれも 行く なり、
われ立てば、かれも とどまる。
月かげに、夜のごとく 黒く、

投げ出だす 二間の 法師、
浪 あらふ 砂 平らかに

よこたふる 二間の法師。

振ると 見ば、振るへこそすれ、

ゆると 見ば、ゆれても見ゆる。

その頭 潮に うつして、

潮 いまだ 浸し能はず。

その足に 蟹 這ひ寄れど、

蟹 かつて 攀ち、もし得せず。

すそ 長く 引くは、貴とき

神わざ か、はた海靈か。

いづこなる 國の 秘密を

身に もちて、ひそみや來けん。

たゞ 無言 われに 従ひ、

松原 を 見えつ 隠れつ

わが宿 に のぼりぞ來たる。

五 いさり火

おほ浪 靜かに 眠りに 入りて

ゆめ路 に かどやく 光の 如く、

小屋の つき夜に まぎれて 浮ぶ

その火 よ、何もの、見えては 消ゆる。

み冬の 夜ならば、氷を 踏みて、

山より 出で來る 魔性のものが、

藁火を ともして 海へを 渡り、

獲物を あさるに さも 似る影よ。

三更 ふけ行く 自然の あなた、

無よりや 産るゝ 世界の 如く、

明滅 起滅の 境に ありて、

なほ且 燃ゆるは如何なる 熱ぞ。

すなはち、東の戸びらぞ、なかば

開けて、眞白き馬毛を吐けば、

おほ空 別れて、浪間を遙か

歸るは、小黒き釣り船、小船。

先なるひびきも、あとなる音も、

神矢の如くに亂れず 寄り來。

なぎさに立てるは娘か、妻か—

みよしの左右をいだきて 迎ふ。

六蟹に寄す

夏の眞晝 暑きを

海に 去るは 大いを、

寄せて 返す 浪間に

のがれ出る目は この蟹。

軽く 砂を よこ遣ひ、

昔をも 知らぬ 行きかひ、

大いなるを あざけり、

ちさき まゝに 氣満てり。

世にも 奇しき 餌を 食み、

ちから 強き 小ぼさみ、

なれ、藝術に 身を 入れ、

立てば 玉をこそ 切れ。

ひろき 濱を 迷はず、

夕 潮

長き 日 をば あせらず、

人目 遠き ほそ穴、

おのが道 を 追ふ かな。

七 高岸沈思

(鷹太郎木村君に)

高き 岸べ に うち出で、

洋々の 浪 見渡せば、

秋 の 初風 身に 吹きて、

歸京 の ころ 動く かな。

見よや、大海 目もはるに

あま照る 光 照らすとも、

威名 天下 に 赫々の

偉人 に 比して いづれ ぞや。

見よや、白雲 北に 湧き、

なか空 さして 登るとも、

代々の 亂軍 きり抜けて

その名 を 擧ぐる 雄者 あり。

如何に 沖べ の 暴風 は

阿修羅 の 如く たけるとも、

一夫 をどつて 泰平 の

政治 を 亂だす たとへのみ。

怒濤 二十重 に 捲き倒れ、

大地 の もとめ ゆするとも、

立ちて 静かに ほゝるむ は、

いづれの流の哲士ぞや。

見よや、よろづの神々を

産みてし、うしほ渦と化し、

めぐる無間の上をさへ

ひと葉の船は渡るなり。

あはれ、自然をのり越えて

自然に歸るものは誰ぞ。

人はむくろを解脱して、

あらたに人のわざを知る。

いまだ功名投げうたず――

いな、いな、骨にとほるまで、

海のうしほの若やぎて、

いかれよ、鳴れよ、とどろけよ。

高き岸べにうち出で、

洋々の浪見渡せば、

あまた有情の泡立ちて、

君住む京ぞ忍ばるゝ。

海邊雜吟(下)

一朝出船

御富士のいたゞきおもてを拭ひ、

たな引く貫抜き左右に揺れば、

世びとは短き夢より醒めて、

濱邊は忽ち歡呼のひゞき。

空氣は新たないのちを傳へ、

眞砂は平らかに清きを誇る。

男波は馳せ來つ、女波は招き、

出船のよそひを待てるに似たり。

もと、これ、鍛へしからだと腕に、

海をばおのれの家ともする子、

もと、これ、手馴れしたくみに依りて、

その足、輕くも作れる小船。

『えいや』のかけ聲、ちからを呼びて、

押し出す、獵船、勇める、隼子、

ちいさき世界に朝日を浴びて、

浪間の奥へと遠くも消えぬ。

二朝の夢

夜網引の朝ぶね、着きぬ、

勇むはたどに魚ならず、

人々の罵る聲に、

寄せ來る波もきほひあり。

夜もすがらあさりし獲物、

小砂の上にうち撒けば、

跳ね飛ぶは大鯛、小鯛、

甲頭魚、三島、かながしら。

いろくづに賑ひ初むる、

見よ、大濱の西ひがし、

左には サフランの雲、
右には 富士の新よそひ。

この世界 唯一の 實、

いよいよ 光放つ をば

相應しき 値踏み や せんと、

いづこよ 來たる 人 あまた。

朝日 照る 砂山 越えて、

丸籠 擔ぐ かけ 長く――

その昔、ユダヤの 野邊を、

水がめ 運ぶ女の 如し。

つぎつぎへ 現はれ 來たる

その影 計へ 立たずめば、

物思ふ わが身は 今や
太古の夏の夢に入る。

三 あしたの神

富士の いたゞき 赤らむ は、

あしたの 神の 露拂ひ、

東の 網を 地引き する

網に 明け行く 濱邊 かな。

四 秘戀

浪の上に 日の かけ、

落つる 朝の すゞ風、

われは 濱へ さまよひ、

よべの夢のあと追ひ。

砂の上に君が名、

かさね書くも おろかや、

とても 遂げぬ 秘め戀、

白き泡のよそほひ。

海に浮かば、この胸

獲物なきの釣り船、

陸にあらば、この魂

行く手 知らぬ あり様。

見えて のぼる いとゆふ、

あはれ、熱き 血を 吸ふ、

われは 身をば 横たへ、

けふも いただく 小悶へ。

五倉吉

倉がお歳は まだ 十六と、

三十三の 澄ました男、

われも 詩に 飽く 時あらば、

君が心に 歸りたや。

六夏の眞晝

夏の眞晝、譬へば

白きをんなのむくろ、

立てば、四尺七寸、

光放つ 眞うつろ。

みどりの髪ふくよか、

熱き風に解ければ、

焼けし砂の上にも

ありきや、誇の餌ば。

六夏の真書

玉の如き心の

露に延べし影、

世びとの目にうつらで、

三十あまつ御空追ひたげ。

日より生れ、その日に

焦れ行く日は、なが戀、

幾萬億里のぼりて、

身をや揺するかげろひ。

あはれ、どよむ深み。を

水涌きぞ出でし、テチスよ、

わが目映ゆき間に、

なが御すがた見たるよ。

高安 七夕べの神

とんぼ釣る子の、かしら、をば

夕べの神は、そと越えて、

そよげる、蘆の、一葉より

おのづと暮るゝ河邊、かな。

高安 八、高安月郊君に

寄せては 返す 白浪、
 ひびきも 更けて 三日月、
 横さに 照らす 海のも、
 平らか なるよ わが胸、
 凄きを 獨り 忍びて、
 光は 青く 消え行く、
 心の空に 住まへば、
 濱邊も 遂に みな底、
 かの世に 耳を 澄まして、
 亡き人々を 招けば、
 かたち は 見えす その聲、
 至るに 遠し その岸。

立たすむ 足を 洗はれ、
 はじめて われに 歸りぬ、
 さればぞ、西の都 に、
 清雅の 詩人 今 如何。

九遠つ島根

(有明君に)

遠津海 遙かに かすみ に 入り、
 かすみ の 奥より かしら を 擧げ、
 沈思に 耽りし その ほこりを
 ほのかに 示めす か、大島が根。

吹き来る しほ風 なまぬるくて、
 南の 熱さを こなたぞ 知る、

七重のしき波 寄せ來りて、
海路の響きをこゝにぞ 聴く。

戀しの姿や、それ、靜かに

ひじりが 御胸に 映れること、

その身の なかばを 深みに 籠め、

みどりの 冠を 御空のはて。

ああ、その みどりは 轟く浪、

はためく 御空の間に 浮き、

眠れる 如きの その 島根を

ゆふ霽 包むに まだ 早きよ。

行きにし 御靈の 住ひに 似て、

平安の 溢るゝ 墓場や ある。

世の物思ひの 群がる時、
心の船出し、君と 行かん。

十御富士

(花外君に)

わが世の つとめを けふも 終へて、

濱邊に うち出で 富士を 見れば、

御富士は 寂しき かしら 擧げて、

わづらひ 解脱の 神に 似たり。

ゆふ日の 光は 遠く 沈み、

その 薄むらさき 雲を 疊み、

ああ、なぎ渡れる 深き空に

輪廓 正しき 峰の さまよ。

ゆるがぬ 力を ゆふべ に 染め、
いよいよ きわ立つ その 御姿、
とどろく 水際みぎはに 心 澄めば、
いよいよ 貴とき その 居すまひ。

高き に 浮びて、とこしなへの
あま照る やすらひ、實にも それか。
ゆふぐれ 静かに 隠れ行きで、
わが身 に 残す は いこひの 影。

われ、今、茅ヶ崎、詩神 追ひて、
心 を 小暗こくらき 波 に 砕く、
君、去年、甲州、山路 行きで、
御山 の すがた を 如何に 見しや。

静 思

ああ、世の歡樂

ああ、世の 歡樂、あまきに 過ぎて、
夢路ゆち に またがる 春、その うつつ、
遠きは 薄もや、近きは 花の
ねむりか、心の まなこ を めぐる。

それ、たゞ しきりに 降る ほそ雨の
窓 には、そとろの 戀もや 秘めん。
それ、たゞ 曇りて 吹く やわ風に、
浮き立つ 思の いこひ や 住まん。

ああ、とこ静かの 春、その うつつ、

うつろのまほろしあしたに破ぶれ、
大地は音なきほろびのかけを
一ひら胡蝶の羽がひにまかす。

若き身もたげてわが世を追へば、
ああ。亡き乙女よ、見えては消ゆる。

湖畔の静思

(一)

琵琶のうみづら風なきて、
雲一片の往き來だに、
悟りを得たる山人の
やすきに増して見ゆるかな。

青き御空の日の丸も
融けては、こゝに形なく、
高き山邊も静きては、
そのことしさを失ひつ。

浅きに似ても、浅からで、
底に達せぬ天の色、
暗きが如く、暗からで、
うちに輝くその光。
神代分れしその昔、
寂しく照らすエーテルの、
上下左右を現はすで、
空に満ちけん有様よ。

追ふて 限りは 知らねども、
廣きが うちに 平和あり、
つかみて 手には 残らねど、
平和の うちに いのちあり。

歌の ひぢり が 筆取りて
ながめし、水のとこしへに
よどむ、力のうしろには、
深き 御かけぞ 動くなる。

(二)

われ、端なくも、詩の界
乗りて 來りし 一葉舟、
軽く 浮びて 物もへば、
うれびに 延ぶる いかり綱。

下に 向ひて 沈み行く、
長き おもりに 底 觸れて、
をどり出づる は、龍の宮、
龍が さぐる 玉 ならず。

また、かの 燃ゆる 思をば
眞あが の 紐に つなぎ合ひ、
この世の 苦をば 逃れけん、
むくろ の ひとつにも あらず。

はた又、深き 岩かけの
下界に つづく ほら穴に、
紫紺の 實をば 結ぶてふ、
萬年青の 若葉 それならず。

探ぐる 目あての あらばこそ、
かち 取り直す 身にも なれ、
浪の まゝなる わが思、
迷ふが まゝの 西、東。

混沌 いまだ 開けずば、
昔の さまに 歸るなり、
無念 無想の 海の上、
たゞよふ われも、はた 舟も。

(三)

水のおもより 立ち登る
あしたの 虹の 棚引かば、
晴れし 御空の 長橋は

長等の山を 越えん とし。

野州の 松原 ゆふぐれの
虹 あらはるゝ その時 は、
落ち来る 雁の 列ならで、
堅田の せとを うち渡り。

香取が浦の かぢ枕、
浮き寐の 鳥の 羽根のこと、
七色 あびる 小蒸汽の
一つ二つも 静かなり。

ああ、なやみ ある われも 亦、
まなこと 共に 延び行きて、
くれなる 薄き 綾絹の

つゝむがまゝに消えんかな。

(四)

われ、長濱の岸べより、
西にちろすづく日を見れば、
その光線に送られて、
みよしを立つる帆かけ船。

その影 小さし、遠ければ、
その足 遅し、廣ければ、
その聲 聴かず、隔たれば、
その帆 光るよ、白ければ、
たゞ沖合にとどまりて、
行くか、歸るか、さながらに、

別れを惜むわが友の
高き岡べに立てること。

ああ、彼一步、われ一步、
進むにつれて、わが體も、
みぎはの蘆の葉に乗りて、
引かれ行くらんこゝちする。

(五)

あはれ、寂しき海のおも、
自然のさかひ薄らぎて、
限りなき世の悲しみの
やわらく、奥ぞ忍ばるよ。

ああ、思ひ見ば、こゝちも亦、

御法に あかき 浄土院、
『眞如』の 月を 抱きつゝ、
最澄 眠る ところ かや。

あはれ、ゆかりは 紫の
藤波 よする 樹のかげに、
『知止』の 道理を 見し人の
神と 交はる 書院 かや。

ああ、また 思ふ 草まくら
旅の ころもを 脱ぎ更へつ、
おのが 俳句を 楽しみて、
翁の ゐます いほり かや。

(六)

げにも、妙なる 玉垣の
うちに ますます 御姿よ。

ああ、貴しや この社、
誰が 祭りけん その主よ。

圓き かぐみは 懸け無くも、
おもひに 映る さかき葉や、
水は 流れて、而も 亦、
かるゝ時 なき わだつみよ。

いつの世 出で、千斤の
おもき 袂を ひろげけん。
いづこの果に、たゆみなき
羽がひの 裾は 及ぶらん。

人は強いても 定まりの
目あてを好むものなれば、
なが名によりて、忽ちに、
異なる魚を呼び起し。

至る處に、なが足の
見えで、這ひ行く おもかげを、
みゆる 田畑に 侵し入る、
大蛇の如く 歌ひ出で。

あした ゆふべの 眺めよく、
澄みて ゆかしき なが面を、
辨才天に なぞらへて、
竹生の島に たてまつり。

月の夜長に 鳴る浪の
響を糸に たとへけん、
なが園りをば 繪がき見て、
琵琶湖と 唱へ 始めけり。

(七)

見よ、夏の頃、その水の
色 白ければ、雨となり、
多、雲 湧きて、天上の
山 また 山は 雪模様。

比良八講の 風 吹かば、
今も 法華經 となへつゝ、
舟人どもは あらたかの
天狗が岩を かしこみつ。

夕潮

ああ、恐るべき 比叡おろし、
北の 舞ひ行く 浪 立たば、
熱き 火焰と 這ひ延びて、
散らふ しぶきは 燃ゆる こと。

見よや、白浪 十重 二十重
倒れて、起きて、高まれば、
あらしに なやむ 大木 の
天に さからふ 勢よ。

さはさりながら、大わだ の
奥なる わだに 比べ見よ、
二八月の 荒れ時 も、
神の 無聊を いやす のみ。

(八)

洋々たる あわ海 の、
ながれよどみし その水よ。
重き力は 三井寺の
鐘に 廣がる その胸よ。

神秘は こもるしき浪 の、
深き 御かけに いのち あり、
太古の さまの あけ暮れて、
寂しき うちに 光あり。

嗚呼 琵琶のうみ、風 なぎて、
紫の色 浮ぶ時、
人に 譬へば、とこしへの
夕 潮

やすきを 得たる こゝち かな。

圓き石

この世の 苦みをも
かつて 嘗めぬ わが友、
昔に 歸るころ、
之も 圓き石ころ。

樂しき空に ありて、
嗟、土を 踏まぬ 足乎、
高く 飛ぶも 飛ばぬも、
凝りて 結ぶ あま雲。

ネビユラ 冷え氷りて、見よ、

照らす 小屋の 月夜、

圓きに 就く 靈 あり、
自然の まゝ その態。

いまだ 憂ひ 悲しみ
もつれ出でぬ この君、

巻くが まゝの から糸。
歌ふものは、赤人。

佛教 こゝに 來らず、

人、死の 味を 知らず、
花の かげに 枕し、
眠むる さまを 醫ふらし。

暑き 時も いくとせ

夕 潮

過ぐる 家の 庭もせ、

寒き 時に 會へども、

道に 何の 毛ころも、

取りて 見えぬ その裏、

打てば 堅き そのつら。

過去 を 問へど、示さず、

口 なければ、その管。

棄つれば、また、軽らか、

まるぶ ことも たまさか。

行ふ 問へど、語らず、

なさけ 無きか 然らず。

雨に ぬれて、忽ち、

乾くに 早き かたち、

涙 もろき ものには、

住ひ 易き この庭。

雲 無心 にして 出で、

天に かさす ゆふしで、

之は 立つ を 慎み、

獨り 神や 見る 意味。

太古 の さま 傳はり、

こゝに この 手本 あり、

日にや 新らしき 石、

盡きぬ さちを この岸。

島の歌

夕 潮

あはれ、戀しの 佐渡が島、
翁が 歌ふ 荒海 に、
日蓮 ゐます ものならば、
宗教 いまだ 命 あらん。

あはれ、ゆかしの 隠岐が島、
その身 を わぶる 法皇 の
御魂 ゐまさば、今も 尙
偽忠 の 人は 耻ぢ死なん。

ああ、久方の 豊岐、對馬、
さかひ を 越えて、敵國 の
船 押しよする その日 にも、
その 犠牲こそ 憂かるらめ。

ああ、臺灣 は わが 版圖、
千島 の 果も 覆ひ羽の、
南北 長き 島々に
なやめる、人は 幾許ぞ。

ああ、松島 の 秋 汐えて、
西行 筆 を 授げうちぬ、
竹生の島 の 名は 高く、
琵琶湖 に うつる 月のかげ。

ああ、島々は 多けれど、
われに ゆかりの 淡路島、
淡きすがたは 朝じほの
かすむうちより 現はれつ。

須磨の濱への松風の
夢 吹き拂ふ 故里や、
むかし いませし たちねの
母の 御顔の 浮ぶ ごと。

呼べば、慈愛の手を 擧げて、
われを 招かん ことしつ、
あめば、満ち来る 新しほに、
わが身の 今を 問ふ ごとく。

ああ、われ 旅に さまよひて、
つとを 納めぬ 久しきよ。
十の 指をり かぞふとも、
いにし 月日は 歸り来ず。

わが 日の本 の 島々 の
敷に わたりて、わが思
千々の 亂れ を 解き分けて、
やすきを 給ふ日こそ 待て。

有木の別所

(成経が獨語)

松の 樹立 一むら
低く 茂る 山かけ、
上を 慕ひ、ひたすら
「厭離穢土」といひたげ。

その麓に 小高く
盛れる 土よ。なれのみ、
夕潮

奢る 平家 長らく

ねらひし、人の たのみ。

たとひ むほん とは云へ、

源氏がた の たくらみ、

多く かたらう 家々、

一も 來たり 得がたみ。

うつり易き 花の香、

かはり易き 世の常、

恨み かくつも 愚か、

こゝに 少將 成經。

かへり見れば、かの島、

沖津波 に こと寄せ、

都だより 待つ ひま、

はやも 露 の 一とせ。

ながらうて こそは 増され、

胸に 迫る 悲み、

戀ふる 父は 殺され、

何を ひとり 樂み。

おのれ、憎き 清盛、

吉備の國 へ われをも

定め置きて、その 宣言

更へし さまの 刈り菰。

やがて いち門 亂れて、

亡び失せん その時、

夕

榮華の夢は覺めて、

あはれ、残らんいへ軒。

ためしは良き如意尻、

うたてげなる賤が家、

障子にさへしみ入り、

欣求淨土こんぐじやうと見ぬかや。

身こそ思ひ捨てたれ、

いまだ、晴れぬこの胸、

響く鐘にほだされ、

日暮ひくれに浮くうき舟。

つなぐ玉の緒絶えば、

われは知らず、山寺やまでら

訪ひ來るものありせば、

たゞ古跡を見がてら。

あはれ、朽ちしその壁、

しるしばかりこの墓。

春のあらし吹くなべ、

夜もすがらの谷なか。

噫、八重もぐら押し分け、

苔の上に手をつき、

いたく叫ぶあり明け、

聲冥途まで貫き、

萬事忘れて眠むる

君が耳に至らば、

夕潮

噫、一たび 千早振る

神を 起せ、ぬまさば。

われと 入道 康頼、

千重の 卒都婆の 功德、

かの 鬼界が島 より

渡り來たる この奥。

聖き 風も 常樂。

眞如に 照る 御靈よ。

既に 消えし 善惡、

今 一返の 味かたよ。

ありし 昔を 語れ、

死に後れし なが子に、

わが誠意に、誰れ誰れ、

數へ擧げよ 世の鬼。

島は 名のみ 悍くも、

恐るべきは 都よ。

たとひ 歸りのぼるも、

こゝろ細き ところよ。

さばれ、こゝに 參るは

またと かなひ難からん。

この 卒都婆を 立つるは、

噫、生死の 巻ならん。

七日 七夜の 勤め、

明けて つらき 別れや、

夕潮

まなこ 曇る しのゝめ、

ふたり 出づる 破れ家。

あはれ、有木の別所 よ、

都を 去る いく谷。

あはれ、父の 居場所 よ、

何億里、苔の 下に。

*成親、如意尻の古障子に手習ひして、この兩句の心を示せる跡ありき。

散り行く紅葉

ああ、もみぢ葉の かげ 赤く、
てん地の 氣をば 呼吸して、
散り行く さまを 譬ふれば、

その徳 高き 山人の

こころ 静かに、安祥と、

知死期に のぞむ すがた かな。

山の 立ち樹も、岩が根も、

苔も、草葉も、はた 下に

渡せる 橋も、小流れも、

ともに 縁ある その 御弟子。

その 悲みを あさやかなの

光に 放つ ゆかしさよ。

四大 分るゝ 小あらしに

一葉 一葉の 舞ひ下る、

蝶か 花かを 水に 浮け、

水は 流れて、その列を、

夕 潮

沖の舳^{しころ}のつづくこと、
岩間がくれに運ぶなり。

あゝ、行^{ゆく}さきは、いづこぞや。
われ、その道を見守れば、
先きの船より消え失せて、
相つぐものは限りなし。
すべてひじりの乗るなれば、
他^{たか}界に入るや、そのまゝに。

天の橋立にて

(舊友さめぐり會へる折)

天神 地神 九^く世の戸の
あまの橋立 ゆふぐれて、

こゝろ細くも 消え残る
松原 ながき 浪の音。

つとみにしては、その昔、
君が好みし歌ならず、
笛とし 聴けば、且は又、
わが 吹き慣れし いろ 出です。

右に 左に 吹く風 の
ひびきよ、しばし 止みねかし。
千^{ちとせ}歳の浦よ、名の如く、
久しき友を なくさめよ。

ふたり 別れて 十餘年、
わかき さかひ は 夢 ばかり、
夕 潮

海やま 遠く「時」の 矢の
行くゑ たづねて、相知らず。

われは 東に、君は 西、

さすらふ 空は 高けれど、

飛びかふ 雲の 中絶えて、

うれひに 沈む 世なりけり。

さばれ 相會ふ この日こそ、

むなしき 月日 よび起し、

老い行く われも いにしへの

わかき に 返へる こゝちすれ。

しづかに うてる わが脈の

ちしほに 今や 東風 吹きて、

千々の おもひは わが胸に

うしほの 如く 湧き出でつ。

わが故郷に、うちつれて、

すゞき 釣る 夜の うれしさも、

之には いかで 増すべきぞ—

旅に 來りて、月 無くも。

満つる 記憶のおのづから

この松原に 輝きて、

暗き 夜つゆは 千萬の

こゝちを 照らす 光かな。

堇と少女

夕潮

(お俊傳兵衛の墓に少女

の墓をつむを見て)

なれも 宿世は 清く

結ぶ 露の身 なりけん、

白き からだ に 宿り、

ゆふべ に 引く かげ 二間。

立てる 細腰 まげて、

かどむ 乙女の すがた、

生れ更らば、同じ

すみれ と 咲かん その 邊端。

なさけ 深めて 圍む

墓の 底も 練り舞、

冥途 に 立つる 家ぞ

多き お俊 傳兵衛。

責むる 勿れよ、世びと、

あらぬ 道の さまよひ。

義理 に からむが 爲めに、

罪を いだく その戀。

あはれ、あだなる 心

胸に をどる 防がば、

をんな 形に 追はれ、

その美 つひに 枯れ把。

許すべき ところ あり、

いまだ 盡せぬ いのち、

こゝに 董と かはり、

夕 潮

咲きや 出でし おもうち。

心して 摘め、をとめ、

人を 誘ふ むらさき、

袖に ゆかりの 運命

なれにも あり、このさき。

秋 吟

(雨中に立ちて)

蛇の目がさ さしかけて、

歩む道 踏みしめて――

その柄をば 持ちかゆる、

心さへ 降り消ゆる。

雨の音

静か なり、

けさは 尙

その ひかり、

見ゆる 物

皆 あかき、

空の色――

誰が 畫がき。

傘のへに

散る もみぢ、

ひと葉にも、

この 小虹。

里は今

秋 深し、

返り見ば、

かの 土橋。

二の 笛

夕 湖

道のべに 風も凍りて、
寒き夜は 人のかけなし。

家々の 軒に連なる、
瓦斯燈も ねむたげに見ゆ。

月のみは 高く照らして、
やせ犬の おそれ増すなり。

憂々と さわべるの音、
長靴の 巡査過ぎけり。

その跡に 出會へる二人、
『爲吉か。』 『あ』と、立ちどまり。

持つ杖の さきを交して、
手ごたへを 互ひに受けつ。

『仕事は』と 高きが問へば、
『まだ』なりと 低きが答ふ。

『更けては、な、 わしは眠むたや。』
『さて、男、 いま一まわり。』

高下駄の 音ふみしめて、
四辻を 右と左へ――

別れ行く 笛の響に、
あめつちは 親子と聴ゆ。

詩史
豊太閤

われ、豊太閤の事蹟を見て、最も感ずるところはその外征にあり。彼、朝鮮を得れば、大明國に向ひしは勿論、明國を平らげば、印度、ペルシヤ、否々、世界をも討伐せしなるべし。然して、その目的とするところは、かゝる外界の事件にあらざりしなり。彼は、無意識的に、自家心靈の要求を満たさんことを欲せしなり。一國を擧げて、その内部的安心を求め居りしなり。實は、その手段を選ばずして、之に盲進せしなり。されど、われは、光秀征伐時代の秀吉よりも、征韓時代の豊太閤を愛するものなり。先きには、機智あまりに多くして、人の同情を引かず。後には、大愚に似て、而も神々しきところあり。國家の内部的生命を與ふる文藝その物は、知らず識らず、彼に依つて、その眞意を發揮することを得たりと云ふべし。

豊太閤の事蹟を見て、最も感ずるところはその外征にあり。彼、朝鮮を得れば、大明國に向ひしは勿論、明國を平らげば、印度、ペルシヤ、否々、世界をも討伐せしなるべし。然して、その目的とするところは、かゝる外界の事件にあらざりしなり。彼は、無意識的に、自家心靈の要求を満たさんことを欲せしなり。一國を擧げて、その内部的安心を求め居りしなり。實は、その手段を選ばずして、之に盲進せしなり。されど、われは、光秀征伐時代の秀吉よりも、征韓時代の豊太閤を愛するものなり。先きには、機智あまりに多くして、人の同情を引かず。後には、大愚に似て、而も神々しきところあり。國家の内部的生命を與ふる文藝その物は、知らず識らず、彼に依つて、その眞意を發揮することを得たりと云ふべし。

戦捷の祈

豊 九

東南 やうやく 雲 やわらぎて、
西北 はじめて 風 また 静か、
三拾年功 われ 誇らずも、
四海 の 外 まで 威は 及ばんず。
徒手して 天下 を 握れる ものは、
いにしへ 頼朝、今 はた 誰ぞや。
好友、あはれや、世界 を 知らず、

富士野 の 卷狩 たゞ 止んぬる よ。

(二)

獨立 九年 の 汗馬 の 勞も、
なほ且 幕下 に 英雄 さかえ、
勢 さながら 大わだつみ の
泡立つ 如くに、ああ、鳴り響く。
肉 飛び、骨 さげ、氣は 碎くるも、
堂々 この士 を いかんが 黙す。
微力 に 起れる この わが身 には
關白 何ぞや、早や 投げうちぬ。

(三)

去年 の この日 に 諸侯 を 集め、
聚樂 の 屋形 に 外征 を 議す。

豊 太 閏

五人の宿老、五人の奉行、
中老三名、みな列なりつ、
備前の宰相満坐に代り、
讃辭を呈して異議なくありき。
十萬は直ぐ立ちどころ、
艦船七百われ今率きゆ。

(四)

人間僅かに百歳ならず、
快ならざらんや無前のいくさ。
美々たる戦袍われ人かざり、
金銀珠玉の大刀佩かして、
大軍肅々旗幟をたどし、
雞林八道、明洲四百、
羅、晨旦をも一つに統べば、

やまとの言葉を西夷に擬せん。

(五)

邊境日本の土のみ踏んで、
いつまで祖先の武烈を濟す。
京師は主上のましますところ、
豈、それ、畿内に躡せんや。
歡慮をうつして北京に迎へ、
大唐關白これ秀次か、
故國は秀家、高麗には岐阜の
宰相秀信、最もよけん。

(六)

つゞいて、老将また舊臣の
いさをに報いて國々取らせ、

豊太閤

宇内うだいの形勢 たとへば 春の
うな原 廣くも とく 治まらば、
わが身は 身づから 愛兒を 追ふて、
とこ世の 御國みくにの 神とぞ 成らん。
露とも 消え行く 淨世の中の
のぞみ は、その他に、また あるべしや。

(七)

元來 無物の わが身の 上に、
有形うしなの 野心は 國家の 爲めぞ、
限りを 知らざる この あめ地と、
誰れかは 空しく ながらふべけん。
鶴松 三歳 をさなく 逝いて、
悲痛の 靈境たまげ われ 感じ得ぬ、
清水塔上 古今 をいたみ、

丈夫の本領 その時 決す。

(八)

ああ、われ 賤しく おひ立ちぬれど、
目輪 孕みて 産れし 子 なり、
普天のもと、また 率土ひつちの 濱に、
多年の 思を 遂げでや 止まん。
今上皇帝 且 上皇 に
拜別 終はりて、親兵 二萬、
文祿元年 卯月うづきの なかば、
秀吉 來たつて この社 に いる。

(九)

噫、いつく島がみ、往古に 渡り、
潮路を 守護する 御靈みたまと 稱す、

われらが 出で行く 前軍 後備、
 靈験 いやちこ あらしめ玉へ。
 げに これ 仙島、岸 うつ波 も
 心耳 を 洗つー 梵唄 の 曲。
 やがては 攻め入る かの むらさきの
 龍宮城 も ま近し、あら、ありがたや。

(十)

供養 の 萬燈 つき夜 の 如く、
 海上 遠くも 光 は をどる、
 百折廻廊 舞樂 と 變じ、
 われ また 登仙 羽化する ものか。
 虚空 に 花 ふり、蝶 あらはれて、
 御代 泰平 とぞ、歌ひて かなづ。
 ほとけ の 王國、異教 の 土にも、

わが目 は 開らけて、冥福 浮ぶ。

(十一)

ああ、われ 賤しく おひ立ちぬれど、
 日輪 孕みて 産れし 子 なり、
 普天のもと、また 率土の濱 に、
 多年 の 思 を 遂げでや 止まん。
 噫、いつく島がみ、往古 に 渡り、
 潮路 を 守護する 御靈と 稱す、
 われらが 出で行く 前軍 後備、
 靈験 いやちこ あらしめ玉へ。

清正望岳賦

朝鮮 北境 いま 早や 盡きて、

豊 太 閣

攻め入る あなたぞかの良哈、
 八千騎兵はいち城拔きつ、
 貨寶を收めて南に還る。
 追撃胡兵の鋒さき迎へ、
 清正身づからしんがりすなり。

時、これ、當年七月なかば、
 五穀もみのらぬ異邦の風よ。
 夏なほ寒きは、日本刀の
 切れ味さとつて、靡けるさまか。
 王子は兄弟俘虜となりつ、
 知らずや、威鏡南部にあらん。

無謀のしれものいのちを忘れ、
 夜叉上官をばおそひて來たる、

たやすくあしらひ、且退きて、
 進むはいよいよ平安道か。
 わが軍たまたま道失ひて、
 浪蒼茫たる海べに出でぬ。

二十重のしき浪御空の雲に
 つらなる境は如何なる國ぞ。
 噫、さなきだに、又征衣を着ては、
 生れし故郷の戀しきものを、
 見よ、見よ、西南霞を開き、
 はるかに浮べるわが富士の露。

譬へば、暗夜を迷へる船の
 北斗にみよしを轉する如く、
 従ふ兵士は皆もろ共に

芙蓉のすがたを動かぬ目あて。
將軍よろこび馬より下り、
かぶとを脱して、再拜跪坐す。

「ああ、われ、貴とき義父、太閤の
御もとを半歳辭し奉り、
日々向ふはたゞ西北と
思ひしことこそ過ちなれや。
遠くも來にけるわれらがいくさ、
わが大日本はかしこの空ぞ。

「勝利のしらせを待つらん人の
ありとし頼めば、いづこの果も、
われには聚樂のたゞあたたかき
御殿に同じ」と、かしこみ起きつ。

再び馬上に士を見渡せば、
きほひは凜々あらたに振ふ。

明使追放

(一)

金箔燦たる瓦を葺いて、
光明あまねき伏見の城よ、
たたみは千疊錦をかざり、
柱に大和の古木ぞひかる。
『殺生關白』先年逝いて、
棄君この時僅かに四歳。
天下の大將平和をのぞみ、
ここ、今、明使を引見すなり。

(11)

毛利の輝元 兵士を列ね、
 二行の護衛は厳しくゆたか、
 警蹕静かに帷幄は開らけ、
 太閤七士とすまひをただす。
 正副明使は仰ぎも得せず、
 人手にすがりて御前に進む。
 膝行ささぐるその禮物は、
 金印べんごう服ふくいかなるしるし。

(12)

天下はよろこび、家康以下に
 その章服をばおのおの着させ、
 手づからかむりをおし戴いて、

袖ひろごころものいきほひ揚る。

仰せをかしこみ、かの墨染の

承兌しやうたい冊書さくしよを讀み上げはじむ。

あはれや、冒頭その語に曰く、

『なんぢを封じて日本の國王——』

(13)

行長かたへにおのき懼れ、

列坐の英雄一語を吐かず、

秀吉忽ちまなじり裂けつ、

排服ひきやくは破れてかんむり飛びぬ。

『われ今日本を手中に握る、

王位を欲せば身づから可なり、

皇統綿々この天朝に、

夷狄の駄言は以ての外ぞ。

(五)

『ああ、人、われをば小猿と稱す、まことにかなへりこのわが様は無禮の文字を得んとて、ここになんぢら風情を引見せんや。惟敬は奸惡、詐謀をいだし、明韓二國を取りつくるふか、攝津は小才、恥辱を知らず、その罪いづれも誅死に當る。』

(六)

『阿虎は、直ちに、奉行の衆と兩使を鞭うち、とく去らしめよ。方亨、なんぢは何をか爲さん、』

北京に歸りて、わが意を告げよ。
秀吉怒つて、大師を出だし、再び内地に進撃すべし。
朝鮮三道わが目にあらず、明州四百を屠るは近し。

(七)

『ああ、われ愚なりや、この鬱忿は、諸公ともろ共、豈忍ばんや。西南四道の勇士を募り、明年二月を發途となさん。秀秋、このたび主將となりて、秀家、秀元、その副たれよ。小西は阿虎と先鋒きそひ、このあやまちをば千古にただせ。』

(八)

金箔 粲たる 瓦を 葺いて、
光明 あまねき 伏見の城よ、
たたみ は 千疊錦を かざり、
柱に 大和の 古木ぞ ひかる。
數百の 兵船、十萬緋緋、
東西 四方を 意中 収め、
天下の 大將 熈和を 遂げず、
ここ、今、明使を 追放すなり。

蔚山城

大明、諸道 の つは者 集め、
三十三將 いきほひ 奢る、

右軍 は 芳春、左軍 は 如梅、
高策 その間 中軍 ひきゆ。
韓國七將 また 加はりて、
蔚山修築 たかばに 迫る。

たまたま 嚴寒、しはす の 空に、
草木 いのちの かをりを 吐かず。
守將は 水路の 堡寨に 出で、
城兵 一しほ 土木に 努む。
土をば 重ねて 水 盛りかけば、
數丈の 銀壁 忽ち 成りぬ。

將軍 奮戦 歸ると いへど、
四面は 全く 敵手に 落ちつ、
十日の 籠城、十日の 飢渴、

牛馬を屠つてその數足らず。
血しほの氷を砕いて食みて、
釜山の援兵至るを待てり。

黒田の孝高梁山に在り、
使を發して危急を報ず。

豊臣秀秋諸將を督し、

五萬の騎卒は勇んで進む。

清正さながらその意氣自若す。

内外應じて、相合撃す。

敵軍三脇あなみは亂れ、

總督楊鎬今早やいづこ。

夜さむの平原、露營は倒れ、

凱歌の響は千里に渡る。

月色皓々根城と映じ、
殘兵却つて行るに迷ふ。

薨去

天正五年(一)

六十三歳 太閤 老いて、

外國 いまだに 降りを乞はず、

四屯の精兵 四城を守り、

その餘は 全くまかりて 歸る。

七年征役 かへり見 すれば、

過ぎにし 醍醐の 豪遊のみか。

花また この世に 散り行く 習ひ、

殿下の病は いよいよ 篤し。

(二)

この時 八月、徳川公を
御もとに 招きて、のたまひけらく、
『われ、意を果さで、且 死に失せば、
中將 幼弱、世に 亂 あらん。
之をば をさへて 鎮めん ものは、
重鎮、なんぢの 外ある べしや。
幼兒の 行を は われ また 問はじ、
天下を 擧つて なが手に 托す。』

(三)

家康 老獺、なほ且 おそれ、
感佩 迫つて なんだに むせぶ、
『殿下の 百歳 萬世の 後は、

嗣君を 奉ぜぬ ものらぞ たけん。
よろしく 神算、君、運らして、
治國の もとゐを 遺させ玉へ。
われ 不才の 身は、畏くも、
ああ、この 重任 堪ゆべくもなし。』

(四)

ためらひ 退くあと 見送りて、
三成 長盛 諫めて 曰く、
『殿下は 百戦 天下を 握り、
一朝 他人に 與ふは 如何に。
諸侯に 大小 差別は あれど、
すべては 御恩に むせべる ものぞ。
從二位の 幼君 まさきく ませば、
關西 關東 など 叛かんや。』

關西 關東 武蔵 越前 美濃 尾張 甲斐 信濃 上野 下野 常陸 水戸 越後 能登 加賀 石川 富山 福井 山梨 山形 秋田 岩手 宮城 青森 秋田 岩手 宮城 青森

(五)

衆議に從ひ、すなはち、ことに、
大老 中老 奉行を命じ、
片桐且元、小出の播磨、
秀頼、傳たるに、これ、定まりぬ。
多年の老臣、猛將どもを
御枕、近くも、皆、召し寄せつ、

「ああ、わが戦勝さる、なきも、

今、たゞ、一事を、遂げずに、逝くか、

(六)

「奮勃、そびゆる、大樹の、かけも、
えだ葉を、刻めば、残るは、幹ぞ、
魏々たる、いらかを、支ふる、ものは、

一ふとしき立つ、てふ、かの、宮ばしら、

一人、天下の、重きを、成さば、

萬民、等しく、つどひて、來たる、

見よ、われ、日本の、御靈を、受けて、

平和を、世界の、果まで、求む。

(七)

「劍銃、弓矢、は、露電に、似たり、

一たび、動けば、歴史と、消えん、

めぐりて、倦まざる、天にも、地にも、

人々、一期の、心は、振ふ、

たとへば、この精、うしほ、の、如く、

満ち足る、世までは、平らか、ならじ、

四民の、わづらひ、四民の、うれひ、

ああ、半途にして、わが手を、免る、

(八)

一明國、わが死を若し漏れ聞かば、
或は大擧の復讐あらん。
元寇以來の恥辱を受けば、
われこの御國に神さび得んや。
駿河の宰相伏見に臨み、
必らず内外歸趣を示せ。
六歳嬰兒は大坂城に
利家保ちて、人たらしめよ。

(九)

『石田よ、淺野よ、とく赴きて、
四城のいくさを收めて歸れ。
二人の宰相そこへ立てば、

追撃何ぞや、おそるに足らず。
十萬兵士を空しく置いて、
あはれや、『境の鬼たらすな』と、
天下の大將一事を遂げず、
千古のうらみをいだいて逝きぬ。

小海祠

天下の訃音を敵漏れ聞いて、
窮鼠のいきほひ却て猛し。
わが軍海路をせきとめられて、
義弘僅かに唐島に入る、
順天守將は南海島の
義智古城にのぼつて守る。

明將 劉艇 わが船 沈め、
入り江 を 封じて 次第に 迫る。
釜中の 魚 たる 行長勢 は、
暗夜 に 乗じて 圍み を のがれ、
時 此れ 霜月 十有九日、
島津 と 合して 名護屋 に 向ふ。

一兵 その名は 高宮 小八、
端なく 後れて、便船 を 得ず、
濱べ に うち出で、その 西みなみ、
故郷 の 空 を ば 空しく ながむ。
卑怯 の 浦人 身を 遠ざけて、
たゞ 攻め寄する は おほ浪 ばかり。
小八 が よそへる 黒革おどし、
よろひ は 破れて つゞれの まゝに、

やすらふ 家 なく、食らはん 實 なく、
なごなた 一つ を 夜襲 の 備へ。
あはれや、俊寛、敵地 に ありて、
風雨 は 無情 の 手がら を 誇る。

韓人わらべ は こと更ら 避けて、
その ちゝ母ら の 門戸 を 出でず、
かの 夜叉上官、また石曼子、
武勇 の 言葉 を ひそかに 偲ぶ。
見よ、見よ、この士 は 瘦せ衰へて、
失せにし その日 に わだつみ 荒れぬ。

再び 難事 の 一返る を 恐れ、
島民 やしろ を 小山 に 建てつ。
時日 を 定めて、あらぶる神 の

御魂みたまを鎮むる祭まつりをなせど、
歴史れきしは亂れて、かれ舜臣しゆんしんの
愍忠海祠びんちゆうかいしの一つに數ふ。

夫れをしのびて、
見よ、この土に、
知恵の言葉も、
女の、
婦人の、
異國に、
あはれ、
あはれ、
あはれ、

悲戀悲歌

三界露白

三界露白

一六八

三界獨白

一 燭のゆらぎ

悲戀悲燭

ああ、君、わが愛、悲しき愛の
 御たねを さそひて 春は 過ぎぬ、
 三月の 樂み、その 悲みは
 若葉の かげろふ、野邊に 過ぎぬ。
 うらゝかなる 日は 再び 見えず、
 遠きに のこる は 聖堂すがた、
 そびゆる あらゝぎ 時鐘を 鳴らし、

あしたの 祈禱に 呼ぶも 恐怖。

二

罪なき ものら は ころも を 飾り、
 こわね も 高らか 石段を のぼり、――
 ああ、うらやましき 乙女の さまや――
 聖母を 唱へて 席に すはり、
 やましき ことなく、隔つる 意なく、
 かれら は 聖式の 蒸餅を 取れど、
 わが身や エヅの子―― 妖蛇に 捲かれ、
 ゆふべの 祈禱も 口に出でず。

三

見よ、かの カインは その弟を
 うらみて 殺せし 罪に 由りて、

悲戀悲歌

耕す土さへその果を擧げず、
 流浪の身としもくだちぬれど、
 なほ且ゼネツの印誌を給びて、
 さすらふ野邊にも子をば得たり。
 わが身は却てわが分身を、
 神にも見せず、闇に遣りぬ。

四

ああ、闇—わが魂なやめる闇は、
 わが目を閉してわれを責むる。
 ころの窓よりたまさか見えて
 ひろがる大地は聲を叫び、
 血しほに染みたる、その口開けて、
 わが身を、罪をも、呑まんとする。
 われにはゼネツを呼ぶちからなし、

ああ、君、わが身は尼を断念ぬ。

五

一たびこの身に纏ひはせんと
 のぞみし黒衣は、ころ包み、
 見ぬ子のかたみの裏服と成りて、
 わが苦みこそ神と盡きぬ。
 老いたる主教はあまりに聖く、
 親しき童貞なみだもろし、
 光を受けたる萬物のうちに、
 この罪聴く者ひとり君ぞ。

六

君よりひそかに懺悔をせよの
 招きに断食—朝を來たり、

悲戀悲歌

をみな の 恥辱^{はぢ}をば おほへる 被衣^{かき}
白きに 隠れて、彌撒^{みさ}を 拜す。

たふとき かをり は 御堂 に 満ちて、

高き を 落ち来る 樂の ひどき—

わが魂 うつらに うれひを 免れ、

まさしく 向ふぞ 神の 御前。

七

ひたすら 唱ふる 誦文の 聲も、

うなじ と もろ共 低く 下だり、

十字 を 結べる 小胸^{こむね}を 過ぎて、

わが世 は 地獄の 門に かよふ。

見よ、聖^{せい}ミカエル、また ガブリエル、

魔鬼^{まき}をば 平らげ、道^{みち}を 拓^{ひら}き、

天より 招くは 耶蘇^{イエス}の 御體^{みたがひ}、

榮光^{えいこう} は 金色—これや 犠牲。

八

『生きてる 人、また、死したる 人 を

糺さん 爲めにぞ あもり給ふ……』

われらは 信ぜり、この 公^{かみりか}の

聖會、聖人……罪の ゆるし……』

こは 聴き慣れてし 御聲^{みこゑ}と 知りて、

ふと 目 を あぐれば、—思はざりき—

わが君、神父の くらゐに ありて、

香臺 ひだりに ひさまづけり。

九

立ちたり—その御手^{みて} 銀水 きよめ、

三つなる ベルソナ いのり 念じ、

悲戀 悲歌

いのちに満ちたる秘蹟の蒸餅を
これ聖體とぞさげ給ふ。

そのかうがうしさ、そのあらたかさ、

われらは思はずかうべ垂れて、

『十字架にかかりし主の肉身を
をろがみまつる』と口に誦しつ。

一〇

かれ、また葡萄のさかづき揚げて、

われらに誦文を求め給ふ。

われはた唱へぬ、『十字架の上に

流させ給へる御血……』ばかり。

わが胸、忽ちいたみに觸れて、

仰げば奥なる燭はゆらぎ、

火がげのもとより見知らぬ嬰兒の

御臺にあらはれ、『母』とゑみぬ。

一一

神父のすがたぞいよいよ崇く

夢路をくゆれる香のうちに、

脊なる十字は光を放ち

死すべき人とも思ひ寄らず。

さながらキリスト、身づから來まし、

わが爲め御壇に懺悔聽くか。

マリヤの御胎は、ああ、聖かりき――

われゆゑわが子は一闇に行きぬ。

一二

ああ、君、わが愛、悲しき愛の

御たねをさそひて春は過ぎぬ、

悲戀悲歌

三月の 樂み、その 悲みは
 若葉の かげろふ 野邊に 過ぎぬ。――
 君、聖體をば 分けはじめしも、
 わが身は 授かる 價値なくて、
 痛傷と 悔悟もて 御堂を 退き、
 御空の もとにて われを 泣きぬ。

二 闇の横木

一

ああ、日は 毛布の 黒みを 帯びて、
 月また 血のごと しばみ來たり、
 あめなる 星々 その軸 もろく、
 たとへば 無花果、地 にぞ 落つる。

諸天は 巻き物 おのづと 巻きて

山々 島々 うつり行きぬ。――

わが身は 鉛のおもりの 如く、

空より 釣られて 闇を 下だる。

二

うづ捲く 黒雲 練りたる 壁と、

わが道 かこみて 魂を 送くる。

刹那ぞ 五百里、小暗き 坑は

風切る いきほひ ひどく ばかり。

あまりに 重きは わが身の 罪か、

悔ゆる に ひまなく 鎖 延ぶる――

かしらの 黒がみ さかしに 垂れて、

わが手も 便なく、落つる 速し。

三

わが息 殆ど 胸より 絶えて、
 血しほ は むらがる 眉の あたり、
 忽ち 觸れたる 横木 を 握り、
 之にぞ すがりて 助け 呼びぬ。
 と見れば、鐵門てつもんの なかば は 引けて、
 ひらめく 鬼火 に――『あはれ、わが身、
 着慣れぬ ころも の 薄き を 纏ひ、――
 こは、早や、他界の すがた なるか。』

四

かくこそ 叫びて、思はず 泣けば、
 『さなり』と 闇より 答へ 聴ゆ、
 『しまし ぞ せせべル、淫婦の 友よ。』

額に 神より 印を受けず、

第二の 滅亡めつじやうに これより 入れや。

來たれ』と、くるがね 戸びら 軋り、
 いろ 青さめたる 馬の脊 高く
 乗れる は 利鎌の 黒き死 なり。

五

口より 出づるは 火と その烟、
 硫黄の にほひ ぞ 燃えて のぼる、
 陰府よみ、その うしろ に つき従ひて、
 わが目 を 掠むる つるぎ あまた、
 真近く 起りし もい かづち の
 どよみ は 奈落の 底に 消えつ、
 あらたに 叫びて、悪魔の むれの
 寄せ來る 地鳴ぢなげぞ 胸に ひどく。

悲戀 悲歌

六

われ、身をもだえて、すがれる棒こそ、
 さながら裁判の場をや限る——。
 『よみなる判官よ、わが死の神よ、
 しばしのいのちを許し給へ。
 求むる物あり、われ、そを追ひて、
 来りぬこの闇、暗き坑に。
 ああ、かの失せにし玉だに得なば
 わが身は陶器、碎くまゝぞ。』

七

馬の脊聲あり、『おろかや、いまし、
 求むる玉には悪魔まどふ。
 邪淫のつちくれさは戀しくば、

来たりてサタンの胎内に入れや。
 かれこそ赤龍かたちは見せず、
 なやめるいましを近くかこみ、
 或夜ぞひそかに、産むをも待たず、
 なが兒を奪ひて食ひ去りぬ。』

八

『ゆるせや、見ぬ子よ、さりとは知らず——
 のろひは免れじ——放ち遣りぬ。
 ああ、われ誰れにかそを訴へん、
 神より離れてのぞみ盡きぬ。
 第一、第二の天使よ、来たり、
 終末の管をば高く鳴らせ。
 汝が手に燃え立つ火焰を浴びて、
 わが身も草木と焼けて失せん。』

悲戀悲歌

九

『第三天使の喇叭よ、ひどけ、
御星の菌蔭、とくも隕ちよ。
われ、汝が苦きに身を投げ入れて、
河水もろともほろび行かん。
ああ、この靈魂とく滅びずば、
いかでかあがなふ深き罪を。
ああ、われ、誰れにかそを訴へん、
神より離れてのぞみ盡きぬ。』

一〇

物云ふ、力もおのづとゆるみ、
すがれる横木を落ちん時し、
わが身を受くべき魔鬼等は失せて、

奇くもやわらく胸のおそれ。
この時、『しばし』と、この坑開らけ、
うへよりさし來る光見えつ、
聖母の御すがたいと笑ましげに、
わが手を取りてぞ熱きなみだ――

一一

『若葉は朽ちしも、その靈魂は
なが身に活く』とぞ、あはれ、御母。
わが身は引かれてみどりの雲に、
こゝろも軽らか空をのぼる。――
ああ、君、わが愛、悲しき愛は、
住む世を異にし、いよよ増る。
ときわの樹かげのいづみを汲みて、
また會ふ時をしわれは待たん。

三 ごきわの泉

一

物みな 新たの いのちを 帯びて、
 御空みそらの上なる 清き 住まひ——
 夜なき 國には、ともし火 つけず、
 日は わが かんむり、おもて 照し、
 十二の 星々 またき 止みて、
 ちさきは 花がた、胸を 飾る。
 わが身も 聖徒の 御數みかずに 入りて、
 無縫むほうの 細布ほそふ 白き 給ひぬ。
 二
 赦免ゆるましを受けたる をみな の 凡て、

こゝには 稚き 愛のすがた、
 マナ より あまきは その 物語り、
 宿世の 記憶は 夢の 如し。
 等しく 光の 白衣を まとひ、
 金沙の 御庭みにはに 群るゝ さまは、
 たとへば 遠野に あまたの 羊、
 かすみて 浮べる 脊せななに 似たり。

三

あまたの 羊の 飼ひ主、神の 見立、
 御さかえ 照り添ふ 宮に あれば、
 わが身も 溢るゝ めぐみを 浴びて、
 樂しき とこ春 晝を 去らず。
 たまたま、凝りにし くれなる雲の
 花びら 一つを 足に 踏みて、

悲戀悲歌

奇しくも ゆらげる 平和の 袖に、
感ぜし ひどきは 天の あなた。

四

ああ、その響を 追ひ行く 魂の
羽根 より 燃え立つ ほのほ 見えて、
わが手に 生命の 樹かけを 汲めど、
なほ且 寂しみ 涌きぞ来たる。――
上には みどりの あや虹 渡り、
下には あを海 玻璃の 男波、
その 透き通れる 岸邊を ひとり、
心は 戀しき 君にかよふ。

五

ああ、君、わが愛、悲しき 愛の

きづな に 引かれて 懸る 地球にや、
ちいさき バアルの 偶像の 如く、
熱なく 回りて 圓く 垂る。
さは云へ、宗教の 御光 しろく、
わが目に 見ゆる は もとの 聖堂、
黄金の 香爐に キリスマ 焚いて、
君、なほ いますか 遠き 御聲。

六

あまたの 悔いある もの等々の 爲めに
十字架の 道行き、彌撒の いのり、
御壇に 焚く香の けむりと 共に
纖弱に のぼりて あめに 聴ゆ。
ああ、その聲こそ 一條 長く、
風なく 頭へて 胸に ひどげ。

来たれや、わが愛、小鳩の如く、
眞白き御羽根に一罪を打ちて。

七

わが手は待つなり、巻くべき君を。
わが身は待つなり、いなく君を。
一たび心にしるせし影は、
いつまで相見ず居らるべきぞ。
亡ぶることなきわが魂ならば、
いつまで空しく過すべきぞ。
御神はゆるさん、心と心、
影また影とし會はん時を、

八

『祈禱のうちにわが愛あり』と、

君はも下界に歌ひ給ふ――

その愛、その君、今幾萬里、

へだつるわが身の聲も聴くや。

『祈禱のうちに生命を寄す』と、

君はも下界に仰ぎ給ふ――

いのちよ、わが君、今幾億里、

へだつるわが身の聲も聴くや。

九

ああ、君、わが愛、悲しき愛は、

主の日ぞ來らば、報得べし。

七の封印六つまで開らせ、

とくそのあめ地消えも行けや。

ちいさきパールの偶像の如く、

熱なく回りて垂るゝ地球こそ、

悲戀悲歌

ほるび 近し。』

聴いて、暫しは、めをと ふたり

目をば 見かはし 震ひしが、

聲も をみな は あだに 笑みつ、

『されば、生れも來たる もの

古き風 さわに あるを。』

『さなり、生るゝ 子等も あれど、

死ぬる ものら は 歸り來ず。

若き 乙女 の かほ に 見えて、

つひに 隠るゝ いろ香こそ、

これや ほだし。』

『これや ほだし』と、醉へる をのこ

手もて をみな の 肩に 觸れ、

『なごて おきな は 斯くも 沈み、

あまき さかづき 受けやせぬ—

鐘を 撞けよ。』

『さなり、刹那 は 死をば 呼びて、

鐘ぞ 鳴る時 やがて 來ん。

若き をのこ の 胸に 燃えて、

つひに ひろがる ねたみこそ、

これや おそれ。』

『いかで、おきな』と、めをと ふたり

撞きに 迫れば、その前を

低き うなりの 聲ぞ 過ぎて、

かれは 忽ち 夜叉 の ごと

悲戀悲歌

狂ひ立ちつ。

『待て』と 遮ぎる さまに おぢて、

かれら ふたりは 退きつ、

『許せ、おきな よ、無禮げ なりき—

こはも 何ゆゑ 世には 斯く

よき音 出だす。』

『さらば、君よ』と、こゝろ 解けて、

かれは 語れり、『この鐘は—

云ふも 苦しや — われに 生命、

あはれ、わが戀、わが おそれ、

これや わが世。

『君よ、三十とせ むかし なりき、

われは 山門 — 寺をとこ、

妻に 親しき 小姓 ありて、

われは 之をば 疑ひぬ—

若き時 ぞ。

『時の 小姓は 今や 智識、

名ある 御寺を 領すれど、

けがれ無き身 の 徳に 照れる

眉間に 傷 あり。— われこそは

罪ぞ 深き。

『妻は いたはし、こゝに 走り、

此世の わかれを 苦しみつ、

血もて 無罪を この 裏に

しるし終はりて、われを 見き—

悲戀 悲歌

斯くは云ひぬ。

『君はこれよりわれをまもり、

朝な夕なの鐘を撞け。

人に知らるゝ時し來なば、

いのちなき身と思へよ』と、

これやわが世。

『晝の光を闇につゝみ、

罪の根のみははびこりつ。

わがまぼろしの影ぞ薄く、

響くおとにもおそれあり—

われは老いぬ。

『されど、寂しき脈にさへも

今やむかしの血は湧きぬ、

若きいましのすがた見ては、

またもわが身の春は來ぬ。—

苦しきところ苦し。

『むしろ死ぬるによきは今日ぞ、

われは最後のかね撞かん』—

低きうなりの聲ぞ來たり、

かれは忽ち夜叉のごと、

狂ひ立ちつ。

『待て』と、身づから返り見つゝ、

めをとふたりをためらひて、

『君はこの場をのがれ給へ—

わが身苦むさまをこそ

悲戀悲歌

遺く聴けや。』

* * * * *

鐘は ひどきぬ、春の ゆふべ、

花の ふどきを 散らしつゝ、

鐘は ひどきぬ、春の床を

酔へる 人らの 歸る時――

かれは 如何に。

『あはれ、お竹よ、けふを共に

この世 離れん、さらば ぞ』と、

一つ 撞きては 胸を もだえ、

二つ 撞きては 身を もだえ、――

まろび 伏しぬ。

* * * * *

あくる あしたの 花の夢を

覺ます ひどきは 聴え來ず。

あはれ、もろきは 血しほのみか、

さしも 名高き 唐かねも

朽ちて ありき。

田戸

田戸の海ぬし

田戸

一

田戸に 山崎、

また 堀の内、

走り水にも、

悲戀悲歌

また 大津 にも、

春の うしほ は

朝ゆふ 寄せて、

けむる 霞 の

奥より 見ゆる、

淡き 猿島、

島とは 云へど、

田戸 の おやぢ が

巢にこそ 似たれ、

二

おやぢ、頬赧 の

かほ むき出して、

髪 の ほつれ毛

二すぢ 三すぢ、

風にもまる

小舟の上を、

あさは 沖より、

岸より ゆふは、

かろく あま飛ぶ

小鳥の 如く、

しゅつしゅ 漕ぐ手 の

手なみ も 速し、

三

おやぢ、その名は

猪ノ助ぬしよ、

海に 生れて、

海をぞ 戀ふる、

妻は あれども、

悲戀悲歌

また娘はあれど、
ありしむかしの

血氣の名残。

ゆるし得ぬ子を

お濱に抱かせ、

かれは寂しき

おもひに浮ぶ。

四

妻のおやちは

七九しちくに失せて、

今はその子も

死ぬべき時を、

一つ軒端のきばに

おなじの住まひ、

もとの仲にも

返らば返れ、

二十三年

共には住めど、

ひとりひとり

むしろを

五

上總、房州、

かすみかすみに醒めて、

曉のひかりに

猿島浮けば、

おやぢおやぢ頬ほの

かほむき出して、

またもきのふの

遊あそ戯あそ歌

舟唄 あはれ。

しゅっしゅ 漕ぐ手の

手なみ を 見せて、

田戸 と 島との

わたしを 通ふ。

六

過ぎし 時代の

ちよん鬘 結ふて、

鬘の ほつれ毛

二十ぢ 三十ぢ。

おやぢ、もとより

その歳 知らず、

問へば、『わが身は

死ぬこと なし』と。

浦の人々

うやまひ 懼れ、

田戸の 海ぬし、

こは その 稱へ。

七

むすめ お絹が

世を 知りそめて、

父母の 仲をば

返すと すれど、

母は 寂しく

縫ひ物 つゞけ、

『あれは 龍宮の

いたづら小僧。』

猪ノも 笑みつゝ、

悲戀悲歌

かたへに立ちて、

『されば——汝が父

身は海坊主。』

高地の靈語

ああ、造化の一角なる

二百零三 高地よ、

識あつて待ちしか、この

非情非理の亂り世。

人は文明たへて、

あまき酒にほろ酔ふ、

されど、なれば血に醒め

闇の如く寂寥。

うちにつむ地熱の

深き光かすめつ、

ひとり寒威零度の

空に高くそびえつ。

脊には死屍かさなり、

谷は人の腹わた、

雪に赤く染まるは

うちし敵とその仇。

野犬こゝに來たりて、

性を更へしおほかみ、

凍る肉を食みても、

誰れを恨むこの民。

悲戀 悲歌

のろひ 多き 罪 をば、
嗟、なまぐさく 吹く風、
われは 之に 乗りて ぞ
渡り來ぬる 死の畔。

骨と骨の間に

視ひの種 播きたり、

肉と肉の間に

萌ゆる 種 を 播きたり。

百年 劫果 含めて

あざり行かん その種、

とこしなへに 新たな

生命 延さん その羽根。

嗟、再びは のろはで、

風よ、北に 舞ひ行け。

われは 黎明の 靈 なり、

西にこそは のび行け。

さらば、高地 — わが 乗る

駒は ひかる あけぼの、

遠く 進む すがた を

今ぞ 見よや、ほのぼの。

旭日吟

(遊子、故郷の濱邊に立ちて)

あゝ、とこしへの朝日子よ。

緑したる松原に、

あしたの浪をかき分けて、

登るすがたの勇ましき。

われも初めて、朝がすむ

けしきぞいと麗はしく、

この世に生れ來し時は、

かくやいきほひ猛りけん。

ちから限りに泣く聲の

いづる涙にうれひなく、

自由にめぐるひとみには

ちりも穢れはとどまらず。

五感のもとを明らかに、

まよひの風の吹き立たず、

母の乳ぶさに口觸れて、

清きいのちを呼吸しつ。

いはひ、よろこび、樂みの

うちに育ちしそのさまは、

ながみ光のまのあたり

いや増すごとくありにけん。

悲戀悲歌

(二)

ああ、とこしへの朝日子よ。

緑したる松原に、

あしたの浪をかき分けて、

登るすがたの勇ましき。

われ學問をならひ初め、

ふみ読む机前にして、

夕べに至るその頃は、

かくやたゆまで勉めけん。

ころもを振ふ千仞の

岡を觀じて意氣高く、

この大丈夫足洗ふ

萬里の流れ身に秘めつ。

人は云ふてふ螢雪の

たとへも愚か、夜更けて、

鳥の啼く音にほゑるみの

かげもの云はど、如何なりき。

心のうちにのぞみあり、

身の苦みをことせせず、

學の道にさちありて、

胸にまどひのひま出でず。

たゞ一すちにわかちから

進み行く世の樂みは、

なれが日足のすぎすぎに

悲

とよさか登る さまにこそ。

(三)

ああ、さりながら、朝日子も

高きにつれて名を得じや。

ああ、朝日子も曇りなば、

深きあはれの動かじや。

戀と名譽の二すぢに

わが道分れ入りてより、

われ疑ひをいだき初め、

われ悲みを感じ來ぬ。

(四)

われ初戀を知りそめて

若き血しほに觸れてより、
もゆる思はあめつちの
果にも渡るこゝ地しつ。

われには餘る苦みを

詩にも歌にも歌へども、

胸に秘めたる一たまの

たから示さん折失せつ。

その麗はしきをとめ子の

行を追ひつゝ、幾歳か、

嘆く目あてのなきまゝに、

そは只おなじ箱なりき。

再びめぐり會ふ日さへ、

悲戀悲歌

ありし昔は語れども、
わが寶こそ奥深く
ひそみて光なかりけれ。

然れど、ひそかに取り出で、
放てば、闇もかゞやきの
風に吹れて、絶壁や
高きをとめの立てる見ゆ。

呼べど、答へず、ほゝゑめど、
かれ喜びの色見えず、
ああ、まぼろしか、足引の
山のふもとゆ崩れつゝ。

ひらめく袖は薄がすみ

あかき に 消えて うつり行き、
浪立つ 髪は 青雲の
白き 御空に かげも なし。

ああ、われ なやむもの なりや、
ころの 平和 絶えて なし。
ああ、わが思 深うして、
攫む は 熱き 夢ばかり。

(五)

われ 名を 求めそめて より、
空しく 爰に 年を 経つ。
秦の 始皇が 英略も、
われには 靴の 塵と 見え。

三千 宮女 亡びては、

野中の花と いづれ ぞや。

萬里の城も くづほれて、

下行く水と また いづれ。

ああ、アルプスの 高き より

敵の 平野を 見おろして、

おのが 立ち場の 雪を 蹴つ、

うちほゝゑみし ナポレオン。

ウオータルロー 草 茂く、

吊^{とむら}ふ 虫の 音にも 聴け。

英雄、ひと日、雲 晴れて、

セントヘレナの 月 如何に。

消えて 残るを『名』と 云へど、

ありて 實なき これ 如何。

老子 一たび『無』を 叫び、

姿を 深く つゝみけり。

ああ、功名 に あくがれて、

われは 迷ひし ことも あり、

頓悟^{とんご}の 域に 身を 入れて、

さると 見えし 時も あり。

(六)

ああ、疑の なかりせば、

如何に 樂しき 世 なりけん。

ああ、悲の かげ なくば、

如何に うれしき われ ならん。

さばれ、樂しと云ふものゝ
亡び行くべく定まらば、
うれしと見ゆるその事の
つひに消ゆべきものならば、

見よ、夏草の生ひ立てど、
露のもろきに就くごとく、
わが疑と悲の
長きをむしろいのちなり。

『無限』の池に石投げて
面にひろがるさゞ浪の、
一輪一輪に亂れ來て
『われ』てふものは拾ひ得ず。

(七)

ああ、朝日子よ、とこしへに
若き姿ぞ麗はしき。
われはわが身を求めつゝ、
かくも心はうつろひぬ。

うつる心に且は又
『死』てふなやみの加はりつ、
東西光うすらぎて、
南北闇に消えんとす。

さびしく立ちて夕風の
そよぐにまかす墓ならで、
戀も名譽も疑も

悲戀悲歌

やすらに 受くる 神 なきや。

(八)

ああ、われ、今や、故郷の

濱邊に立ちて、もの思へば、

昔ながらの、あけ煙の

わが魂は、湯あみしつ。

千重の 男波をなみを かき分けて、

静かに 登る 朝日子あさひこよ。

無限むげんの 亂れ 引きまどめ、

われを 圓きに 就かしめよ。

叙情五篇

伊吹の螢

伊吹山 木々 失せて、

生ゆる 草葉 短し、

夏の 夜風 に しめり、

煙草たばこの 火 も 冷たし。

けむり 直ぐ 消ゆれども、

消えず 残る 光 よ。

時に 後れし ほたる、

あはれ、重く 飛ぶ 見よ。

悲戀悲歌

さかりは十日過ぎぬ、

名ある宇治に石山、

おのが同士と別れ、

いかで寒きこの山。

何にこがれて、斯る

こゝろ細きさまよひ。

わが身はじめて愛しき

なれを見たり、この宵。

暗きともし火つけて、

風になやむその様、

ふわり、ふわりと靡く、

二つ三つの人魂。

恨みあるものとせば、

後生の爲め、くよくよ、

ことにことづてすとや、

わが頭上を渡るよ。

さらば、無言の身こそ、

われに寄するなが骨。

あはれ、露には瘦せて、

高きを慕ふこゝろ根。

螢を踏みつぶせる折に

風に涼しき夜なか、

粟津が原のみちへ、

かげも撰ばでとまる

悲戀悲歌

ほたる、何のいけにへ。

病めるものならば、右、

ひだり、流れもあるを、

廣きまなかに出でよ、

犬に食はる生うを。

小さきその羽根折れて、

飛ぶに苦しくば、また、

草葉に逃るべきを、

投げて、蛇の腹わた。

無駄に亡べと、よもや

神もつくり置かざらん。

觸るよを避けて、ともす

その火、頼む爲めならん。

それも罪なき蟲に、

噫、入らぬ取越し苦勞、

之を憐む味かた、

敵となりしを吊らう。

高きわが下駄の齒に、

松を漏れて生き死ぬ、

月の光を踏まで、

あほれ、なれをつぶしぬ。

雲 翮 々

ああ、翮々として飛ぶ雲の

悲戀悲歌

妙なる さまを 仰ぎ見て、
速き あらしの 袖 漏れし、
わが身 の 行ふ 思ふ かな。

見よ、見よ。

古人も 歌ふ『はたて』さへ
ちぎれ、ちぎれて、また 別の
形を 浮ぶ その色 や、
濃きを 逃れて、風足かざりの
薄き 端には 光 あり。

いや白き その ひかり、
照らすが まよに 染りつと、
一朶だ 一朶だ に 入れかはり、
また 立ちかはる、そのかげの

先きを 争ひ 走れども、
一步 はづせば、幾萬里—
それ 幾萬里、青き空。

如何なる 靈の 乗るなれば、
かく 安らかに 渡る ぞや。
われは 片羽かたば を うち折りて、
胸に 憩いひの かげも なく、
上に 向ひて あせれども、—
あせる ほど、遠ざかる。

ああ、手は 亡び、足 亡び、
からだは 亡び失する 時、
雲よ、ながごと、白妙しろたへの
のぞみ や われも 分ち 得ん。

悲戀 悲歌

常世の光

(グリニウツクの『ダイアナ讃歌』の曲に合わせて新たに作れる)

あめ地 初めて 二つ に 分れ、
 御空^{みそら} を 踊りて 照り出でたる 光。
 とこ世 の おもて を 籠めたる 闇は、
 音なく 破れて かどやき渡り、
 四隅 は 新たに くらゐ を 定め、
 よろづの物 皆 生命^{いのち} を 浴びぬ—
 あめ地 初めて 二つ に 分れ、
 御空 を 踊りて 照り出でたる 光。
 静けき とこ闇 おのづと 破れ、

御空 を 踊りて 照り出でたる 光、
 御神^{みかみ} の 夢 より 漏れたる 笑みの
 くらき が 中をや かどやき渡る。
 物 皆 新たに 形状^{かたち} を 受けて、
 生命 の 流れ は 四隅^{よすみ} に 振ふ—
 あめ地 初めて 二つ に 分れ、
 御空 を 踊りて 照り出でたる 光。

ねむりは醒めたり

ねむり は 醒めたり、わが 國民^{こくたみ} よ、
 千歳^{ちとせ} つたはる 御稜威^{みかさ} を 仰げ。
 けはしき 山々、するどき 流、
 どよめく わだつみ、かすめる 野原、

悲戀 悲歌

皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

ねむりは醒めたり、わが國民よ、
二千代重なる榮えを開かけ。
家國のうれひも、そのわづらひも、
われらが希望も、はたいきほひも、
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

ねむりは醒めたり、わが國民よ、
三千とせ鍛へし歴史を振へ。
世界の文明なやめるひまに、
われらが理想も、はた藝術も、
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

進むは生命、拓くはいのち、

皇祖の御教へそのうちにあり。
一つの言葉に不易の御門、
國是の發展この民にあり。
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

われらが日に日に求むるものは、
劍にあらざる御靈の光。
常世を貫くちからに依りて、
仁義の實を亞細亞に護せん。
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

ねむりは醒めたり、わが國民よ、
三千とせ鍛へし歴史を振へ。
世界の文明なやめるひまに、
われらが理想も、はた藝術も、

皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日本の本を。

短曲 二十一篇

一海の響、

夢はおぼろの花の如く
 咲きて見ゆれば、冬の床も、
 ゆふべ寂しき海を出で、
 龍の宮居の玉座なりき。
 ねむり、南にかしら沈め、
 沈むかしらに香ぞかゝる、
 肌につめたき絹のさわり――
 これや寐さめのかをり遺す。

ひとり あたゝか胸のうれひ、

悲戀 悲歌

臥して、聽ゆる 濱を たどり、
ものに 酔ひたる 乙女すがた、
いとも しなやか 浪を 寄する。
あはれ、かくこそ 死にも 入らめ—
海 の ひどきよ、永劫 の おもひ。

二 無言の石

云はず、語らぬ 石を いただき、
われは この世を 泣きに 泣きぬ、
人の いふなる 戀に あらず、
おのが 受けたる 苦にも あらず。
苦にも 戀にも 更らに 増して
胸の さびしみ あふれ來なば、

もゆる 思ひの 肉は 焼けて、
なみだ ばかりぞ 熱く 流る。

われに 神なく、且は 死なく、
ありと いふべき この かなしみ、
今や 生命の 糧となりて、
つきぬ わが世は 石と 共ぞ。

かれは 『無言』を 絶えず 生めば、
われは なみだを そゝぎ繼がん。

三 自然のあゆみ

岩をめぐりて 行くは 何ぞ、
河つ姫にや、河つ男にや。

悲戀 悲歌

音は 立つれど すがた 見せず、
見せぬ すがた の 裳裾 觸れて、
こゝに 白ぎぬ あと を 引くや。

行けよ、流れよ、はやき水の
澄みて 盡きせぬ 深き道 を――
自然 の あゆみ も 斯くぞ あらん。

われは 物もひ 立ちて 居れば、
目には 静かの かげも 浮きて、
身さへ もろ共 岩を めぐり、
隠れ 去らん こゝち すなり。

岩を めぐりて 行くは 何ぞ、
河つ姫 にや、河つ男 にや。

四 残る憂ひ

われは 高き 磯邊 の
岩 に よりて 黙せり、

遠つ海 の 疾風の

音に、日 さへ かげりり。

こゝろこそは この胸
深く 照らす 眞帆船。

駈ける 道に 一すぢ

残る うれひ 悲み、

白く 曳いて、消え行く

天靈の 跡ぞ 身に 入み、

われの 顫ひ おのゝく

肉を破る 寂しみ。

あはれ、立てよ、わが魂、
なれの領ぞこの濱。

五 細き指輪

ほそき 指輪のぬしはあらん、
君は御手をば固くまもり、
大理石もて成れる如く、
人の觸るゝをい避け給ふ。
うべや、ゆかしく歌ふ譜には、
高きしらべの籠る見えて、
海の四方より渡る風も
こゝに合唱のあまつ樂座。

君よ、御空に戀はすとも、
しばし眞砂の上に坐はれ。
春のかげろふはゆく燃えて、
白き砂にも熱はあるを――
いづれ卷かるゝ身にしたらば、
來たれ、ひとしくあつき胸に。

六 夢の子

あはれ、わが身の戀を云はゞ、
色は紫紺のとばり深く、
奥は紙燭の火かけ暗く、
胸のほのほの燃ゆる上を
すぐる夢の子――あとを向きて、

悲戀悲歌

『来たれ、いまし』と、ひそか聲の

なほも 小暗く、深き 奥に、

身をば 糸もて 引くに 似たり。

されど、覺むれば、朝の ひかり

窓に わが身の ねむり 吸ひて、

いとも 樂しき 夜間の おもひ

晝は かわける 世こそ わぶれ。――

君に あかるき 定命ありて、

われは こそ しも うつし得じな。

七 薰ゆる火かけ

ともし火もてるは 如何なる 子ぞや。

闇夜の あらしに ゆらぎて 立てど、

なほ且 その影 大地に 投げず、

照らす は 世の様 世の有様の

奥なる ほろびと その かなしみと、

沈める いのちの 流れと 愛や。

常世を つらぬく 光の するの、

漏れ来て、あたりに くゆるよ、火かけ。

聖なる 御堂の 御壇に 載れば、

或は 教職 キリスマ 焚いて、

十字架を 導く 脊なにも 照らん。

さは云へ、こは また 移しも 得じな。――

ともし火もてるは 如何なる 子ぞや、

闇夜の あらしに ゆらぎて 立てり。

八 こそはの寂しみ

夢に地獄を深く探り、
奇しきともし火われは得たり、
ほのほ、うれひの色に照りて、
あをき光は死をぞ招く。

聖き御山の堂に燃えて、
世々に傳はるその如く、
永劫のさびしみこゝに引きて、
暗くそのかけゆるゝのみぞ。

すゞろ運びて、此世に取れば、
活けるそよ風照りを増しつ、
佛龕の御佛いのち映えて、
われはおのづと合掌なしぬ。

夢はさめたり——されど、いまだ
君はわが身にいのち投げず。

九 檉の木

傳教大師が印度の地より
得來てし檉の木、根を一もとの
枝葉は高きに繁りてあれど、
その幹なかばも、その根のもとも、
寂しや、分身の若芽を断ちて、
たとへば英雄子なきが如く、
天台教理を絶する如し。
藏、通、別、圓、四教のうち
三千寺坊のかけさへ消えて、
今はたいつくに昔を訪はん。

悲戀 悲歌

大師が 入淨 以來 の をしへ、
高き を 遺して、利機 をば 生ます。

あはれや、檜の木、御山 に ひとり、
法燈 暗き を 護る に 似たり。

十 小暗き道

われは 夢 見ぬ—君 と ふたり、
つらき 無言 の 裏 を いただき、
胸 の 奥なる 熱 に 觸れて、
深き 眞洞 の 底 に 落ちつ。

うすく ほのめく 燈火影 に
前の 御かほ ぞ—いかに、あはれ—

いとも 白けて、ねむる いきも
既に 絶えたる 身さま、死さま。

膝 に つめたき むくろ 一つ、
重き 呼吸 は 身 にも 迫る、
上 を 仰げば、黒き石、の、
『罪』と 叫びて、おほひ下たる。

さなり、わが魂、これを 避けて、
なほも 小暗き 道 を 戀ふる。

十一 まごふ怖れ

われは 夢見ぬ—海の上 を
君 と 二人 し 蛇 に 卷かれ、

舟と もろ共 深み空の
あをき 最中もなかに 呑まれ行くよ。

力ある 胸浪と どよみ、
熱き こゝろは 雲と 振ふ、
われに 君こそ 斯くて あらば、
まどふ おそれの 何か あらん。

舟や かたむけ、潮よ 來たれ、
なほも 海へび かたく 卷けよ。
おなじ 燃え立つ 火焰ほのほ あげて、
呑めよ、下せよ、沈む 身等みららを――

あはれ、安かれ、君の かげは
われぞ 死までも 送り行かん。

十二 うれひ一すぢ

鐵のうるしを 練りし 壁と
固く とちたる、闇を 破り
曉の光の 照らす 如く、
わが身 胸より つらぬかれて、
いなく 希望のぞみは けふも 亡び、
うれひ 一すぢ 流れ去りぬ。
ながれ去りにし うれひ なれど、
またも 覺むれば、またも 來たり、
沈む こゝろの 目には 見えて、
遠く 地平ちへいの 線に 渡る。――
君は かくこそ われを 引きて、
ひろき この世の 野邊に 住むや。

われ に 流れて 入るか、去るか—
うれひ 一すぢ、今は いのち。

十三 時劫の森かけ

時劫の 森かけ 露は しとど、
わが おほ御神の 足を 受けず、
重なる 落葉の 下行く 水は、
岩をば めぐりて 人を 刻む。

小暗き^{をくら}のうちより かしら 見えて、
無言は その世を つゝむ時 し、
重なる 落葉の ゆらぎと 共に、
延びたり 大なる 右手^{みぎ}と 左手^{ひだり}。

身づから その手を 樹には かけて、
見よ、立ち上れり 石の すがた、
あらくれ男^{おとこ}の 胸いと 廣く、
常世^{とこよ}の 風をば こゝに 吸ひぬ。

ああ、かれ、戀なく、苦み なくに、
はじめて この世に 出でんと するか。

十四 うさゝ聲

重く 垂れたる おのが 髪を
取れば、『母よ』と うさゝ聲の
脊なを めぐりて、膝に 下だり、
酷き^{つら}こゝろの 目には 見えて、

悲戀 悲歌

兒等のうす影胸を纏ふ。

打てど、拂へど、數を知らず、

神のアバドン、蝗いなご率いわ、

爐なるけむりに涌くが如く、

宿世來世の風に乗りて、

つぎへつぎへと群るゝ影に、

おそれおのゝく、寂しゆふべ。

かれはをみなと生れ出で、

産まず、生れぬ刹那追へど、

なほも等しく海の苦あり。

十五 鍵を與へよ

鍵を與へよ、陰府よみの鍵を。

いづれ死ぬべきものゝ身もて、

われはあめなる門を戀ひず。

あめに空しく君を入れて、

清き天使を見なんよりも、

あめに空しく君に連れて、

清き天使とならんよりも、

われら諸共身をば投げて、

暗き眞洞まぼろしに沈み行かん。

鍵を與へよ、陰府よみの鍵を。

われらいち度も二度も死にて、

胸のうれひを深うしなば、

雲の消えては見ゆる如く、

悲戀悲歌

戀の記憶ぞ朽ちずあらん。

十六 鏡を碎けよ

鏡を碎けよ、わが姉、妹、
 映れるすがたは皆穢れたり。
 世に戀ありとは心のまよひ、
 振り袖重きを左手に取りて、
 その身の穢れを飽くまで泣けや。
 なが夫、なが戀、なが依るはしら、
 いづれも右手には遠きを引いて、
 近きは夜るの戸、空しきむくろ。
 仇なる小夢に酔ひたるこの世、
 誰れをか恨みん、をみな魂よ。

酒の香 高き に ロづけ すとも、
 醒むれば あしたのむくろとむくろ。
 鏡を碎けよ、わが姉、妹、
 映れるすがたは皆穢れたり。

十七 蛇の河姥

むかし この石 天を落ちて、
 此世の小春に目をば 覚めぬ、
 へびの河姥 之を慕ひ、
 うろこ 輝く腕に 巻きぬ。

石は泣く泣く羽がひ 折りて、
 水に投ぐれば、右の羽根は
 瀬をばのぼりて 鯉と浮び、

悲戀 悲歌

折れし 左は 罇と 下だり、
落つる なみだは 一つ 毎に
ちさき 尾ひれの 敷を 産みつ。
年に いち度は、眷屬 すべて
こゝに 過ぎ行く 世をぞ のろふ。

秋の 月夜を 深く 覺めて、
聽けよ、宿世の『われ』や 如何に。

十八 熱き眞砂

熱き 眞砂の上を 撫で、
われは 獨りし 物を 思へば、
遠き 深みの 波浪は 打ちて、
手なる 下より ひどき來たる。

おのが 小胸も 爲めに 振ひ、
千々の 亂れは 濱の 小砂利。
なれよ 小砂利よ ひろき 海に
幾代 打たれて、斯くや 圓き。
なれを 讀みつゝ、ひろひ行けば、
ひとつ ひとつに 光 添へて、
經にし代をこそ われに 語れ。

あはれ、海邊の 熱き 砂利よ、
此世は 萬年 永く 續げば、
われも いましの 年に 添はん。

十九 酒 興

注げや、わが愛、今 一ちよく を。

悲戀 悲歌

明日は酒興の來べきか知らず。
ふたりこの日を、手に手を取りて、
こゝに歡樂滿つれば滿つる。
誰れか酒の香あましといふや、
なれがいろ香も褪す時あるを。
さなり、けふのみ、たゞこの刹那、
われは心に自由を得たり。

天を呼ぶ君、地を撃つわが身、
しばし短きいのちに酔はん。
明日は、醒むれば、またこの愛の
おなじ味はひ得べしや、君よ、
時劫、見えざる鎖を曳いて、
われは悲哀に繋がる身なり。

二十 悲哀の俘

酒に向へど憂愁は去らず、
取れる盃なみだを湛ふ。
こゝに酔へるはわが肉のみぞ、
いづこ如何なる心の糧よ——
遠き奥よりかなしみ曳いて、
君よ、わが身は悲哀の俘。
失せし戀となかまへて問ひそ、
胸の苦悶を刻むは久し。
この世なつかし、この世は憎し、
これやわれのみ醒めたるこゝろ。
いづれ亡ぶるこの胸、この身、
私慾私憤に敵あるべしや——

遠き 奥より かなしみ 曳いて、
君よ、わが身は 悲哀の 俘。

二十一 苦悶の鎖

(故野口寧齋君に)

ああ、君、苦悶を いだいて 逝きぬ、
わが身は なほ、それを 胸にし 生くる、
生くると 死ぬるは、例へば 影の
その身に 添へると 添はぬに 似たり。
父母より 受けたる この世の もだえ、
一息 毎にも いのちを 刻み、
その音 天地の 間に 落ちて、
久遠の さと波 その輪を ひろぐ。

ああ、君、その輪の ひろがる なべに、
底なき 記憶の 淵にや 沈む、
わが手を 延ばして 救ふと すれば、
残るは まぼろし——苦悶の 鎖。

延び行く その端、君、今 陰府^{よみ}に、
われ 他の端をば こなたに 握る。

(本舞臺、中央にアーチ形を構へ、その内は凡て凄愴たる墓場、月夜の景。下手アーチ形の側に樂座の設けあるべし。)

樂座(合唱)

小夜吹く 嵐も ねむりに 入りて、

奈良の 孤寂を 招く頃、

並み立つ 石塔 荒れにし庭を

照らす は 月かけ —— 人の影。

(脱營兵、おつおつ登場。)

脱營兵(獨白)

ああ、營所をこゝまで逃げては來たが、心はわしといふからだ身體を逃げる

ことは出來ない。——今日、國元から手紙が來て、開けて見れば、女房が二人の兒を遺して死んでしまつたと——その上、永年世話になつた、義理ある母の大病。二人の兒はどうして居る。村のものど云つては、いづれも、揃ひも揃つて薄情な人ばかり。不斷から、わしの家を穢多同様に取り扱ひ、——とても、世話を見て呉れやう筈はなし。

——これは、御國の爲めには悪い事と知つては居るが、兎や角の心配から、透を見て、營所を逃げて來たもの——あとはわしが自訴して出るとも、また、百萬の軍隊でも出來ない奇功を、わし一人でやつて死なうとも、それはわしの決心一つにあるのだ。——ああ、それにしても、胸がどきまぎして、もう、今から地獄にでも落ちて居る心持がする。この物凄しい墓場は、たゞ無言で、わしを笑つて居るやうだ。もう、かうなつては、頼るものは神、佛、ばかり。——どうか、神さま、佛さま、暫くわたしが自由を許して下さいませ。お袋の様子さへ見て、安心が出來ますれば、この身體は粉末微塵になつてもよろしうムい升。頼み升、頼み升。——ああ、何だか胸が苦しい。——それは

さうと、この邊に尋ねて來た墓のある筈。——おお、之が女房の埋つて居るところか。——お民、もう、會ふことは出来ないのか。子供を残して死んだ上に、今、お袋の大病。わしは御國へ對して濟まぬことだが、營所を逃げて、こゝまで歸つて來たわい。情けないことになつて呉れたなア。——おお、向ふを來るは何者。——

樂座(合唱)

その影 あり とは 知るや 否や、

足音 ぞ ひそみて 進み來る——

罪ある者 をば からめ取る と、

惡魔 の 一隊 か、はた 追ひ手。

脱營兵(白)

やア、こは不思議の怪物ども。——どこかに隠れて、やり過して呉れろ。

(こゝ、隠れる。)

樂座(合唱)

死 を さながらの 深き夜 に、

出で來たりけり 魔鬼 の 群——

これや 羅刹。

(どろ／＼にて、覆面黒衣の怪物、數名登場。そのうちの頭領、運命神奇なる杖を以て他を差圖し、脱營兵の隠れ居るを示めす。)

樂座(合唱)

天網 のがれ難し、

運命、人 を のろふ。

(脱營兵、恐れおの／＼く。怪物、無言にて、之を引き出す。運命神の杖、鬼火を發す。渠、之を差し延ばして、その尖をまわせば脱營兵くるくるまわる。)

運命神(獨唱)

脱營兵

影よ、影よ、

人は影なり。

闇を食ふ

人は影なり。

黒き杖の

ちから結びて、

われはこゝに

汝をのろはん。――

劫風、毒龍、ラルロ。

(杖を以て印を結ぶ。)

樂座(合唱)

杖もて印を結びて、

先づ露兵現はる。

(露兵、二名現出。運命神、消ゆ。)

露兵一

やア、こは日本兵。

露兵二

何、日本兵が――

(兩兵、左右より脱營兵を蹴る。)

露兵一

われらは日本軍の爲めに殺され、遂に冥途へ送られたが、

露兵二

今、呼び戻されて、来て見れば、こゝに憎き日本の兵士。

露兵一

さいはひ、意氣地のない様子――

露兵二

こゝが最も良い仕返し時――

一、二

綱を以てしばつてしまへ。

脱營兵

(脱營兵、縛せらる。)

樂座(合唱)

その奇しき綱には、
千斤の魔力あり。
その重き繩目に、
人、手さへすくみたり。

露兵一、二

えい。

(こ、また蹴り倒す。)

樂座(合唱)

家なる妻には會はで別れ、
恩ある老母はやまひ篤し——
營所たむしよをのがれて歸り來てし

心はさすがに優しけれど、

あはれ、御空みそらを落ちし鳥、

胸むねに傷持きづもちつ苦しさをよ。

露兵一

何をもがくのだ。

露兵二

そこ動くな。

(こ、また左右より蹴る。)

脱營兵

やア、黙つて居れば兎や角と——目の黒い間は、この身も日本帝國の
軍人だぞ。

露兵一、二

何だ、この死にそこない奴が。

(また蹴る。)

脱營兵

脱營兵

ちんす。

(さ、立ち行かんさすれば、身は後ろ手。どろくにて、運命神
また現はれ、結べる印を解けば、露兵消ゆ。これより段々、月光
暗くなる。)

樂座(合唱)

本意なき 細目 に 引き繋がれて、
ひそかに ぬぐへる 涙 の まなこ――
月 さへ 曇りて 小暗き この場、
ためらふ 前には 老母 の 御かほ。

運命神(獨唱)

劫風、毒龍、ラルロ。

(また印を結べば、どろくにて、老母の幻影、現出、運命神、
消ゆ。)

脱營兵(白)

おお、母上――

老母幻影(獨唱)

あけ暮れ 鎮守 の 神 に 詣で、
祈りし 願ひ は いまし 故ぞ。
わが身 は 年波 安く 越えて、
この世 を 今こそ 渡り來ぬれ。
先祖 の 家の名 をば
かまへて 穢す勿れ。

脱營兵(白)

それでは、母上は、もう、あの世へ――申し、申し、母上――
(どろくにて、運命神、また現はる。)

運命神(獨唱)

ラルロ。
脱營兵

樂座(合唱)

見る見る 變りて、妻の すがた。

(どろくにて、老母の幻影、妻の姿なる。運命神、消ゆ。)

脱營兵(獨唱)

おお、お民か——子等を如何に。

妻の幻影(獨唱)

朝ゆふ 食事の 席に 坐はり、

いのりし 言葉は 君が 爲め。

二人の 子等をば 夜るの 火かけ、

寂しき 孤獨を まもりたり。

御國の 爲めに 盡し、

功蹟を 示めし 給へ。

脱營兵(獨唱)

さはれ、二人の子等は 如何に。

樂座(合唱)

ああ、わが妻 よと 近づけば、

また 現はれし 運命神。

(どろくにて、運命神現出、妻の幻影、あさざさりして、消ゆ。)

運命神(獨唱)

天網 のがれ難し、

運命、なれを のろふ。

(神、また杖をまわせば、脱營兵、くるくまわる。月光、明るなる。)

脱營兵(獨唱)

脱營兵

あはれ、老いたる母に別れ、
なほも妻にはあざけらるゝ。
今朝のたよりを受けずあらば、
もとの心は續くべきを――
敵は満洲にあらず、
妻子ぞほだし。――
あはれ、如何なる天魔入りて、
斯くやわが身を迷はしむる。

運命神(獨唱)

そこに無言の教へあり、
そこに無形のつるぎあり。
切れや、こゝろを繋ぐ綱を。
解けや、その胸照らす文字を。

脱營兵(獨唱)

われは營所をのがれ來たり、
ああ、神にも、佛にも、
この胸、この身は、見捨てられしか。

樂座(合唱)

解けや、その胸照らす文字を。
切れや、心を繋ぐ綱を。

脱營兵(獨唱)

この胸――この綱――この身――この手。

(怪物、すべて出で來たり、脱營兵の上にうち群がり、運命神の杖につれて大くまわる。大どろ／＼にて、舞臺を眞暗にし、更らに營所の門前を現はす。)

番兵(獨白)

脱營兵

今のは夢であつたか。——けふ来た手紙を心配して、ついうとくしたのであつたか。——こんな弱いことでは駄目だなア。

樂座(合唱)

身をもて國を護る、

死すともおそるべしや。

(夜中行軍の一隊號令に従つて歸り來たる。番兵直立、之を迎ふ。喇叭の音にて幕。)

夜中行軍の一隊號令に従つて歸り來たる。番兵直立、之を迎ふ。喇叭の音にて幕。

冥想 劇 海堡技師

おしなま

おしなま

おしなま

はしがき

こは、世の所謂悲劇にあらず、喜劇にあらず、さりとして、又在來の夢幻劇にもあらず。その主人公の冥想、一貫して、之に始り、之に終るの故を以て、ここに之を冥想劇と稱したり。

われ、口語を以て、一種の詩劇を作らんと欲すること久し。この著は、乃ち、その手始めなり。されど、讀者よ、之が辭句中に、たま／＼、文語法を挿入せし所あるを見て、直に之を笑ふこと勿れ。作者、多少の用意なきにあらず。乃ち、平旦なる筋を渡る時は、そのせりふは全く口語に従ひたれど、感情の激したる所、嚴格なる想念の顯はるゝ所、獨白等に於ては、時に或は口語に近き文語體を用ゐたり。蓋し、かゝる場合は、その言葉の主が殆ど俗界を脱したる心持ちあり、觀者に一時、この人物の外境を忘れしむべき必要あるを以てなり。

この劇を場に上すものありや、否やを知らずと雖も、われはこの體を以て、是より更らに一步を進めんと欲するものなり。

登場人物

- 技師長 星野玄道
 お杉
 名主 吉次
 おなじく妻 お高
 おなじく娘 お花
 僕 右作
 潜水夫 重助
 男女土方 多勢
 船頭 數名
 技師下役 數名
 士官、官吏、多勢
 陸軍大臣
-
- 知事
 代議士 數名
 縣會議員 數名
 赤鯛王 (日本代表)
 鎚奴 (希臘代表)
 珊瑚姫 (印度代表)
 眞珠星 (南洋代表)
 百合子 (希伯來代表)
 浪の靈 金むく
 おなじく 銀むく
 おなじく 瑠璃兒

序の幕

第一 名主宅焼香の場

(本舞臺、中央、名主の座敷、お花の死骸を置き、その枕もとに線香などの用意あるべし。下手に入口、枳殻の垣根をあしらふ。)

吉次(登場しながら)

お高、女道さまは まだ

見えぬか。

お高(線香を焚き加へながら)

はい、まだ 見えませぬ。

先刻 人を 遣はして

お知らせしたで、もう、やがて――

吉次

さらば、御座ろが、この 變事――

お高、困つた ことじや、なあ。

お高

さればで、ムんす、良き縁で、

女道さまと わが娘

婚儀を あすの けふ 一と日、

俄に 病みて、この様は、

まさしく 戀の ねたみ ゆゑ

杉が 害毒――

海堡技師

吉次

やあ、おろか！

證據も ないに 人の子を

恨むは——

お高

それは 今 醫者の

お言葉 にても 知り給へ。

玄道さまの お宅 まで

きのふ あがった 晝のこと、

そこに 名高い 珊瑚樹さんごじゆの

實を 飲ませたが この終末、

吉次

さあ、その如く 疑へば、

疑ふ筋は ある けれど、

まさかに それは——

お高

いや、確か——

(お杉、生垣の蔭にて立ち聴き、恐れを
ののく。この時、玄道、花道より登場。)

お杉

おお、玄道さま。

玄道

お杉さん、

わたしは 人を 殺しませぬ。

玄道

双物を 以ては 殺さねど、

お茶には 毒を 入れて！

お杉

ええ！

玄道

さ、それは どうでも、人前ひとまへを
けふは、知らぬ と 云ひ張れよ。

お杉

はい、存ぜぬ と 申し升。

よく、まあ、來ては 下さつた、

わたしヤ 獨りで この家 の

御門 を 這入り、かねて居て。

どうぞ、お先きへ。

玄道

さあ、行かう。

(兩人、門に入る。お杉、下に齧へて居る。)

お高

玄道さま か。

吉次

これは、良く――

玄道

さらば、御免 を 被りて――

(先づ線香を焚きて、悲みのこなし。)

さて、この度 の 御變事ごんじは、

詳しく、聽けば、不思議 よな、

のぞみ盛り の 若い身 を、

よくも 縁なき 死に分れ。

されど、わが身 は、その初め――

江州 比叡ひいの 山ごもり、

十二ヶ年 の 業 さへも――

つひに 空しき 尾なが鳥、

森 の ふる根 を 飛び出だし、

まよひ 苦む その果 に、

こゝに まゐつて 侘び住ひ、

海堡 技師

計らず國の大計を

思ひ付いたがわが生命

しばしの世をば樂みの

友と定まるその人は

ああ今は早やかけばかり

お高

そんなら末はお獨りで

玄道

されば獨りを忍びつゝ

もとの坊主がする事業

海の眞中に海堡の

島根を築くたくらみも

ことにわが身を引き止めて

慰むるものあればこそ

乃ち死人が思ひ出も

わが家の珊瑚ふる樹かけ

お高

さあその珊瑚毒あれば

濃い紫の實が因果

お杉

ええ!

お高

その胸に答へては

白状せずに居られまい

吉次

お高、そりやまた何云やる

證據もなしに口外は

却てそちの咎じゃぞや

お高

それじゃと云ふて

海堡技師

だまり居れ。――

いや、なに、立道先生よ、
娘は死んでも怨むまい、
君が事業の護り神。
さては、獨りを之が爲め
送り給ふの御決心、
却て、さい先きよしと見て
こゝに一献祝ひたい。

立道

いや、先づそれは置き給へ。
われ、全國を托鉢の
巡歴こゝに十餘年、
破戒の僧のよるべなき
その半生の苦みを

この二とせに繰り返し、
要路の人を説き勧め、
やうやく出来た、糸ぐち は――
これぞ光や身の外に
わが身の慾を誘ひて、
残るまどひのかけもなく、
死に行く人のたましひと、
清き心を末長く
くらべ見るのが何よりぞ。
さはさりながら、このお杉
招き給ふは――

お高

さあ、それは――

吉次

お高の獨り合點以て、

海堡技師

何か 問ひたき ことあり と――

玄道

それは 無駄事、吉次どの、
われも お杉に 用 あれば、
これより つれて 歸り升。――
なげき 給ふな、お花子 は、
親の ゆるしの あるからは、
われに 取つての 家の妻。
庭の 珊瑚の 根を 堀りて、
そこに 最後の 和尚ぶり、
妻と 僧とを 葬りて、
海堡技師の 世に 入らん。

吉次

あつばれ、めでたき 御覺悟 や。
お花 も さぞや 冥途 にて――

お高

よろこぶ ことで ムんじよう。

玄道（また、線香を焚きて）

昨夜 居たなら、死に のぞみ、
云ふべき こともあつた のに――
ああ、残念な 別れかた。
あすよりは、かの 樹かけ にて、
わが爲す わさを 見て呉れよ。

（お杉に向ひて）

これ、お杉さん、そなたにも、

花子 は 長い お友だち、

線香 一つも 手向け して、

死人の靈に 分れては

どうじやな。

お杉 左様 致し升。

海堡技師

(お杉、おづ／＼上つて、線香を焚き、わつと泣き出せしが、何言も云はず、またもとの坐に下りる。この間、お高、吉次、玄道の思入れ、それ／＼あり。)

玄道

他行なまぢうの爲めに死に目にも

あはで別れたかなしみは、

ああ、吉次どの、お高どの、

推了しても下されい。――

それではけふの葬式は

晝後ひるごの事に致したい。

今はこれにてお暇を――

さあ、お杉さん。

お高(たまり兼て)

これ、お杉。

お杉(身をすくめて)

わしは何も知りませぬ。

吉次

まあ、けふは行け。

(玄道、庭に下りて、お杉の前を過ぐる。)

玄道

さあ、来やれ。

第二 珊瑚樹下舟出の場

(本舞臺、中程より上手、石垣の上なる亞鉛家根の小庵。椽がはの隅近く、二抱へ程の珊瑚樹の古木、其實はいまだ半ば赤し、根には、新しき墓標を立てる。庭に、熟して落つる黒き實を散らす。下手並に正面、直ぐ海の體。)

海堡 技師

右作（庭にありて）

これにて いやな 墓堀りも

やうやう 方が 附いた わえ。

こんな をかしな 葬式 は

三界 初めて 見た ものだ。

旦那 が 長い 袖 を 着て、

あたま 散切り和尚 とは、

これも けふ 見た 話しだね。

珊瑚 の かけ は、こよひ から、

ちひさい 寺と 成り居つた。

お杉（奥より出で来りて）

右作さん、まあ、腰かけて、

お茶 でもや。

お前は うまい ことを した

ひよつくり ひよつと、いろ戀の

かたき が 死んで かう 成れば、

この家 の 人 の あと釜 は

お前 の 外に 誰れ あらう。

お杉

そんな 無駄口 云うた とて、

わしには わしの 胸 が ある、

どん百姓 の 土くさい、

お前 の 知つた ことじや ない。

右作

うはさを すれば 影と やら、

旦那 は 風呂 の お歸り じや。

お茶 でも 飲んで――

お杉

お歸りよ。

海堡 技師

(玄道、登場、手拭を下げて、風呂より歸れる體。)

お杉、右作

お歸りなさいませ。

玄道

おお、お杉さん、来てか。

お杉

はい、

こよひ 來いと の 御言葉 に、
わたしや、時刻 を 待ちかねて。

玄道(椽がはに腰をかけて)

それは よくこそ。——これ、右作、

あの 無作法な 掃き方 よ。

もつと 奇麗に 掃除して、

墓の まはり を こわすまい。

右作

はい、はい、それでは 直し升。——

ああ、人間 も かう 成つて、

死んで しまへば まづいもの。

旦那は 長う 生き延びて、

海堡 と やら いふ物 を

うまく 出かして 下されい。

玄道

わしも、務めて 爲るからは、

お前も 無事に ながらへて、

わしの 仕事 を 見てくれよ。

右作

右作 は これで 病氣なし、

たゞかれやうが、ぶたれうが、

死ぬる いのちは 持たぬ わえ。

梅壘技師

お杉

わたしも、それじゃ、右作さんの
からだを分けてもらひたい。

玄道

然し、杉さん、人の身は
いつ死ぬるかも計られぬ。
たとへば、旅に出た人の
つま子に會はず倒れたり、
をんなにしては、また、腹の
子供を見ずにしまつたり、
富者は慾に死ぬ あれば、
貧しき者は飢ゑて又、
ほかにうち死に、狂ひ死に、
戀のほむらに焼け死にも、
雷に打たれて死ぬも死ぞ。

また、他の人を殺したら、

おのれも死ぬる罰を受け、

火責め、水責め。拷問の

苛責は既に地獄さだ。

しかし、杉さん、人間は、

どうせ死ぬなら、國の爲め、

人の爲めにも成つて死に、

誰れしもいやの犬死には

すまいものじゃぞ。

お杉

それは皆

おなじ心でムんしよう。

右作

さすが旦那は和尚さん、

死の講釋はうまいもの。

海堡技師

わしも これから 心して、
犬死にヤ すまい。

玄道

は、は、は、は、は。――

右作 も けふは 疲れたらう、

歸つて 休め。さりながら、

あすは いよいよ わが仕事

仕初める から、早く 来い。

右作

それでは、旦那――お杉さん、

あとは お前 に 頼み升。

お杉

承知しょうちしました。あす、お前、

早く 来てあげ 成さんせよ。

右作、退場)

玄道

お杉さん、この 手拭 を

あちら へ 懸けて――

お杉

あげましょう。

(お杉、手拭を受け取りて退場)

玄道(庭に下りて)

ああ、珊瑚の樹ぞ わが 救ひ主、

いましは 水底みぞの 玉枝 を 離れ、

水ぎは に 吹き来る 大氣 を 吸ひて、

かくもや 育つか 古木 の すがた。

若し こを 見ざれば、この 拾餘年、

空しき さまよひ 尙 踏みとめず、

わが身 を 蔽はん 陰 だに 無けん。

心は あらし と 狂ひに 狂ひ、

海堡技師

わが 追ふ道 には つゞらの 坂路、
 本来 小規^{せうき} を 畫する 嫌ひ、
 われから 進んで 難事 に 當る——
 ああ、その難事 も 目あて は なくに、
 空想 のみこそ 燃え立ちにしか。
 四十とせ 孤獨 の 熱 をば 保ち、
 この 靜 開けし 田戸海^{たど} 見れば、
 わが世 の いのち も おのづと 融けて、
 自由に 流るゝうしほ の 極み、
 遂ぐべき のぞみ は 輝き出で、
 はびこる この樹 の 樹かげ を 住家、
 わが身 の 胸 にも 光 は 満ちて、
 戀こそ うづもれ、その奥 までも、
 身づから 信ずる 心ぞ 照らん。
 わが妻、わが戀、若し 靈 あらば、

わが爲す 事業 を 樹かげ に 護れ。

(お杉、茶を入れて、再び登場。)

お杉

お茶 召しあがれ、玄道さま。

玄道(椽に上りて)

いや、濟みませぬ。

お杉(あまへる體にて)

玄道さま、

あなたが こよひ 疾く 來いと

わたし を 呼んだ その事 は——

玄道

ほかでも 無いが、たゞ 一つ——

先づ 見せたい は この急須。

(玄道、立つて奥に入り、急須を持ち出づる。)

これは どうした 急須 じやな。

海堡 技師

お杉(見て驚き)

これは 昨日 二の棚に
置き忘れたが――

玄道

その證據、

中に 這入つた 黒い實 は――

お杉

紫すんだ 色 見れば、

あの 珊瑚樹珊瑚樹の 實 の やうで――

玄道

誰れが 入れたか。

お杉

わしや 知らぬ。

玄道

いゝや、何程 隠しても、

こゝで、知らぬ は 云はされぬ。

如何に 毒 とは 云ひながら、

この實 ばかりじや 殺せまい、

ほかに 入れた は 何ぐすり――

この茶 は そちに 飲める かや。

お杉

ええ、それは――

玄道

さあ、飲める かや。

お杉(煩悶のこなし、遂に決心して)

あの、玄道さま、わたしや 今

尼なまに 成りたう 入り升。

玄道

その決心 は 御もつとも、

然し、髪を 剃らうが、剃るまいが、

海堡技師

人を殺して、その罪を
のがれうことは六ヶしい。
急須のなかの毒薬を
一緒に棄てて行きがてら、
そちを招いたその譚は
海の上にて話したい。
さいはひ、こよひ月は雲、
暗きをしほに、これ、お杉。

(と、玄道、うながすこなし。)

お杉 はい。

玄道

わが舟に乗つて呉れ。

お杉

あなたの御座るところなら、

天竺までも御一緒に――

玄道

それでは、海の上に出て――

舟の用意はしてあれば、

あれへ――

お杉

それでは、まわり升。

(兩人、用意の舟へ下りて行く心。)

第三 富津の海人柱の場

(本舞臺、すべて闇夜の浪間の體、遠く伊豆、房總
の山々を黒める。)

金むく(金色の着附けにて)

銀むく 出たか。

銀むく(銀色の着附けにて)

海堡技師

金むく 出たか。

瑠璃兒(瑠璃色の着附けにて)

瑠璃兒 も 出たぞ。

金むく

ま近かに 寄れや。

銀むく

眞闇まごもの海は

瑠璃兒

われらの 領ぞ。りやうぞ

金むく

歌ひて 共に――

銀むく、瑠璃兒

浪間なままを 踊れ。

三者(合唱、踊る。)

われら 三人みたりは

浪間 に 浮きて、

浪の うねく

その夜 を 踊る。

遠き ひどきは

われらの――

金むく

舟が 来た。

銀むく

實けに 舟が――

瑠璃兒

舟が 来たなら、

三者

逃げ込まう。

(三者、引き込むと、玄道、身づから舟を蹴し、お杉と共に登場。)

お杉

玄道さまや、この間に
寂しい海の浪分けて、
どこまで舟を――

玄道

進むとや。

こゝまで来たが おもほくで――

五拾四尋の底深み、

石を築いて海堡の

第一工事初めるは、

乃ち、こゝぞ。

お杉 それならば、

かねて お話しした通り、

富津の海でムんすか。

玄道

それぞ――初めてそちに聴き、

思ひ當つたこの工事、三の月、

そちを女と云ひながら、

さかしい智慧は玄道が

身にあり難く受け継ぎて、

あすより多勢手を下だし、

われは世外の監督者。

世にも人にもぞみ無く、

たゞ一心をこの海日に

ささげまつた國の贅。

十とせ、二十とせ、その末は、

第二第三工事をも

自然の島と築きあげ、

そちが願ひは、敵國の

あだに備ふる砲として、

海堡技師

その數 あまた 据わるべし。

その時こそは おほ君の

宮居も 安き 東京灣、

観音崎の こなた には

塵も 非禮は 受けさせぬ。

お杉

それで、わたしが、この日頃、

人には 馬鹿と 歌はれて、

語り暮した おもはくも

嬉しう かなひ升 わいな。

玄道

それば もつとも、さりながら、

深き底 より つき上げて

浪のおもてに 島三つは、

たゞ事にては 出来まいぞ。

お杉

わたしヤ 心で——

(この時、いな妻あり。)

玄道

祈るとや、

たゞ それのみで かなふまい。

そちを こゝまで つれ来たは、

ほかに 大事を 頼む 爲め。

お杉

お爲めに 成らう ことならば、

そりヤ 何ごとも——

玄道 してやる、と。

そちも よく 知る やまと武、

その尊には 妻ありて、

御名を——

海堡技師

お杉

立花姫 とやら、

をつと の難儀を救ふ爲め、

丁度 この海、このあたり、

おん身を投げて――

(また、稲妻雷の音。)

玄道

失せ給ふ――

されば、そのこと、そちらにして、

左程 わが身を思ふなら――

お杉

ええ!

玄道

また、死んで 呉れまいか。

昔から 云ふ 人ばしら、

二拾、三拾、年を經て、

海堡島 と 浮きあがり、

お杉

いやじゃ、わしや、いや、死んだなら、

お顔 見られう 筈はない。

死ぬる 代りに、わたくしを

尻にさして、のう。

玄道

(また、稲妻、これ、お杉、

そちは この世 に返つても、

生きて居られう ものか。そも、

賢い だけに、そちは又、

戀の 妄執 深ければ、

海に沈みて、わが爲めに、

國の 工事を根に 長く

海堡技師

護つて呉れよ。

(断行の機迫ることなし。また稻妻、大雷の音、

お杉

ああ、そのお顔、そのお目よ。——

誰れぞ 助けて 下さんせ。

(また、稻妻。)

稻妻 まだが あの通り

わたしを 責めて おどす のか。

(また、大雷。)

ああ、かみ鳴り も また わしを——

たとひ 稻妻、かみ鳴り が

責めに 責めても 厭はねど、

あなた と いち度 死に別れ、

住む世 違へば、またと 又

なんで わたしが 浮べられう。

生きて さへ 居ば——

(また、大雷。)

(稻妻、大雷。)

お杉

あれ、また、雷が 鳴る わいな——

(立道の手にすがり付きて。)

わたしや 千年 會はいでも、

あなた と 同じ世に 住んで

居たり ムんす。

(また、大雷。)

こゝで 稻妻、大雷に

打たれて 死なば、どうするぞ。

(立道、お杉を振り拂ふ。)

海堡技師

お杉(身を避けて)

ああ、そのこわいお顔つき——
こんな難儀と知るならば、
来はせぬものを——

玄道

ええ、聞き分けは出来なにか。

(玄道、お杉を捕へる。)

お杉

どうぞ 助けて 下さんせ。
わしや 死になうは——

(お杉、泣き伏す。)

玄道

ええ！ ないと——
かうしばつても、まだ、無いか。

(玄道、お杉を縛す。)

お杉(縛られしまゝ涙をぬぐひ)

ええ！ 玄道さま、もう、今は

覚悟(致して)ムリ升。

どうとも思ふ存分に

されるがわしの本望ぞ。

人の、はかない身の上を、

あの、先刻の御講釋、

思ひ當つて、ムリ升。

せめて、大死にせぬやうに、

お爲めに、成つて——

玄道

ああ、お杉、

そう、聞き分けて、呉れるなら、

そちが罪業、うすらいで、

海堡 技師

(毒藥入りの急須を出す。)

この毒藥に 殺された

お花も さぞや 喜ばう。

急須の 毒と もろ共に

この ひろ海に 沈むなら、

罪と なやみは 無くなつて、

そちが 心も 清いぞや。

(急須を投げ込む。)

それでは、かわいさうなれど、

この おほ石に 従つて、

水底の 神に 成つて呉れ。

(石をお杉の身に結びつける。)

お杉

ああ、情け無い——

玄道 これ、お杉。

お杉(手を合はして)

何んにも 云はぬ、玄道さま、

どうぞ、末とも この わしを

おぼえて 居つて 下されや。

玄道

わしも 男じゃ、この上は

そちが 願ひを 無には せぬ。

お杉(全く覺悟して)

さらば、わたしは 水底にて——

玄道(石を手離さんとして)

きつと 護つて呉れよ、杉。

お杉

南無——玄道さま。

玄道 杉、さらば。

お杉

南無阿彌陀佛！（お杉、沈む。）

南無阿彌陀佛！（お杉、沈む。）

ああ、これが――

（分れかと、玄道、暫く歎息、やがて舟中に立ち上る。）

玄道

南無――復 浮ばね――南無阿彌陀佛！

ああ、天、ひそみて わが この秘密、

一心不亂 の つとめに 照れよ。

わが世 は、乃ち、海 その物 ぞ、

わが身 は 浮木の 響に 燃えて、

焼け死ぬ 罰をも 辞する に あらず。

（玄道、また舟を熾して退場。あとに

月、雲を出づる。）

金むく

銀むく 出たか。

銀むく

金むく 出たか。

瑠璃兒

瑠璃兒 も 出たぞ。

金むく ま近かに 寄れや。

銀むく

真闇の海は――

瑠璃兒 われらの 領ぞ。

金むく

歌ひて 共に――

銀むく、瑠璃兒

浪間を 踊れ。

三者（合唱、踊る）

われら 三人は

海堡技師

浪のうねく
その夜を踊る。

遠きひどきは
われらの母ぞ、

いづこ 如何なる

住まひにありて、

身をば 生みしか

知るよし なしも。

中 幕

第一 第一海堡懷舊の場

(本舞臺、すべて海上新築の石垣島、土手様のところに、短き松など植わる。所々に青草をあしらふ。男女の土方、大饗晝飯を食ふ體。)

男一(下手より、空番を擔ぎて)

早く 成りたや

沖べの浪に、一人の赤き文士は、奥の式より、

女男の白裳の

もつれ合ひ。

男二(上手より、おなじく)

ぬしは 梅なりや、

海堡技師

わしや、うぐひすよ、
それと、かをり（を）

探り 寄る。

（いづれも、晝飯の仲間に加はる。皆皆、無言にて
箸を運び居る時、一人の若き女土方、奥の方より、
土を盛りたる畚を擔ぎて、登場。）

女一

あらしや 吹くなら、

海堡 まで 吹けよ、

あすは （おぬしと）

朝ごもり。

男一同 （一） 海堡對書の歌

やんや、やんや。

女二

中の女數名 やんや、やんや。

姉さん、うまくなつたのう。

女一

何んだいな、お前たちやア、もう、終ま

ひかけか。

男三

そうよ、飯でも食ふのが極樂だ。毎日、

朝の四時頃から、晩は暗くなるまでも、

働（た）くばかりじやアたまつたものでねい。

男四

金は取れるとしても、そう働けるものじ

やアねい。

女二

まア、考へて見ると長いものじや。毎日

毎日、富津から来て、かうやつて土ばか

り運んで居るが、おんなじ事で面白くも

海堡 技師

ない。

男五

うまく云つて居らア。おまやこの海堡かいぼりの

お蔭かげでよ——

男三

そうよ、男も出来たし、子供も四五人。

女二

お前も色が出来た辯まがにさ。

男五

違ちがひねい。そうして、見りやア、つまり

ねいなアおれ達ばかりよ。

女三

なアに、いゝのを拵こしらへるさ。

一同

そうだ、そうだ。

女四(辨當を提げながら)

お杉すぎヤ かわいや、

海堡かいぼりの 底で、

思ふ男の

人ばしら。

男一

いよう、留とどの伯母おばさん、何もムいませぬ

が、どうぞお茶つけでも——

女四

おや、どこの兄あにさんかと思つたら、八兵

衛ゑいぢといかい。

男一

かわいさうなこと云ふな。——それはさ

うと、お杉すぎといやア、毎日、毎日、歌は

れて居ゐるのだが、技師わざしの親方が止めない

海堡 技師

なアどうしたのだらう。

男二

そりやア、もう、一と昔も先きのことだからさ。

女四

然し本統のことなら、棄てても置けないだらうによ。

若者

そこに 不思議な ことが ある、
どれ、今、おれが 演説 を――

(若者、立ち上る。)

女 ヒヤク。

男 辯士 頼むぞ。

若者(様子をつくろひて)

そもそも、諸君、この島が

出来はじまりに 於きまして、

底に 沈めた その石 を

直しに 行つた、重助が

女の 死骸 を 見つけ出し、

びつくり、ぎよつと 仰天の

急に、あがつて 來ましたが、

『かまうものか』と、技師長は

どし／＼石を 投げ込ませ、

二度と 再び その人 の

影は 見えなく 成りました。

これが お杉で あつたらう、

お杉に 違ひないもの と、

世間で 『お杉や かわいや』の

唄が 出来た は、わたくしが

十か 十一の あはれ時。

海堡 技師

今では、人は 技師長の――

こゝだ――自分の 色を さへ

殺して までも、海堡の

工事に 盡す 熱心を

讃めて 居るので ムい升。

男 ヒヤ／＼。

女 本統にえらいお方だなア。

若者(一しほ様子をつくろひて)

ところが、こゝに 不思議な

わたくし共の 盛り上げた

土に 生えます、草の葉を

透かして 見ると、うつくしい

をんな姿 が 見える とか、

技師長どの は、あさゆふに、

これを 葉毎に すかし見て、

見當る 時に 限つては

口の内 にて 獨り言。

これは 諸君 も、つね日頃、

御覽に 成つた ことでしょう。

一同

ヒヤ／＼。

男三

諸君はよくわかりました。

女一

虎ちゃんの演説は本統にうまいものだ。

然し、この草の葉はお杉さんの幽霊が見

えるのからん。

男四

なアに、そりやア、寺の和尚さんなどの

海堡 技師

云ふ心の迷ひではあるめいか。

(二人また三人、技師長の爲る體を真似て、草の葉を透かし見る。この時立道皆々の不意に登場。)

立道

さあ、お前達、もう、書飯もすんで、休息も出来たらう。また一いき働いてもらはう。

(皆々がやくくと退場。立道、靜かに之を見送る。)

ああ、人間といふものは、

兎角、異性をちから草、

かうして男女もろ共に

働かすれば勇み立ち、

たとへば、遠きみどり野の

露に群れ跳ぶ女男鹿や、

あまた分れてまたつどひ、

疲れて歸るゆふぐれに

山のけしきを畫く如、人の

わがいとなみもおのづから

早や第一を成し就げて

思へば、あはれ、之が爲め

贅と成つたるお杉女よ。

この海堡の島根には、

萌ゆる草葉もなつかしく、

手に取つて見る葉ずるには、

南無阿彌陀佛と沈み行く

そちが姿ぞ忍ばるゝ。

(葉を取て透し見る時、唄聴ゆ。立道、ぞつとすこなし。)

唄(かげにて)

お杉ヤ かわいや、

海堡技師

海堡の底で、

思ふ男の

人ばしら。

玄道(感に迫つて)

許して 呉れよ、ああ、お杉、

今となつては、むさむさと

殺すにや 及ばなかつたに。

(下役、登場。)

下役

技師長、船がまわりました。

玄道

それでは、今から第二工事を見まわらう。

第二 第二海堡潜水夫の場

玄道(本舞臺、すべて海面、中央に、工事の番
船やどる。)

船唄

伊豆にや 伊豆石、

男にや 船頭、

あついでむな板

深みに 浮けて、

船は 五百石

あら海 渡る。

案じ召さるな、

お案じ召すな、

乗せたころは

石よりや かたい、

おまや 風なら、

わしや また 浪よ、

海堡技師

戀にもまれて

勇みは増さる。

待たれ、待たしやれ、

けふも亦酒で、

歸りやお前の

膝まくら か、よう。

船頭一

さア、来たぞ。ひかへた。

船頭二

よし来た。

(船を控へて、石船、下手に止まる。)

下役(番ぶねの上にて)

太平の船だな。

船頭一

左様で△い升。ナント橋頭、中央、工事の番

下役

それでは、石はこの邊に投げ込むのだ。

船頭一

さア、こゝださうじゃ、投げ込めく。

(石を投げ込む最中に、左道の船、上手より

來たる。)

下役

技師長、これで、石ぶねは

十三杯で△り升。

これから、底をととのへに、

もぐりを 入れますが――

左道

そうか。――工事もはかどつて、

第一はもう△來上り、

この第二さへやがて又

海堡 技師

かしらを出すであらうから、

これで首尾よく第三が

出来れば、われも御用済み。

拾年 光きに、この三つの

海堡島と猿島に

要塞砲が据わるなら、

東京灣は無事なもの。

田戸の海邊の静けさは、

乃ち、これが前表だ。

まあ、精出して君達に

やつて貰ははう。

下役

それこそに

わたくし共が日々に

望むところでムリ升。

この大工事は、初めから、

技師長どのお骨折、

たふとい山のお位を

見棄て、までも成さるとか。

受け給はれば、塵ひぢも

また、おろそかに成りませぬ。

玄道

いや、御苦勞なことだわい。

やあ、重助よ、お前にも

日ごろ大儀を掛けて居る。

重助(番船の中にて)

これが河童の役目だよ、

もぐりもここに長いこと。

海の底での石なぶり、

まだその石にヤ飽かねども、

海堡技師

めづらしかつたおほ魚の
左右に 泳ぐ、行列も

今は 普通の こと、成り、
たまに 攻め来る 赤鯛 を

こわい、こわいの 氣も 失せて、
ひとり 思へば、わが身にも

尾ひれ つかぬが 不思議 だよ。
やがて、旦那 の からだ にも

石が 脹れやう。
受付餘計、馴しは、は、は、は、は。

いつも、お前は 面白い、
お前に 會ふは、わが身の

楽しい ことの 一つ だぞ。
この いとなみの ある限り、

變らず やつて 貰ひたい。
水底 の 石 と もろ共に

われら 試験 を 積んだから、
第二工事 は さすがにも

最初の やうに 難でない。
重助

いや、もう、旦那、御もつとも、
この勢 で 行く 時は、

あとの 海堡、第三 を
水に もぐらす 致すやう

成りたい ものだ。
女道

如何に 成らうか——さりながら、
お前 の 役 を たふれば、

海堡 技師

高き 御空 を 揚げ雲雀

歌ひ あがつて、人の目に

見えぬ 光 を 浴びる 如、

深き に 入りて、若し、お前、

心の眼 開らき 得ば、

あまつ御寶、金むくの

落ち穂 を 拾ふ ことも あり。

高き 深き は、人の世 を

くどつて 後に わかるのだ。

(この時、石船、空に成りたれば、歸り行く。船頭、また唄を歌ふ、文句は先きのより抜きたるものにして、節も亦同じ。)

船頭(船を舩して、歸りながら)

待たれ、待たしやれ、

けふも亦 酒で、

歸りや お前の

膝まくら か、よう。

下役

石が かた付きました から、

さあ、重助 を 支度して

這入らせましょう。

玄道

それが よい。

重助(潜水の用意をしながら)

これから またも 底へ 行て、

乙姫城 の そと圍ひ、

石 を なぶつて 來ましようか。

仰せ の 通り、金むくの

落ち穂 が 落ちて 居たならば、

仲間 に 割つて 分けま しよう。

海圖技師

然し、むかしの土左衛門、
をんなであつたやうなのは、
もう、眞つ平だ。

玄道 は、は、は、は、は。

下役(重助を沈めんとして)

重助、よいか。

重助(潜水器の中より)

おお。

下役 さらば。

玄道(じつと見て居たるが)
ああ、沈んでも、また無事に
浮ぶものさへあるに――

下役 ええ。

玄道

なに、重助が浮き沈み、
まことに活きた世の手本――
面白いなあ。

下役

は、いかさま。

第三 第三海堡水底の場

(本舞臺、すべて海底の體、中央に大小の伊
豆石、あまたころがる。當場、特に、紅、
白、青の電氣を使ひ分くること。赤鯛王は
その頭に鯛の形を、鎧やつこは背にかな鎧
を、眞珠星、珊瑚姫、並に百合子は、又か
しらに各々その名の形を戴く。)

赤鯛王(あとのものを導き來りて)

さあ、君がたは こちら にて

しばし 休息 致されよ。

海堡技師

鏈奴

まことに けふは 結構な、
世にも 稀なる あるじ振り――

眞珠星

われ／＼共 は、日本の
いと新らしき 酒ほぎ に、
酔ひも さながら 風ぐるま――

珊瑚姫

目も亦 共に くるくると――

百合子

めぐる こゝ地 で――

四者

ムリ升。

(四者、石を座に腰かける。)

鏈奴

赤鯛王の 御馳走 を

この 鏈やつこ――

眞珠星

眞珠星――

珊瑚姫

珊瑚 も――

百合子

百合 も もろ共に――

鏈奴

お禮 を 申し――

四者

上げます。

赤鯛王(また、腰かけて)

それは 重々 ありがたい、

君がた 諸氏の おん仰せ、

梅 堡 技 師

あまり 體よき もてなしを
致しかねた が、身に 取りて
不本意ながら——さて、諸君、
孰れも 遠い 國々の
海 から お出で 下されて、
さぞ 面白い お話 が
聽かれる ことに 相違ない。
身の上ばなし も、いち場の
座興 に ならう。さあ、諸君、
今から お聴き 申したい。

鎚奴

それでは こゝな 鎚やつこ、
先づ お話し を 初めよう——
（立ち上つて、こなしを爲ながら。）
脊中 に 負うた この鎚の

由來 を 云はゞ、その昔、
ギリシャ の 古代 神人の
御代 に ヘーファイストス神、
父、おほ神 に 棄てられて、
海 の テチス の 宮すまひ。
假りの 御母 の ふところ に、
渠、冥想 の 熱 を 受け、
天をば 戀ふる 悲み を
この 黒かね と 鍛ひ上げ、
形 が 出来た 鎚 を 以て
再び 鍛ひ上げた のは、
アガメムノーンの かな杖 と、
また アヒレウスの ちから楯。
二つは 時 の おもひ出 に
のこりて 今も 輝けど、

海堡 技師

その もとゐ なる くる 錠は、
乃ち、僕 の この脊な に。

(座に着く。)

珊瑚姫

さらば、珊瑚 も、その昔、
死なぬ いのち を 給はつた
その 故よしの あらまし を――

(立ち上る。)

印度の國 に 大教主、
釋尊 生れましまして、
諸方 の 民 を 救ひ上げ、
功德 を ひろめ給ふ うち、
南の海 に 龍王 の
むすめ、龍女 も これを 聴き。
妙華 は 開く 浪の間 に

玉 を さへげて 湧き出だし、
佛 の みに 禮讃 の
偈 を 説き申す その 時ぞ、
不滅 の 救ひ 給はつて、
娑竭羅龍宮 の 玉垣 を
歡喜 の 光 さしめぐり、
王も、しもべも、その家も
成佛 の 果 を 得ましたが、
今や かの國 亡びては、
その果 を 示めす ものも 無く、
ほとけ の 御手 に 一たびは
觸れて、育つた 赤えだ を
保つ 眞玉 は わたし のみ。
(座に着く。)

眞珠星

海堡技師

次ぎには こゝな 眞珠星、

僕は 野そだち 海そだち、

いふべき よしも くらねど、

輪番 ならば 止むを 得ず。

(立ち上る。)

そも わが もとの 宿世 とは、

水を 離れた あを空 の

野もせ に 散らふ 露の玉。

日の 入る頃に 目を 覺めて

きらり 煌めく まなざしも、

日の出 と 共に 眠りては

仰ぎ見る もの 更らに なく、

あかるき闇 に とざされて

晝 を 送るが 不興さ に、

そこを 或日ぞ すべり落ち、

南大洋 は、あわ浪 の

木曜島 の 海中 に、

暗き を 追ひて しろ眞珠。

含む 青、赤、濃い緑、

黄いろ も しほ に 磨かれて

盡きぬ光 を 放てども、

人は——おろかの 物さぐり——

薄い あこやの貝 に のみ

まよひ居れば、ぞ、今、こゝに

かしこき友 を 求め得て、

僕が よろこび 如何ばかり。

(座に着く。)

百合子 (立ち上りて)

いと ふつゝかな この 百合子、

わたしは 皆と かけ離れ、

海 壁 技 師

スリヤの陸は、ガリラヤの
 湖水のふちの山小百合、
 神のまゝなるころも着て、
 あすを勞めず續がねど、
 また、けふ咲かす花しべを
 ゆふべの爐火に入れるとも、
 あまつ御ごころ斯くとこそ
 信ぜば、如何で、歎かれう。
 飲み食ひの爲め死なんより、
 いのちの糧を身に占めよ。
 會てキリスト、わがそばを
 通り給ひて見よや、人、
 ソロモンさへもその榮華
 斯くは極めしことなし』と、
 身をばゆび指すその御手の

清らに しづく、水の面を
 深くも 忍ぶ わが影は、
 光と 凝りて この花藻。
 あとに 棄て置く から藥を
 人は 頻りに 讃むれども、
 まことの道を 受けつぐは、
 乃ち、この身、この わたし。

(座に着く。)

赤鯛王

諸君の つぎはこの あるじ、
 赤鯛も また 日の本の
 立ち場を 申し 上げましょう。

(立ち上る。)

神代、伊弉諾、伊弉册の
 御子に ふたりの みこと あり。

海壁技師

姉はその名をおほひる女、
 宇内を照らす御光に
 山河草木くらのを得、
 おとはすさの男、すさましく
 怒れば、山を泣き枯らし、
 海を泣き乾すおほあらし。
 女男の御はしら、あめ地を
 一つに治め立ちてより、
 人に生々活動の
 力は湧いて、滾々と
 盡くることなきうまし國、
 神の御末をいたゞいて――
 ながれ亂れぬ文運よ――
 いまだわれらがこれを継ぎ、
 他國に走る機を生ます。

されば、鏡どの、珊瑚姫、
 眞珠御星と百合どのの
 よたりをお招き申したは、
 諸氏が齎らす冥想と、
 不滅と、自然、信仰を
 わが活動に搦きまぜて、
 こゝに天下に雄飛する
 新代の浪を揚げる爲め。
 諸君よ、如何に。(座に着く。)

鏡奴

お言葉は

至極 同意で――

四者

ムリ升。

眞珠星

海堡技師

たゞ 聴きたいは、先刻も
異様な音の 坐に ひどき、
われらの 胸を ゆすつたは――

赤鯛王

それは、乃ち、われら 今
腰を かけ居る、おほ石の
うへより 落ちて 来た ひどき。

珊瑚姫

して、この石は 何の爲め――

赤鯛王

これは、そのかみ、兩尊の
奇しき力に 大八洲
生ませ給ふた 例に 依り、
人の心の 智慧を 以て
島を 生み出す たくみ事。

早や 第一と 第二とは――

只今 御覽の 通り――よく

作り終つて、第三の

工事に 専ら かゝり 居り――

百合子

成程、骨の 折れること。

珊瑚姫

人間も 亦 神わざを
つとむるやうに 成つて 来て――

鐘奴

かういふ 物が 出来るのも、
この 日の本 の 人々に
絶えぬ 歴史が あればこそ。

眞珠星

且は、世界 の 國々の

海堡 技師

大勢、こゝに迫り来て、

これがうへ越す骨りの

始まりなるか。

さあ、さあ、さあ、さあ、

さあ、さあ、さあ、さあ、

赤鯛王

されば、次ぎには、二はしら

女男の兄弟あれし如、

潜む力の延び行かば、

世に歌ふべき人物も

生れることであらう。

工部、さあ、さあ、さあ、

さあ、さあ、さあ、さあ、

さあ、さあ、さあ、さあ、

さあ、さあ、さあ、さあ、

貫らうのが――

鏈、真珠

われらの望み――

(この時、重助の潜水器、下だり来る。)

百合、珊瑚

あの影は――

赤鯛王

は、は、は、あれこそこの石を

直しにまゐる潜水夫。

鏈奴

人のさまたげ致すのは

不本意。

真珠屋

されば、珊瑚どの。

珊瑚姫

海堡技師

真珠屋どの。

鏈奴

百合子どの。

百合子

さあ、鏈どのももろ共に。

赤鯛王

どうか、あちらへ移られよ。

(孰れも退場。こゝに、潜水夫の仕事を見せること、三色電氣の光に、種々の遊魚を走らすべし。)

詰の幕

第一 玄道退隠祝ひの場(夢の一)

(本舞臺、すべて某會場の庭園。後ろ一面に幕を張り、幕の前にテーブル、椅子等の備へあり。技師長退隠祝ひの席。陸軍大臣、參謀總長、衆議院議長、神奈川知事、代議士、縣會議員、士官、官吏等、玄道と重助とを取り巻いて、立つあり、坐するあり。かげなる軍隊の洋々たる奏樂聲裏に、酒宴、酣なる體。そこへ下手より、發起人の一人、登場。)

發起人

今日は、先刻、發起人の一人が申し上りました通り、參謀本部の計畫にかゝる海堡工事が完成致しましたので、こゝに亙る技師長星野玄道君が、そのお役を御退隠に成られまするに付き、われわれは之を祝する爲め、同君並に潜水夫重

海堡技師

助君と共に、諸君をお招き申しましたところ、遠方のところを、お出下さつた陸軍大臣、参謀總長、並に衆議院議長閣下を初め、神奈川縣知事閣下、軍人官吏のかたがた、代議士、縣會議員、その他諸君の御來臨を恭うし、われわれ發起人等の面目にムリ升。これから、また、工事に關係致しました土方どもが、祝ひの餘興として、土方踊りと申すを御覽に入れるさうでムい升。

(役員、目くばせすると、下手より、男女大勢の土方登場、舞臺の中央に輪を作り、音頭取り、その真中に入り、唄を歌ひつゝ大鼓を打つと、一節毎に、踊り子、疊句を和す。)

土方踊の唄

おまや 何處 行く、
海堡の島へ、

をとこ 欲しやの

土方擔ぎ。

(こら、さツさい。)

ぬしは 何處 行く、

海堡のうへで、

をなご 欲しやの

働き振りよ。

(こら、さツさい。)

兎角、浮き世は

をとこ とをなご、

ぬし と お前の

相持ち所帯。

(こら、さツさい。)

海堡技師

戀も 出来たりヤ、

海堡も 出来て、

國は 泰平、

家には 安樂。

(こら、さッさい。)

めでた、めでたの

わが 日本よ。

あすは、朝日も

光を増さう。

(こら、さッさい。)

(土方一同、踊り終つて退場。)

陸軍大臣(立ち上つて)

いや、どうも、面白い踊りであつた。——これより、諸君と

共に、星野君の萬歳を祝しましょう。

(一同、立ち上る。)

海堡工事擔當技師長、星野玄道君萬歳。

一同 萬歳。(一同、坐わる。)

陸軍大臣(進み出で、)

星野君、あなたもこれで御満足であらう。工事もあの通り立派に出来上れば、たとへ御退隱になつてもあなたの御手柄はいつまでもごびませんぞ。この陸軍大臣も、嬉しさの餘り、充分の歡を盡しました。今日はこれでお別れ申し升。

(大臣、二三の軍人と共に退場。)

參謀總長(進み出で、)

星野君、わたしも随分酔つたわい。これで、御免を被らう。——然し、觀音崎要塞の秘密を成し遂げて呉れたあなただから、昔なら、退隱どころではない——打ち首だわ。

海堡 技師

は、は、は、は。それだけ、あなたは大切なお方だ。この
参謀總長、實にあり難い。——これで、御免。
(参謀總長、一三三の軍人と共に退場。)

衆議院議長

星野君、あなたが多年のお骨折は、つひに大事業の成功を
見たのです。この衆議院議長、國民の代表者として、この
席に列ることを得ましたのは、甚だ光榮の次第。どうか、
御退隱の後も、御老體を御大切に——今日は、これで御免
を被り升。

神奈川縣知事

この神奈川縣知事も、一言、お別れを申し上げ升。承はり
ますれば、この後とても、矢張り、この田戸の海邊にお住
ひ爲さるる由。あなたの如き人物がこの縣下に住はれるの
は、縣民すべての喜ぶとるでムい升。

(衆議院議長、神奈川縣知事、退場。それより、あ

との軍人、官吏、代議士、縣會議員等、各々玄道に
默禮し退場。あとに、今まで無言にて答禮しつゝ、
ありし玄道、夢心地にて、重助と残る。)

公衆の聲(諸方より、舞臺のかけにて)

玄道君萬歳。

(玄道、重助、驚くこなし。いつしか、後ろの幔幕、
おのづから外れ落ち、テーブル、椅子等、煙に包ま
る。この時、大浪の音きこえて、上手より、一人の
土方、あわたとしく登場。)

土方

旦那、大變でムい升。只今、おほ津浪が打つて来て、海堡
は皆碎けてしまひましたぞ。

玄道

え、こりや 夢 では 無いか——ああ、
三拾年來、おほ勢 の
人手 に 掛けて、やうくくに

海堡 技師

造り上つた海堡は、
津波の爲めに碎かれて、
われらすべての骨折も
また海底に沈んだか。

重助――

重助

旦那――

玄道

早く来い。

(玄道、上手へ行きかけると、その身體、意の如くならぬこなし、やがて、重助並に土方と共に、煙の中に消える。あと、浪幕をおろし、浪に因める音楽にてつゞける。)

第二 茫漠たる海底の平原(夢の二)

(浪幕を切つて落すと、本舞臺、花道にかけて一面の野原、雷氣の光にて、海底なることを示めす。金むく、銀むく並に瑠璃兒の着付け以前の如し。)

金むく

おい、銀むくよ、この頃は

富津の海も かわり来て、

浪のおもてにや、いそがしく

照る月かけを 踏み破り、

くろ船、あまた 行きかへば、

うかく うへにや 浮ばれぬ。

銀むく

そりや、金むくの いふ通り、

海堡技師

殊に 速くて こわいの は、
水雷 と やら いふ 船ぞ。
きのふも 鯛 と おほ鱒 は、
これと 競争 して見た が、
目頃 自慢 の 速力 は
とても 話しにや ならぬ わえ。

瑠璃兒

人間 の 子 も なかなか
瑠璃兒 が 思ふ 程じゃ ない。
馬鹿にや なるまい、こまさまの
工風 を 凝らす 魔物 ぞや。
船は まだしも、この底 に
石 を 築きて、三つ までも
海堡 と やら いふ 島 が
出来たわ。

金むく

要塞地 だと 布れ込みて、
自分 ばかり が 主人がほ。
銀むく

から、他の人を 許さねば
われらが 磨く 風景 を
繪に さへ 作る ものは ない。
瑠璃兒

且、かう やつて、夜もすがら
潜み居る の も 退屈で――
金むく

たまに うち出す 大砲 の
音 と けむり が――

銀むく

海堡 技師

見せしよ。

かわつた 世界――

瑠璃兒

あらたの世――

金むく

暁の光が目を覺まし――

銀むく

山からのぞく 度毎に――

瑠璃兒

どんな 心で――

芝居

見るだらう。

金むく

して、また 知らぬ 錨やつこ――

銀むく

また 眞珠星、珊瑚姫――

瑠璃兒

百合子 などの 渡り來て――

金むく

かの あたらしい 島々の――

銀むく

めぐりを 圍む 幔幕に――

瑠璃兒

青むらさきの しほ浪を――

金むく

貯へ寄する いそがしさ。

銀むく

その しほ浪の 高まりて――

瑠璃兒

人の都を 動かさば――

海堡技師

金むく

如何なるさまに色めいて――

銀むく

世の文明は――

三者

定まらう。

金むく

何しろ、これを監督の――

銀むく

赤鯛王が骨折りは――

瑠璃兒

並み大底の――

三者

事じゃない。

金むく

「そら、また、あんな――」

三者

人間が――

（三者退場、花道より、一個の若作くりの僧形、悠々として登場。）

僧形

ああ、悠々のこの天地、

行くとし限るものもなく――

いつこの果に生れたか、

たゞ二笠のわが心。

親なく、子なく、妻もなき

身はあま驅ける鳳の鳥、

野越え、山越え、海越えて、

渡るあなたも冥想の

つばさの下に輝くよ。

海堡技師

わが 世の光、わが望み
 見ゆる 限りは、路ばたの
 樹かげ に 結ぶ 夢に さへ
 無量の いのち 溢れ来て、
 ほろび の 闇 は いつまでも
 忍び入るべき すきぞ なき。
 ああ、われ ながら こゝ地良の
 旅路 には ある。

(段々、本舞臺に來たる。下手より一女、登場。)

一女 お花のおも影)

のう、御僧、

わし をも つれて 行つてたも。
 珊瑚 の 樹下 に、わが躰 は
 どうして 獨り 忍ばれう。
 二十餘年 の とし月 を

無言で 居たは お前 ゆゑ、

お前 が そばに 住む 爲めぞ。

儂形

如何なる 人の子 なればか、
 われを 追ひ来て、斯くまでも
 深き 水底 の 花 と 咲く。
 こゝは 世びと の 力 以て
 いき する 道は 絶えたるに――
 とくどく 歸り給はれよ、
 死てふ おそれ に 捉はれう。

一女

いや、いや、お前が 住める なら、
 わしも 露世 に 活きられう。

(この時、上手より一女、狂亂のすがたにて登場。)

一女(お杉のおも影)

海堡 技師

のう、のう、御僧、なつかしや、
わしや、これまでも お前 ゆゑ
待つて 居ました。

また、しても、

そちは 何もの。

もう、見わすれて、ムる とは。

わしや、お前 ゆゑ、三人の
子、まで 拵へた 仲じやのに――

僧形
これは 怪しかる をんな かな、
穢れし こと葉 云ひかけて、

一意 修業 に 勵む身 を――

二女

いや、いや、そうは 云はされぬ。

第一、第二、第三の

海堡 は わしが 生んだ 子ぞ。

一女

憎い女 よ、わが良人に

人の 繼子 を 生まさうか。

二女

そりや、こちら から 云ふことぞ、

おまや からだ も 痛めずに――

一女

そんなら おまや 賣女 かや。

二女

お前こそ その 辻君 の

わざ を 仕掛けて、この人 を――

一女

いや、わたしの――

二女

いや、わしが――

(これより、樂座の唄。二人、舞ふ。)

樂座

男 一人に、をんなは二人、

思ひ合ふたが 敵 味かた、

昔、つれ立ち、寺小屋行き の

若い 友垣、その時 破れ、

戀 の ほむらは 胸を 焼き――

二女(ことば)

わたしヤ お前を 殺しもしたが――

一女(ことば)

わたしヤ お前に 殺されたるが――

樂座

忍ぶ 心は かはりやせぬ。

(この時、大砲一發。舞臺、眞暗に成る。)

第三 珊瑚樹下冥想の場

(舞臺、序の幕第二の體に返る、たゞ異なるは、三拾年來の古びかた、且、幕標を石に替へて、青き苔を生ぜしむ。珊瑚の實、全く熟して、黒きを特に目立つ程散らすべし。低き浪の音。)

玄道(夢より覺めしこなし)

ああ、うとくと して見たら、

二重 の 夢で あつた のか。

いま、退隱 の 祝會 を、

あつた通りに、ありありと

見た のは よいが、大切 の

海堡 技師

海堡が波に碎けたは、

どう思ふても、夢は夢――

また、うな原のみな底に、

ふたり出て来た若い子は、

まさしくお花 またお杉、

なかに立つたる修業僧、

それはわが身であつたわい。

思へば、古いことながら、

これまでに爲たわがわざに、

結びて、今の心にも

若き血しほの涌く爲めか。

(立ち上つて、なつかしげに海の方を望む。右作、登場。)

右作

旦那、もう、早や、お目覚めで――

立道

おおさ、うとくして見たら、

早やゆふぐれに成つたのか。

右作

左様ですかえ――けふは又

近頃はない御宴會。

立道

工事も全く出来上り、

こゝに役目も済んだもの。

わしも年ゆゑけふからは

いよいよ退隠するからと、

皆が招いて呉れた席、

これまであつた出来事が

胸に一杯浮び来て――

老いのなみだか――ほろほろと

海堡技師

すわつた膝をぬらしたが、
今、また、夢に、その席で
あつた通りをありありと
見たのはよいが、大切の
海堡が波に碎けたで、
わしは驚きうなされて
覚めかゝつたが、また、廣い
青うな原が見えて来て、
浪の靈寄るその底の
真中に見たは、若い時
死んで別れた花と杉、
ふたりが迷ふさまながら――
(大砲一發)
島より響く大砲の
音に目覺めた晝の夢。

右作、昔と今とでは、
田戸の沖べもかわつたな。
(また、すわる。)

右作

かわりましたぞ、島だとして、
かしこに見える猿島の
うへのみ照つた太陽も、
今は一あし、こあしと
よい踏み石が出来まして、
その日、その日の海づらを
暮れ行く道が安からう。
これと申すも、旦那さま、
二つには又おふたりの
死體がさせたお手からで――

立道

海堡技師

右作は わしの 上を
 よく 承知して 居る 筈だ。――
 わしが 秘密 を 知る ものは
 お前の 外に ない 如く、
 あの 海堡 の 底 までも
 國 の 秘密 を 知る わしは、
 昔なら、早や 事濟み の
 うち首 と ても ならう もの――
 參謀本部 の 持て爲し を、
 けふは、つくづく 感じたぞ。

右作

それも 旦那 の 熱心 に
 感服 して ヲ ムりましたよ。――
 お茶 でも 召した その上 で、
 わしは 御飯 の 支度 でも

致しましょうか。

玄道

さう 頼む。

右作(茶を出して来て)

それでは、旦那、今 暫く、
 いつも の 深い 御思案 に
 耽つて 居つて 下されい。

(右作、退場。玄道、また立ち上つて椽先きに出で、
 海づらを見渡して沈思。)

道(なかば朗吟の調にて)

駿河の御富士は、琵琶湖 を 抜けて、
 ひと夜 出でし と 昔し語り、
 かの 海堡 こそ、伊豆なる 山 を
 二つ 碎きて、生れにしか。
 三拾年來、毎日 行きて、

海堡 技師

育て上げたる いとし子らよ。

兄なる 一郎、中なる 二郎、

末は 三郎、その名 さへも

島 には 似つかぬ 愛情 籠めて、

暁の光 に ゑみを 増せば、

かたへに 浮べる この 猿島の

古き 繁りも あれよかしと、

あらたの 眞土 に 松杉 植えて、

なかに 紀念 の 珊瑚樹 の 實。

芽ばへ を 出だして、御空に 延びて、

早く、わが子ら、かしら 蔽ひ、

自然 の 御神 の しら露 吸ひて、

活ける 浪かぜ 凌ぎ立てよ。

まことの母 とも 云ふべきものよ、

一は よどめる 海の底 に、

また、その ひとつは この木の根もと、

共に 無言 の とはの 眠り。

ゆふぐれ 静かに 死の影 寄せて

われを 寂しく 包む 時ぞ、

落ち来る 木の實 も 靈ある 如く

家根 の 亜鉛 を たたく 音は、

ひびきも 紫 血しほ を 聴かせ、

黒み 行くべき たまを 招く。

ああ、わが 五體 の 消え去るのちは、

田戸 の 沖邊 よ、なれを 護り、

生れし 島根 の その數 三つに、

三つの 靈火 は 夜ごと 燃えん。

(珊瑚の實、家根と庭とに落つる。また、低き浪の音。)

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

春の歌

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

三三八

闇の盃盤

歌集二十五首

はしがき

この集に收めたるものは、明治三十八年六月出版のわが第三詩集、「悲戀悲歌」以後の作なり。この間にわが思想と情調とに變遷ありたれど、ここ更に之を區別せざりき。紙數の制限あるにより、こゝに收め得ざるも多くあれど、そは次集出版の節にゆづり、兎に角、長短六十篇之をわが第四詩集として公にすることなしぬ。

短曲 三十五篇

盃盤

春 曉

またも 思ひに なやむ 日こそ
 來ぬれ、板戸のひまを 漏れて。
 白む 臥所に 夢のかをり
 残る 暖み つつむ われや。
 寧ろ このまま 眠り入らば、

死をも 知らずに 世こそ 變はれ、
 覺むる 心は 苦をも 招き、
 苦をば いだきて 男泣きす。

人の 知らざる 憂ひ 多し、
 身をば 起さん 力 失せつ、
 白む 臥所に 夢のかをり、
 ゆらむ 節々 花を開く。

春の あしたの ねむりごち、
 いまだ 生れぬ 身にも あれや。

行く春

春の 行きにし 跡を 追ひて、

盃の 盃盤

われは 出で来ぬ 森の 樹かげ、
 朝日 寂しく 光 投げて、
 陰府よみに 結べる 夢の 世界。
 青葉 顛ひて 息を 凝らし、
 小徑こみちをのく 露は 繁し。
 あはれ、その露 色も 清ら、
 昨夜 まみえし 戀の まなこ。

ランプ 緑りの 部屋へやも 浮きて、
 中に 見え透く 罪の ふたり。
 それと 一人を いただき寄せば、
 影よ、まぼろし——胸に わが手。
 春ぞ 行きける、露ぞ 繁き、
 草葉くさば 踏みかね、われは 覚めぬ。

黄がねくちなは

月 は 更けたり、眠る 草を
 静しずに 縫ひ来て 光る 君よ、
 黄がねくちなは かげに ばかり
 音をは 曳きつつ 夢に 入りぬ。

床は ぬくめる 闇の 樂土、
 花は 頻しきりて、花は 降りて、
 痿えし わが身は 痿えし 腕に
 痿えし 長物 捲きて あるを——

せめて このまま 土に 籠り、
 土に 隠れて 行かば 如何に、

闇の 盃盤

斯る戀路の君とわれと。

君はくちなは——されどゆかし——
月と消え行く登る朝は、
人にかしづく人の妻よ。

黒き花

(妻を失へる老人に)

黒き流はみなぎりて、
黒き影をば浮べたり、
浮ぶ姿は見えねども、
まなこつぶればありありと——
ありし昔のおもひ出や、
うれひに映る愛の花。

若きかをりに返るほど、
深きに沈むその花や、
底なき淵の闇ぬけて、
隠れ行きしか、しほれしか。
残るひとりの胸は、ただ、
うつろとなりてみなぎりぬ——
黒きかをりの黒き影、
さらに黒きを増すばかり。

寧ろ夜なれや

『肉を洗へ』と曉の波の
遠き響を近く聽けば、
みどり淀みて解けし魂の
かをりゆかしくわれを打ちて、

闇の盃盤

眠り心の目こそ覺むれ、

九里の海岸 いまだ 狭霧

かすむ 中より、白き 七五三や――

これぞ、ねぢれも 荒く 延びて、

御靈『深み』の 秘義を 圍む。

斯くも 夜あけは つらき ものか、

われと 海とを 二つ 分けて、

われを 小さく 目覺めしむる。

寧ろ 夜なれや、とこしなへに

夢を われ等は 一に なさん。

闇を例へば

闇を例へば、海の主の

涌きて 夜ぞらの 星を 凌ぎ、

足は 大地の かけを 踏めど、

その手 二つは 空に 延びて、

來たる ものをば 待てる 如し。

さなり、わが世は 其の下に

咲きて にほへる 夢の 園生、

むしろ 覺めざれ、戀も 花も

とはの かをりに 笑みて あらん。

光 照りなば、花の露も

戀の 生命も しほれ行きて、

あはれ、短き 榮えを 見じや。

夜るぞ わが身を いだく とてか、

肉の まなこを 暗ましむる。

闇の闇

あまつ鏡の空を落ちて
 千々に碎けし 缺けら 一つ、
 われは ちいさく 闇に 照りて
 映す 御影を、神よ、知るや。
 北に 住ひて 磨く 星の
 凄き またよき、それに あらず、
 遠き 沖らの 磯に 燃えて
 罔象 かかぐる 火かも、あらず。
 いとも 寂たる 海の ほとり、
 われの 光は 鋒を 隠し、
 砂の 奥なる 熱を 追ひて、

過ぎし 百世の 跡を 戀ふる。
 生きて 死ぬる に 何の 恨み、
 『今』を 映せや 闇の闇に。

闇なる岡

目をば 閉ぢて 思へば
 あはれ、親し この闇。
 肉を さそふ 物みな
 こゝに 云はゞ 口腹、
 時雨 晴れし 青野を
 ぬめり 行きて、ああ、神、
 われに 残る たゞこれ
 遠く 響く 泡浪。

それか、あらず——聴えて
 胸に満つる 靈の香、
 天は深く薫りて、
 足場 高き この岡、
 光 若しも 涌き来て
 照らば、やがて 世の外。

君は暗きを

君は 暗き を おそれ給ひ、
 世なる 光 に 出づと すれど、
 おもへ、手に 手を こゝに 飾る
 戀の 花束、糸は 切れて、
 乾れし 地のへに しほむ 時ぞ。

君が 御口 を 漏るゝ 笑みの
 日中 咲きなば、やがて 移る
 弱きをみな の 末も 見えて、
 をとこ心 は 鐵と 冷えん——
 闇は 晝より、肉は 靈に、
 勝る 秘密の なからましや。
 とはも 斯くこそ——愛しき 君よ、
 それと かをりを 探り寄りて、
 今を 燃え立つ 熱と 熱と。

浪の戯れ

濱は 拾里の 床を 延べて、
 こよひ 迎ふる 容も なきや。

波元白浪 横に 長く、

銀の 細聲 消えて 起り、

瑠璃 と 散りばふ 海の子等 は

おめず、臆せず、むつれ遊ぶ。

すくと 高まる うねの 上に

純金を 刻める 裸形をのこ、

さつと 落ち来る おもに 浮きて

玉を 磨ける 亂髪をとめ、

ほくそ笑みつゝ 見えて 消えぬ。

こゝろ 寂しき われも、今は、

海の 御魂に 透きて 立つや、

またも かれ等は 出でて おぢす。

冷たき砂

ゆふべ 冷たき 砂に 坐わり、

天を 仰げば、いまだ 星の

ゑめる 姿は 一も 見えず、

青き色 のみ 上に 下に

なやむ わが身をつゝむ 世界。

昔し 失せにし人の 戀の

恨み、歎き か、海の響、

胸の 奥にも 絶えず 繼ぎて、

廣き 濱邊ぞ 身をば 責むる。――

われは 十年 罪を 悔いて、

こゝに 初めて 君に 詫ぶる。

骨は 穂すとも、心のみは、
君よ、眞一度 陰府を出でて、
清きほらみ われに 示せ。

よみ返り

夢のまくらに闇を纏く
波よ、亡者のよみ返りか。
神は地塊の軸に觸れて、
陰府の柱は根よりゆるぎ、
底つ石棺蓋は開きて、
而も歡喜の叫びばかり――
黒きころもに靈を包み、
今か、光明仰ぎのぼる。

あはれ、そのかけ聲と共に
天の御中に進み行くや、
遠きわらひの續くひまに、
またも眞近き鯨波ぞ起る。
肉の小部屋に籠り聽けば、
魂は幾萬海を振ふ。

御靈うぶや

うごめくはこれ何者ぞ、
牢獄に等しき闇を――
ひとつかまとまなこ据うれば、
その數は増して行くなり、
まとへるぞみな墨ごろも――

黒法師——無爲の行列。

暗きより暗きに入りて、
かへり見る光だになし。

わが靈のなやむ産屋か。

相向ふかゞみの法師、

相映り、幾多生まるゝ

代のかげの並ぶその脊よ。

その脊をばいくつ越ゆとも、

この無言、つひに死ぞなき。

過ぐるぬくみ

君はわが手をい避け給ふ、

まこと戀にはありやえらび。

こ世のすがたを受くる先し、
知るや、眞やみぞ世界なりき。

魂は——ころを狭く限る

室のなければ——觸るゝところ、

そこに乃ちものをいだき、

過ぐるぬくみをたどり合ひぬ。

その子、その子はやゝに分れ、

かゝる光のもとに來たり、

木とも、獸とも、身とも見えて、

かほは互ひに知らぬばかり。

君も、さあれば、かたち攀ちて、
もとのぬくみを共に得ばや。

二の無言

ああ、君、まなこの光を去れよ、
きらめく世界は死のおもてのみ、
相見しおもひ出かたちを焼けば、
飛びかふ言葉の羽をさへ借らじ。
魂もて相戀ふ——これ、二の無言——
おもへば、眞やみの定めをあゆむ。

まことの戀——ああ、いましとわれと
異なる耳あり——その足音を
攻め入る魔としも互ひに聴くか。
こゝろのおそれは肉をも振り、
暗きを直ちに手と手をひとつ。

ああ、君、刹那ぞ、この刹那ぞや。
無言に住する常世の蜜は
斯くこそ過ぐなれ、ふたりの胸を。

黒き素船

黒き素船を透かし見れば、
砂にしやがめる影とまがひ、
沖の小島の薄き見れば、
人の思ひに沈むけはひ、
空に住へる月を仰ぎ、
寐びしわが身の魂と見たり。
われはそのまままなこ閉ぢて、
消ゆる世界を今ぞいだく。

浮けよ、沈めよ、千々のなやみ、
 千々の 悲み、身をば 乗せて。
 苦なるいのち は――繁き矢 なり――
 積みて 重なる 夢の 小船。
 さして 行くへ を こゝに 問はじ、
 この夜、この時 われは 活きん。

渦巻く心

闇の鳥に 聲も あらば、
 暗き 地獄の 窓を 開けん、
 斯くも 思ひに 沈む 『今』を
 われに 奪はん ものは ありや。
 鐵の うるしに 固く 閉ぢて、

神の 嘉せし 光さへも、
 見よや、こゝには 影も なくて、
 靈ぞ エーテル かをり 高き。

胸のうちこそ 元の 世界、
 日をも 星をも 生まば 生まん、
 燃えて うづ巻く 心ありて、
 物を 形取る ひどき 包む。
 燃えよ、わが靈、戀の 如く、
 われを 焼きても われは あるを。

地なる響

暗き 濱邊を たどり來たり、
 水際 真近く 砂を 握る。

握る 眞砂まごこ の もろき うちに、
闇の力は その尾 振ひ、
手をば つたひて 胸に 響く。

君よ、御空みそら の 星 を 説きて、
地なる ひびきを 忘る勿れ、
遠き 深みの 浪 は 寄せて、
幾重 打ちては 疊かさねむ 砂 ぞ。
たとへ もろくぞ 碎け去りて、
手 には 残れる 形 なくも、
永劫とこの 憂ひ を 布くは 如何に。

暗き 濱邊 に 砂 を 握り、
君に 云ふべき事 ぞ 多き。

千とせの重み

ああ、この 楠の木、眞直ぐに 延びて、
天あまをば 覗きし その罪 ゆゑか、
斯くまで 曲りて、斯くまで くづれ——
病者の さま なり——肌への 苔も
苦悶くもんの 血あせに にじみて 朽ちぬ。
野望やぼうに 生ひ立つ、その 活いく幹の
飽くまで もたげし かしらは 折れて、
千とせの 重み や いち時に 受けし。

劫果きやくくわの 破壊——こは、わが世の 苦をば
却つて 全く ぬぐはん ものぞ——
かれ、こを 拒みて 身づから 忍び、

(サタン か) 死力の 限りを 盡し、
なほ且 はびこる ふと枝を われは
仰ぎて、新たなの 力を 得たり。

あけぼの

いとねむげの 浪は 先づ 覺めて、
陸と 海と ともに 分れ初め、
海と 空と 沖べに 連る、
遠く 近く 浮ぶ 帆かけ船、
眞帆を 揚げて さ走る 進みの
いとゆるやか、夜こそ あけ離れ、
海の つばめ——こは 朝の使——
軽く 飛びて、世の目 覺め果てぬ。

砂山なる 砂を 萌え出で、
露を 帯べる 小草 薄みどり、
深み淵の色に 照り添ひて、
わが心の、これや、苦なき時。
亡びんにも 亡ぶ影 見えず、
活くるに また 活くる 悩み なし。

ゆふぐれ

人げも なき 濱の ゆふ暮は
死かげの 谷、陰府に 似たる かな。
雲は 幾重、横に また 縦に、
王閻摩羅、瓊茅の 頻投げ、
青き空に そりたる 細太刀、
脊なる 山は 低く 棚引きて

寂びし靈の逃げ去るを圍み、
目をあぐればこれ淀める淵。

飛び行くにも光の羽根なく、
傳ひ行くにつながる島なし、
風は静か浪の穂を揺りて、
わが生命の末を示すのみ。
今か此世はたとへ消ゆるとも、
この寂びこそ活くる道あらめ。

落日

むかし御神の命を受けて
此世を領せし、あまつ彦の
その如くや、御座は落ちて、

光まばゆき黄金ぶすま、
雲は静かに淨を圍み、
残る衆生ののぞみ吸ひて、
銀の鏡の音もなくに、
あはれ、世の日は舞ひて沈む。

斯くも赫耀淨に入る日、
放つその矢の一つだにも
焦れ渡らん影は失せて、
有るは親しき闇の深み、
暗き中より浪を聴けば、
純の黄金の榮えぞはゆき。

樂の音

高きより落つる樂のね、
 君や搖るむらさきの幕――
 ねぢれ立つ段階きざはしのもと、
 われはたゞちいさき虫か。
 戀のみにこゝろ引かれて、
 ゴス式の窓も小暗せくらく、
 色がらす赤また青に、
 わが胸はうたれてなやむ。
 そのなやむちさき胸こそ、
 今にして、嚴たる御堂みだう――
 『ハレルヤ』の聲に、わが戀ふ
 御すがたよ、神と浮べど、
 かの御手にきらめく指輪、
 持ちぬしは既にありけり。

凝りし涙

海のおもてを渡り來たる、
 白き男波の音を愛あしき。
 われに乙女おとめの腕もあらば、
 堅く擁かかきて、共に共に
 消えて千尋を忍ぶべきを。
 われは磯邊にうづくまりて、
 北を受けたる岩に似たり。
 右も左も此世このよの風の
 吹くがまにまに心荒れて、
 憂うれきが上にも憂うれきを重ね、
 凝りし涙ぞ斯くけ高き。

あはれ、男浪よ、われは男おとこ
なれを友としこゝに立てば、
すさぶ胸にも愛は涌き來。

胸のしぶき

君きみと暗きにつれ立ち行かば、
なほもこの手を避け給はんや—
神の光は御冬みふゆの濱か、
われらふたりを砂上に竦すくめ、
黒く並べる寒影法師さむかげほし。

たゞにその影隔つる晝は、
戀を呪ひの悪魔の巢なり、

われは、君なる羽がひのもとに、
寧ろ御靈みたまのぬくみを得ばや。
君は、然れども、定めありと、
おぞや、御ごろ太陽に憚りて、
岩に繁吹ける波にも似たり。

夜のひどきに沸き立つ潮ぞ、
胸のしぶきは火焰ほのほと燃ゆる。

光のゆふだち

ああ、初島はつしま、南向ける島、
今かその目覺めたるありさま、
黒き潮にかしらをもたげて、
低き身にも罪をや拂へる。

いまだ 戸さす 灰魚濃雲は

既に 高き 日かげ を 見せねど、
雲間 よりぞ 降り来る 金じき、
時に あらず 光 の ゆふだち。

此世は 寒き 御冬の よそほひ、

波の穂 をも 雪か と まがへど、

ああ、初島、南 向ける 鳥、

かゝる あした 覺むる子 さち あれー

射照り そぐ 朝日 の 雨あし、

これや 聖き 救ひ の かんむり。

追憶

むかし 別れし 君 の 影は

若き光 を 髪 に 湛へ、

市の 真中に わを 呼びて、

『來たれ、いまし を 母と 共に

尋ね わびぬ』と、熱き 涙。

われに 冷えたる 胸は 踊り、

もとの 情け の 火こそ 燃ゆれ。

引くが まにまに 追ひて 行けば、

古き 冠木の 門は あらず、

家に 坐われば、知らぬ 床に

知らぬ いろ香 の 花を 活けて、

母も その娘も すがた 消えぬ。

あはれ、夢なりー古き 愛よ、

十とせ その身を 今は 如何に。

永劫の力

あはれ、御空^{みそら}の 一つ星、
 戀しの 君は いづこ ぞや。
 共に 波元^{なもと}に 手を取りて、
 なれに 誓ひし 楽しみも、
 今は 覺めたる 夢うつつ。
 その 初戀^{はつこい}の おもひ出は、
 タベの 波とも 共になれに
 響きて のぼれども、
 胸に 答への なければか、
 われは あまたの 愛乙女^{えをとら}に、
 または 稀なる 人妻に、

おもひを 寄せて なやむ身ぞ。

戀には 二つ あるべしや、
 なやむは 永劫^{とこは}の ちからなり。

のろひ

闇に 手あり、幾多の
 生をもとめ、偶々^{たまたま}
 君が 胸に やどりぬ、
 無爲^{むゐ}に 飽ける その魂^{たま}。

狭き 獄舎^{いどや}に ありて、
 斯くや もがく その身を、
 『世にも をどり 出でなば、

闇の 盃盤

さらに 延さん いのち緒。』

されど、來なば、光に

ころろ 先づは 縮まん、

斯くて、かしら もたげて、

明き 御空 のろはん。

呪ひにこそ、あこがれ、

闇の ちから 活くなれ。

のろひの岩

北に 黒雲 涌きて 出でば、

海の あらしと 漁夫 は 免る、

君を 見初めて こゝに 三とせ、

戀のうれひは 廣き胸の
浪を 無言に 荒れて 渡る

斯くて 死ぬべき 身にし あらば、

むしろ この世の 苦をも 焼きて、

残る思は 沖のおもに

一つ小高く 深み 抜けて、

青き 寂しみ 君を 招ぎ、

君を 呪ひて 岩と 爲さん。

されど、人妻、近く 見ては、

三とせ 言葉を 知らぬ 風に

われは 吹かれて、深く 活きん。

二つ花藻

君とふたりし、濱のゆふべ、
 波に巻かれて海に入りぬ、
 そこも波あり、濱もありて、
 靡く磯風——戀のいぶき——
 かしら渡りつ、袖を拂ひ、
 深く染み入る靈のかをり。
 青き光に青きながめ、
 われら藻のごと石に立ちて、
 二つ並べる影は無言——
 近く神秘の岸は開かけ、
 さらにか青き岸を迎ふ。
 君とわれとは永劫に斯くや、
 即かず離れぬ 二つ花藻、

つねに沈思の底に醒むる。

沖のテナス

夕べ繪ぎぬに藍を溶きて、
 遠く延べたる海の真中、
 天に小高くかしら上げて、
 ひとり暮れ行く烏帽子岩よ。
 白き泡浪裾をめぐり、
 音もゆるがぬしどま住ひ。

なれを遙かに一つ星の
 青 またたき、それも落ちず、
 草のつゆなく、花の香なく、
 寂し心の——これや、いのち。

夢は 深み の 底に 入りて、
育て來たらん 玉は 何ぞ。

沖 の テチス は 月を 孕み、
深き 眞やみに 沈み行くよ。

石をいだいて

石を いだいて、われは 眠る。
夢に 遠波 遠く 寄せて、
白き 眞砂 の うへを 洗ひ、
青き 草葉 の 道を 濡らし、
高き 深山 の 裾に 入みて、
木々 の 樹すゑは 朱に 染まり、
谷と 谷と の もだし合ひて、

深き 秘密 は かけを 照らす。

それよ、しぐれの 過ぎし 跡ぞ、
冷えて 覺めたる 旅の ひと夜。
あさ日 寂び照る 石の うへに
落つる なみだも 血しほ 爲して、
秋は 身を 切る 亂れ焼き刃、
盡きぬ いのちを 痛ましむる。

細き水の緒

曾て、君、あたゝか なりし
おもかけよ、秋野の すゑか。
萩は 散り、すゝきは 立ちて、
悲しみの 風ぞ 西北、

一もとの樹よりそよぎて、
その蔭のうら寂ぶ野路、
枝を分け、枯れ葉踏み行き、
われは今胸の思ひ出。

野は盡きておもひは盡きず、
戀はまた速き流れか。
近ひよく琴のね止みて、
白絹のほそき水の緒——
石のへに見る夢のこと、
わが秋は暮れて行くなり。

眞白男浪

(寒き濱邊に立ちて米野口君の南遊を思ふ)

友よ、旅路は椰子の樹かげ、
暑き葉ぶきのむろを出で、
幾代寂びれし一つ島の
磯にしば打つ眞白男浪——
君や、身づから詩とぞ碎け、
こなた小寒の濱に通ふ。

遠く南の風はぬるみ、
あはれ、島かげいとも無言、
夢のまなこを過ぐる如く、
うすら緑のすそを引きて。
君がころろは胸に響く。

これぞまぼろし、うつゝながら、
友よ、互ひの聲を離れ、

しばし 自然の 寂びに 飽かん。

月と猫 外貳拾篇

月と猫

椽の 樹の間を 漏る月の
影は、ふるひて、座に 落ちぬ。

誰が ちみまけし 魂の
かた碎け ぞと、そも 小猫――

白き 小猫は 走り来て、
ただ つくねんと 見守りぬ。

泡と つぶ立ち、玉と 散り、

散りては つどふ その碎け。

白き 小猫 は さればみて、

つかむと すれば 手を 照りぬ。

月と猫 とは、その夜 より、
わが座 を 和す 靈 なりき。

わがゆらぎ

暗き日 と 明き夜 は、今、
きぬごろも 受けつぐ けはひ

一日 の 物もひづかれ、
さし引き は 空しき 袖か。

堀端 の 枯葉やなぎ の

ちからなく さやぐ ゆふぐれ。

その さやぎ 胸に 渡りて、
わが心 いづれの 影ぞ。

水ぞら を さへぎる 枝か、
水の面 に 黒める 幹か。

暗き日 と 明き夜 は、今、
目まどひ や 胸の くるめき。

たそがれ は 迫り來りて、
われ のみ の ゆらぎ ぞ 残る。

喘息

苦しき まゝに

ふと わが目を さます—

小ぐらき 寐間の

小ランプ くるめきて、

その いきさしも

今はた 迫り來つ

たゞ じりくくと

あぶらを 煮る息は、

油煙に むせび、

燃えさす その光。

くらむと 見れば、

一咳 胸を 突き。

喉もと までも

いのち は こみ上り、

血は くつ返る

刹那 ぞ なつかしき—

わが世 は さめて、

わが世 を いだく時。

闇の盃盤

夢は 失せにし 玉の 如く、

覺めて 攔むと すれど、あはれ。

艶も 光も 跡を 絶ちて、

闇の 盃盤

闇にのべたる片手ばかり。

ゆるむ節々ちから添はず、
戀ものぞみもなかばうつゝ。

まなこ開らけば、暗きかもろ、
あやしまぼろしこれをめぐる。

鬼よ、羅刹よ、夜叉の首よ、
われを夜伽の靈の影か。

死はもわが身を獄につなぎ、
肉は魂とも燃えてのぼる。

見えぬ火の中、水の中の

畏怖と威嚇は迫り來れど、

酒のかをりに泡のいのち、
甘き歡樂ねむり誘ふ。

闇の盃盤闇を盛りて、
われは底なき闇に沈む。

かくて夢より夢を浮び、
とこしなへにも生に酔はん。

朝

おもひ惱みの夜を過ぎて、
呼ぶ聲ありとまよひ出つ。

闇の盃盤

(かしらに 細月の

たゞ 消え残る 雲の影。)

われ や 空なる あこがれの
もぬけの 門を 見張り人。

(ゆん手の 御寺より、

うち出す 鐘も 夢の 聲。)

胸の 透垣 透 通り、

見ゆる は 君の すがたのみ。

(濱邊の 路草に

いとたゆげなる 露の 目見。)

われは 疲れぬ けふも、亦、
容しき戀を いだきつゝ。

(踏み行く 海路より、

日ぞ きらゝかに 登りける。)

重き この身 を、君 ならで、

やすむる 御手の あるべしや。

(ああ、また、松原に

わが世を 歎く 朝は 来ぬ。)

葉巻のくゆり香

ひそかに が

つけたる 巻煙草、

葉巻の くゆり

この身 に 染めて より、

かさねて 飽かぬ

闇の 盃 壺

出會ひの苦しさを。

よそ目を避けて

會ふ度毎に、君、

熱る、胸の

ほむらを訴ふとも、

別れし跡よ、

思へば、人の妻。

獨りしあれば、

いよいよなつかしや、

ふゆらす煙の

中より見え來なる――

くちびる燃えて

ひとみを凝らす人。

眉間の色香

拂へど、妄執か――

知力を巻きて

覺むれば、且、凍り、

紅蓮の熱は

身を焼く阿鼻地獄。

罪呼ぶ聲は

底より響くとも、

はだへは裂けて、

血しほぞ踊るわれ、

君もて遊ぶ、

君、われもて遊ぶ。

五ひのいのち

今更ら惜まれて、

苦しむひまを

楽しき夢の世ぞ。

戀こそ籠れ

葉巻のくゆり香や。

醉中吟

四鼻半、酒の香こもり、

蠟燭の光は暗く

またよきて、ねむりを誘ふ。

黒檀の艶—南國を

忍ばすか—潤み帯ぶるは、

三の絲切れし細棒。

それを執らん力も添はず、

歌ひ女は柱に倚りて、

酔中の淨にや入れる。

いそがしくめぐる眸も、

今はただ伏し目に隠れ、

さながらや安坐の佛。

手向けたる金ぶち猪口の

底にして、照らす名文字ぞ

酌ぎ足せし酒にゆらげる。

奇しきは猪口か、その名か。

黄がねなす あまき しづくを
飲みほせば、花 降り來たる。

降る花 は 白き 曼陀羅華—
その毒に 染みて や、わが目
くれなる の 燃ゆる 色 あり。

その色 の 消え去る 闇に、
芥子粒 の 圓き たましひ
あつまりて、巨靈と 見えき。

その跡 に つづくは 黒き
ころも敷—これ、『悲み』ぞ—
手を 垂れて、よよと 泣き行く。

暗やみ ぞ—また、その跡を
音も なく 追ひ來る 菩薩、

『ほゝゑみ』の 蓮華に 乘れり。

『これなり』と、われは 叫びて、
高飛ぶ や 餓えたる 鷺鳥。

『救へよ』と、身もて すがりぬ。

『君も亦 酔へり』と、答詞—
ながむれば、かをり ゆかしき
歌ひ女の 膝に ありけり。

棲る君

棲とる君の

闇の盃盤

足音は、深山邊の

奥なる杉の

林に闇を俯せ、

黒がねとさす

めぐりを脊屈みて、

落ち葉の上を

抜き差す狼の――

それ、かも、暗き

高樹の樹すゑより、

したより落つる

夜つゆもをのゝきて――

たゞさへ、かゝる

折には、身に入むを――

と絶えて、跡の――

ときめく胸の寂び。

棲とる君の

しのびは、墨染めの

死とこそ響け、

されども、しめやぎて――

まさ夢くるゝ

軋れば、酔ひごゝち。

手に手に、森の

香をこそ さぐり寄れ。

二

棲とる君の

別れは、燭臺の

火は燃え行きて、

闇の盃盤

流るゝ蜜蠟の

名残は凍り、

そのかみ、水盤に

油の玉の

水漬きをおもひ出の――

それかも、胸の

秘密をあばかれて

かばひも得せず、

こゝろは引かれつゝ、

再び會はん

たよりの無きが如、

わが身は全く

冷えたるうるし闇。

棲とる君の

足音は野狐の

逃ぐると聴ゆ、

されども、慕はしく――

おもひのくるゝ

閉づれば、きぬぎぬの

痛まし。ふたり、

世をこそ隔つらめ。

女露男露

ゆふ立ち晴れし

御空のおもてをば、

青みは重く

電線にたるみあり。

闇の盃盤

その線すぢづたひ

走わるは露 ひとつ、

『真中まなかにとまり、

孕みの機を待たん。』

ちいさき胸の

きらめき 散らぬ間を、

『やよ、待て、しばし』

と、露の また一つ、

『一なる女魂めたま、

なが身の秘ひめ力ちから

許せよ、共に

短きながめぞや。』――

『二の魂たま、わが脊せ、

君、若しそを知らば、

われらの望み

今こそ満ち足らめ。』

渠等 は、斯くて、

ひとつに 煌めきぬ、

落ちしは 二つ、

消え行く 元の露。

闇中悲歌

ああ、闇の矢よ、

うつろの胸を射て、

その數 あまた、

拔ひきさす 餘地よちもなし。

われ、針ねすみ、

闇の 盃盤

針 みな 逆生えて、

まるべば 深

痛手の 疼くのみ。

樂しき 小夢

その影 晝の間の

光と 消えて、

ころは うるし室。

戸させる 窓の

しめりは 黒くして、

暗きに 乾く

御靈の 見ゆべしや。

苦しき 肉の

癢ひ目を しばりづる

涙や、實にも、

やみ夜の 闇映す。

神らは 亡び、

望みも 失せし世ぞ、

おのれを 追ひて

生き死ぬ 物の 呼吸――

はじめの 呼びに

潜める 獣 動き、

次ぎなる 吸きに

むくろは 開けつゝ。

ああ、この闇に

醒めたる われは あり、

刹那に つよく

死の苦をこそ 思へ。

隣りの水車

かたこと 音絶えず、
わが胸 深く
悲痛 を 刻む なり。

にほひ杉

大谷川 行く水 早く
さそふとも、御空に 高ら、
いや増しに さかゆる 杉よ。
數百年、數百の 幹は
御山邊の 坂と もろとも
延び立ちて、御やしる 深し。

奇し御魂、神秘の 闇を

高ら枝の しげみ 蔽ひて、
鼻さきを のぼる いし段。

つち 近く 人は 這ひつゝ、
いつまでか 暗き さまよひ——
而も なほ あゆむと 見るや。

思へ、この 木々の 親さへ
印度には すでた 倒れて、
その影を 奈落より 引く。

わが足の 音とも 見えず、
こつこつと 物かの けはひ——

たゝずむ は 『をのゝき』 なりき。

時 こそは 如法闇黒、

樹の間 より 漏り來る 星の
光 とも にほふ は 何ぞ。

今や、われ、犬なる人 か。

おぞけ立ち、夜つゆ を 浴びて、
暖國だんこく の きざし に 酔ひぬ。

男浪の小利那

物おもふ

まなこ に 開らけつ、

寄せ來たる

男浪の小利那

遠つ海とつみ の

奥なる ひゞきを
揚ぐる かや、

寂しき 目の前。

いと白き

うねり は—力ぞ—

靑あおよどむ

そら をも 乗せたり。

七重 八重

その道 折れ來て、

おほ地 の

闇の盃盤

御胸を打つなり。

その音は

虚空をめぐりて、

わが身はも

立てるは釣り殿。

この地球

つちより亡ばど、

なれ、海に

増すらん秘密ぞ。

わが戀を、

はた、わが望みを

はぐまん

沖べのふる郷。

いにしへの

テチスが住ひも、

實に今は

ひそみて、わが胸。

吹き渡たる

大氣にめぐりて、

真空を

いだけるこの生。

湧き返る

いのちを迎へて、

今こゝに

開の盃盤

御靈みたまに向へば、

物思ふ

まなこに開らけつ、

寄せ來たる

男浪おとなみの小刹那こせつな

紅の星

闇を落ち來る紅にじの星よ、

根なく榮はえなく、光あらず。

枯れてしほみし世々の地塊ちぐわい、

繁くつゞきて目をば横よぎる。

あはれ、その道風を起し、

音は遠きを引いて叫ぶ。

畏怖おそと威嚇いは渦うずと残り、

覺めしわが魂たま夢とめぐる。

われは生々、ここに振ひ、

星の行くゑに耳を開らく。

夢はめぐりて

夢はめぐりて花と咲きぬ、

川のつゞみの目めさましさよ。

曉あけの夜羽根よばねは水に流れ、

闇の盃盤

残る かすみ は 枝 に ゆらく。

示めせ 姿 を、風の鳥 よ、

ゆふべ 見えし は 尾羽 の 破ぶれ。

われは そのごと 常に 破れて、

かをる 光 の 裾 に 迷ふ。

あはれ、この花 ねむる ままに、

春 と 散らばや 戀 も、魂 も。

のろひ

君 より 得てし

愛の根 ありとせば、

わが世 は 直ぐに

のびけん くるま菊。

君 ある 方を

日なた と 向き直り、

黄がね の 花は

おほ輪 に 咲きけんを。

しのびの魔 ゆゑ

根 さへも 抜き取られ、

つめたき 闇は

わが世 を 飢やす のみ。

なさけ の かたわ、

かたち を かけ消しぬ——

氷ひと冷ひえて、

のろひは君まとふ。

今人妻の

苦しみうべなれど、

そは見殺みころさん――

わが身の苦くを知れや。

日比谷公園

あはれはあれど、

そとだに近ちかよれず、

年増としまの威嚴

噴水ふんすいあとに消きゆ。

響ひびくはかなた

管樂くわんがくオペラの曲、

いとしめやぎて

市中いちぢうを雨あめに呼よぶ。

松本樓まつもとろうに

あつ物あつものすする客きやく

顔かほ赤あかくして、

秋雨あきさめ醉よめひを帯おぶ。

日比谷ひびやの秋あきの

香かにこそしのばるれ、

かのまよはしの

ゑまひのおもかけや。

胸にし 秘めて、

公園も あゆまるる。

見え来ば 君を、

されども、唾に 吐かん。

病室

あざけりの

悪魔あり、

かしら を 蹴つ と 目は さめぬ。

闇夜 なり、

狭き室、

枕に かよふ 息ばかり。

寝がへれば、

いち道の

光 まばゆく 輝きぬ。

その かげに、

わが戀の

姿も ちらと 浮びける。

束の間ぞ、

ただ しばし、

思ひ出 こそは 親しけれ。

身は やがて

朽ち行かん、

ただ 惜まるる 息の色。

紫に

朱を 點じ、

そはも 沃度みちどの にほひ なる。

枯れ葉

枯れ葉 にも 魂たまは ありける、
静かなる 空 を 花蝶はなて。

とりどりに 舞ひつ、纏ひつ、

音を しのお 別れの 歎き。

高幹たかみきの 枝に さかりて、

沈み行く 二の世によや いづこ。

ひとつ枝えに またと 見まじを、
親しみ は 苦の 穂ほすゑ のみ。

中禪寺にて

黒く よどめる 水のおも、
油を 延べし 海の 如ごと。

ひたり、ひたりと 船ふねに なづむ、
音さへ おもき わが こゝろ。

遠く 君より 離れ 来て、
暮れ行く けふの 寂さびしさよ。

舟の行くゑに引かれては、
わが身も消えて入るおもひ。

この無言

ああ、もみぢ葉は、死の川の
黒きに染みて、沈みけり。

その黒染めの深淵を
くゞり行きけん、眞すがたよ。

世の秋風は寒くして、
手には残れるこの無言。

孤寂

(夫人を失へる人に代りて)

庭の青葉の静かげに
呼ぶありと立ち出でぬ。

呼ぶ聲 見えず、この孤寂、
わがまぼろしは破れつゝ。

陰府まで暗く透き通る、
その思ひ出の心ながれ。

去りにし花の小姿を
それぞと抱くよしもなし。

海音獨白 外五篇

海音獨白

一

父には捨てられ 母には別れ、
 物乞ふ袋と共に まろび、
 或村はづれの山根に、ひとり
 甘乳の流れを呼べど 出でず、
 稚きころは 七島 八島、
 伊豆吹くいなさの風を痛み、
 どよめる海邊の小浪につれて、
 消え行く身なりき—今は昔。

二

べに貝、小砂のしめれる道を、
 かもめの足跡かろく踏みて、
 たまたま過ぎ行く 托鉢和尚、
 我怨とおのれは空し 眞袖、
 無垢衣のひらめく 両手を延べて、
 拾ひし 珍貝紅に あらず、
 つじれに まつはれ その世を 叫ぶ、
 ああ わが身なりき—それも 知らず。

三

伊東の山腹、さくらの御寺、
 松月院主のめぐみ ゆたか—
 三界衆苦を教へにのみぞ、
 闇の盃盤

その實 嘗めしは海のながめ。
 相模の灘 さへ平らに霞み——
 白帆しろほの 孕みし兒 かも——われは
 あさゆふ 讀經どきやうの つとめを 盡し、
 楽しく わが師に つかへたりき。

四

夜ごとに 持ち出す 妙法華經めうほふけきやう、
 柔和の 御言葉 序品じよほん 講ず。
 われ、その 御聲に 有結うけつを 拂ひ、
 諸漏しよろうなき 阿羅漢あらかん、時に 現す。
 沈思の 彼岸に 至れる 魂は、
 されども、斯くてぞ つどかさりき、
 或時、あはれや、悪夢の 如く
 わが身の 昔を 知れば、無恃古むじこ。

五

忽ち、胸にも おほ浪 立ちて——
 わが身は わが師の 賜たまびし 名なり——
 海音、どよみて 狂ふは 血しほ、
 ひそかに 念じて これを 喝かせど、
 たとへば 佛ぶつあり、迷へる 衆生。
 そこばく 百千 浮ぶ 如く、
 悲痛の 數々 俄かに 湧きて、
 わが 寂しみこそ 深く 覺むれ。

六

今年、殊なる 彌生やよひを 迎へ、
 わが師の 親しみ さらに 増しぬ、
 父とも 思へば、失せにし 母の

遠きに住して われを呼ぶか。
あさ 起き出づるや、御墓に詣で、
はじめて 名乗るも なみだばかり—
時しも、かたへに 櫻の一枝、
わが名を語りて ゑめる女あり。

七

渠、その初子を土中に香まれ、
苦愛の絹糸に引かれ 來たる。
朝なり—あらたの光も 添ひて、
御手なる花には露を帯びぬ。
その優言葉に 久遠の慈母も
斯くやと、わが脈天鼓の如く
おのづと 打ちては、ぬくもる はだへ、
血しほは いつしか 逆にのぼる。

八

世尊の方便、薬も美味も、
この毒を受けては ちから 具せず、
戀慕は 乃ち 渴仰なれど、
かの女は 人妻、われは 孤露ぞ。
日々、障子のかけより 見れば、
夢路に 咲き行く 普賢菩薩—
ああ、その 評散る 薄くれなゐの
一瓣を なりとも 門に 追はん。

九

仁王の力味も、無形の魔鬼を
防ぐに 由なき 春の 精舎、
戀ゆるならば ぞ、わが 撞く鐘の
闇の 盃盤

ひびきは笑ひて照らす境。

聳ゆる御寺の柱に寄りて、

如来の香爐のくゆり聴けば、

おごそかなるかな、わが師のおもて—

聖なる寂しみ熱く涌きつ。

十

暗きに燃ゆるはうつゝか夢か、

まなこを閉ぢても開らく堂宇、

左右の柱は照り輝きて、

その火は巨龍の欄間つたひ、

ほのほの舌もて讀經のつくゑ

焼くよと見る間や、聲を擧げず、

戀しのすがたは眉間に現じ、

御經をさへげてわれを招く。

ダナエー獨白

(シモニデイスの作なる輓歌断篇の面影を偲びて、新たに作れる。)

父に追はれて、ダナエーが

その隠し兒と波のうへ。

あまつゼウスを箱ぶねに

あこがれ渡るこの戀や。

乾ける土を盛りたる身、

沸き立つ潮にひたりなば、

解けて碎けて、おのづから

抱き兒の寝がほ見えまじを—

闇とあらしの迫り来て、
安きは所天のかたみのみ。

あはれ、不安とかなしみの
火もてほてれるわが目には、

海のちからの高どよみ、
遠く燃ゆるを見しころ—

ああ、神ゼウス身に觸れて、
もろきいのちは見えそめぬ。

もろきいのちの見えそめて、
朽ちぬ榮えぞうらみなる。

ああ、燦爛や天の座は
高きどよみに乗り來たる。

この兒を受けて、おほ御つま、
御座のほとりにそだてしめ、

なが常聖の血すぢをば
アハヤの勇者たらしめよ。

朽つる宿世の身なれども、
こゝにせめてのぞみあり。

聖き榮えの照らす間ぞ。
このまぼろしの見ゆる間ぞ。

まことの闇よ、いざ、さらば、
その手を延して來れかし。

うらみと歎き、死とつちを

このはこ船にくつ返し、

深きひびきを つたひ來る、

熱にぞわれは 燃え あがり――

ほのほと成りて、まのあたり、

戀しの神にしたがはん。

死 獸

御星の定めよ、か深き森の

樹の間を漏りては、ああ、その死毒、
聲なき雨とや射そよぐ 征矢の
一つに當りて 手負ひし 雄猪。

ひそめる 生の火 忽ち 燃えて、

まろぶ は 奇し魂――怒りの 火焰。

あらゆる力を まなこに 籠めて、

眞やみの 小洞を 逸りてや 出でし。

あま聳り 立ちけん 火ばしら、根より

折れたる いきほひ、いち時は 眞晝、

風 切る 響きを 暗きに 引きて、

ま直ぐに 驅け來つ 開けし 枯野。

草木の 觸るゝを 熱れに 焼きて、

はてなき 大地を たゞ 馳せめぐり、
御空に 輝く その 星々の、
かしらに 迫らるる 苦をこそ 堪ゆれ。

おのれと おのれの 苦悶を 握り、
獵師を 離れて 叫びは 悲し。
いのちの 驅り輪 次第に 狭く、
その身を かこひて つひに や 逝ける。

ゆふべの 戦ひ 破れし 武者の
あしたや、死の床 しら露 しとど。
牙齒 持つ むくろの 毛も 逆立ちて、
見よ その 威嚇は 小夢と 冷えぬ。

人肉狂賣

『肉を買へや、赤き肉を、
われは娘の肉を持てり。
肉を買へや、人の肉を、
われは娘の肉を賣らん。』

『あはれ、翁よ、その籠に
盛りたる肉は 生血垂る。
いかで、翁よ、そを 持ちて、
人の子肉を 賣るといふ。』

『遠く放つ 砲の 弾丸に、
子等は 打たれて 早く 亡び、
近く 寄せし いくさ人 に、
妻は 犯され 耻ぢて 死にぬ。』

『清の國に政治あらず、

民は野に伏す獸の如し、

利器を夷狄運び來たり、

あはれ、自在に狩りて暮す。』

『さらば、そが爲め、生き残る

娘や切りて賣らんする。』

『さなり、家のうさぎさへも、

擁くその子の數を計へ、

子等の日々に減るを見ては、

残る一つを食ひ隠す。』

『それは毛物よ、人ならば、

稱ふる道のあるべきを。』

『正義 何ぞ、平和 何ぞ、

われに 何等の 致す あらず。

北京政府 弱きばかり、

かれ等 おのれの 威をば 振ふ。

『肉を買へや、赤き肉を、

われは娘の肉を賣らん。

いまだ 曾て 穢れなきを、

われは 殺して 刻み持てり。』

『なれば 狂へり、いざ、今を

行くべき 方に 従へや。

こゝろ 求むる物 あらば、

來りて 告げよ、わが陣に。』

『既に 愛しき 妻子 あらず、
のがれ 行くべき 穴も 失せぬ、
飽くを 知らぬ 他國人 に
之し 與へば われは 足らん。』

『肉 を 買へや、赤肉 を、
われは 娘の 肉 を 持てり。
無辜の 民を 屠る 上は、
人の肉 をも 來り食へ。』

『來れ、狂者よ、その口を
つぐみて われに 従へや。
いかに 狂ひて あればとて、
わめきて 泣くを 許されじ。』

『何ぞや——野邊を 走る水 の
光る つるぎに 身をも 召すや。
肉を 買へや、赤き肉、を
さらば この身も 共に 行かん。』

凱旋兵

『吾子 よ、あはれ、八幡、
無事に 歸り 來し か』と、
母が 熱き なみだ の
顔は 消えし その跡——

『われも 母ぞ、うらみや、
愛しき娘 失せたり、
清き肌 は 裂かれて、

耻ぢを陰府よみに寄せたり。

『思ひ知れ』と、苛責がしやくの

杖は重し その都度、

燃ゆるまなこ ありあり――

これぞ 秘せる家づと。

『君よ、あはれ、金比羅、

つゝがなくて 斯くや』と、

妻が 籠むる なさけの

姿 消えし その跡――

『われも 妻ぞ、うらみや、

ちから なくて この罪、

戀ふる人を 隔ちて、

こゝに 陰府よみの わび住み。

『思ひ知れ』と、苛責がしやくの

聲は 近し この櫛かみ、

闇に 満つる 密事の

悔ひぞ 深き 胸底むね。

むしろ 毛物けもの なりせば、

それも 常の 快樂、

なまじ 勝ちに 狂ひて、

餓ゑを 満てし 罪惡。

劍を 抜かば、まだしも

血液けつりと 朽る 小あし手、

弱き まゝに ひそめて、

墓に追ひしおもひ出。

心の臓にからみて、

無辜の民のわざはひ、

兩の肺にすがりて、

無垢の娘等の歎げかひ。

砲の陣は、黒烟

消ゆるまでの込み合ひ、

これは、血の輪つぶつぶ、

刻をきざむ戦ひ。

火矢のなやみ頻りて、

敵は胸の奥なり、

かしら觸るゝ枕に、

ころ責むる聲あり。

ひとり覺めし夜中

夢は残す人妻、

ほてる目をばめぐりて、

正面に照らす胸隈。

強き神を脊負ひて、

われに放つ矢の數――

荒れて廣き心野に、

渠女はまたも叫ばず。

刹那毎にわが身の、

死をば受くる苦しひ、

怨を斷つに従ひ、

開の盃盤

罪を悟る悲しみ。

この身、粉末に砕くも、

一つ毎に口あり、

わが血、石にこぼるも、

ひと輪毎に耳あり。

かの女逃ぐるその時、

おほひ得たる衣なし、

斯くぞわれも追はれて、

隠れ行かん空なし。

いのち外に拾ひて

歸る道の萬歳、

暗き室にわが身を

今や呪ふ生涯。

朱のにじみ

あはれ、翁の入れ墨師、

しがめる顔に目は燃え

闇にはあらねども、

捻に反く暗き室。

身投げ娘のおもかげを

小針の尖に思ひ出で

若者 面壁の

脊なは、衣なき玉の肌。

衣なき脊なは、妹を

闇の盃盤

きざむに つれて、痛み行き—
斯くても、『わが脊よ』の
戀しき聲は、聽ゆなり。

失せにし人を追ふ罪の、
樂しき胸をいだきつ—
忍ぶは戀の苦か、
まさまざ浮ぶ阿鼻地獄。

『父よ、お房の罪業は、
斯くてわが身に引き受けつ—
翁は答へなし、
ただ差す墨の匂ふのみ。

靈ある針の走り彫り、

成れる姿は活き活きと—
裸形の女神なり、
情には満つる肉付きや。

目蓋と口に朱を入れて、
さながら元の兒は生まる—
翁は睨み詰め、
『淫婦』とばかり罵りぬ。

兄はその頸ふり向けて、
若き血しほぞ亂れける—
口づけしたる者、
父の眸に燃えて見ゆ。

あけはにじみて脈に散り、

心狂ひて息絶へぬ——

翁は怒りつつ

おのが喉笛つき刺しぬ。

二の女児

叙事 歌曲 黄金鱗

一六部姿

鞍馬山 さか路をくらみ、

星あかり 樹の間を漏れず、

そびえ立つ 絶壁のうへ、

谷深 闇に臨みて

耳澄ます 部のすがた。

草も木も眠る 深山や、

夏の夜の風は高ぞら、

寂として、森のしたより、

滴々と落つる響きを

闇の盃盤

底 までも 立ちて や 聽ける。

あるは、又、遠吹く あらし、

おほ楠 の ほづ枝 に 當り、

その枝 と 戦ひ 過ぎて、

いま更に 共に 語らひ、

山津浪 起す を 聽くや。

あるは、又、つけ狼 の

岩が根 を 傳ふ つま音――

さりとは、ことも いぶかし、

脊なる 厨子 下に おろして、

『人 あり』と 闇を のぞきぬ。

二わが兒

『ああ、されば、この 谷の底、

なれば 今 棄て兒 に 等し、

年は まだ 二七 の つぼみ、

持て囃す 花 とは 成らで、

咲き出でし 遺傳 の やまひ。』――

『その病 癒す 爲め なり、

「しばらく」と 母が 御言葉、

四五日 の 備へ 給ひて、

十日 こそ 既に 過ぎつれ。

身は こゝに 縛られしまふ。

『約束 の 迎へ 來らず、

わが心 うれひ に 堪へず。

起たん にも からだ の 繩目、

たゞ手のみゆるみ。残れど、
わが口に運ぶ糧なし。

『われや、かの病める瘦犬、

かへり見るものなくも、なほ

家戀じ、山はおそろし。

さればこそ、聲を限りに

日を叫び、夜を歎きつれ。』

『うべや、なれ、いづこの子ぞ』と、

問ふ六部、答ふるをとめ、

『わが家は——語るもつらし——

大阪の薬師なれども、

今は京、鴨川づゝみ——』

『四條橋、人こそ通へ、

うはべのみ映るその様

川水と清きをきそひ、

世はすべてつれなくあれど、

母のみはしかあるまじを——』

『さて、父は如何なる人』と

問はれては、たゞ涙のみ、

『ああ、君よ、父ありけれど、

五六年母に去られて、

その故をわれは知らじな。』——

『大阪に——もとは薬師の——

その父の里を知るや』と、

かれ、今やすまひ正せば、

『うはよみの 鱗取り なり、

大峯の 奥に』と をとめ。

『されば なり、わが娘よ』と、

手 を 投げて いただき 締めたり、

『なが母 は わが 連れ添ひ ぞ、

十年 の 仲 を 棄て、又

いまし をも 滅ぼさん とす。

(をとめ子 は 驚ける のみ。)

『聴け、しばし、かれは つれなし、

斯くまで と 知らざりける よ、

人 の 忌む 因果 の やまひ、

おのれ のみ 隠さんと して。

『その昔、われは 國栖人、

三上 の 奥に 笛 吹き、

うはよみの 眠り を 覺まし、

味噌 の 香に 之を 招きて、

黒がね の 柵 を 卷かせつ。

『七重、八重、かたき 園み を

やすらかに その柵 の うち、

なまぐさき 夜風 し のびて、

金色 の ろろこ 取る わざ—

楽しき は、戀 ゆゑ なりき。

『癩病 の 藥 なり とて、

こを 賣りに 齧らす 毎に、

かね よりも、はた 器具 よりも、

なが母の若きすがたを
目に映す、これ、さちなりき。

『三とせ 覺め、三とせ もだえて、
町人の口にもほり、
わが思叶ひて見れば、
その薬服するものは
戀ひ渡るわが妻なりき。』

『斯くて しもなれば 生れて、
十までは 無事に 育てど、
子にもそを 飲まし 置かん と、
われをまた 山に 遣はし、
その跡に かけを 隠しぬ。』

『無情とや、罪とや云はん。』

(子のかほの壞れは 揺りぬ。)

『されど、わが 長の戀人、』

この 數年、行くゑ 尋ねて、
信も なき 行者の よそひ。

『がわ里の 深き 森かけ、』

黒がねの 柵に 寄り來て、
味噌の香を 聴くうはばみや、
その如く 身を 削られて、
なほ、われは 戀を 追ふなり。

『あるは、この山を 一と越え、
あなたなる 縁者にもやと、
夜を つぎて 坂路を 來たり、』

なが聲を聴き得たるこそ
望みある手づるなりけれ。』

『ああ、父よ、なつかしきかな。
この上は、憎まるゝとも、

母に行き、母と住まはん。』――

『愛しき兒よ、とく谷を出よ、
負ひ厨子に入れて運ばん。』

三 負ひ厨子

『ああ、などか見るも物憂き、

五とせを古りしこの厨子。

古りにしは五とせなれど、

之を負ふ行者のよそひ、

戀に酔ふ靈には添はず。

『ああ、などか見るも物憂き、

五とせを古りしこの厨子。

古りにしは五とせなれど、

百とせを戀ひも渡れば、

とこ若の心に添はず。

『ああ、われはこの厨子負ひて

古り行かん身ならざりけり。

その重みいと軽らぎて、

わが體は血しほに踊り、

わが心いのちに溢る。

『最早やわれ六部にあらず、

闇の盃盤

いつはりの行者にあらず、
信仰も爲さぬものには、
法華經ほけきやうの一部も何ぞ。
佛像ぶつぞうの薫かびも何ぞ。

『戀のみにわれはあこがれ、
その戀をまたも得んとす。
失なひしものを求めて、
それにまた行きて會ひなば、
重き物すべて無なれや。』

『闇照らす力もなくに、
觀世音くわんせおん谷やにころげよ、
その底に千とせを消えて、
なほ恨みありとし云はよ、』

愛はしき兒の身がはりとせん。

『來たれ、兒よ、すでに、この厨子、
經まやうくさき箱にはあらず。
五とせを戀のぬくみに
あたゝかき胸のうちなり—
なれを乗せ母に運はばん。』

四絶望

鴨川の水いと清し、
あさゆふの夏のながめや、
よしあしの映うつるまゝなり。
されど、かれ、晝をい避けて、
夜こゝに厨子くしをおろしつ。

闇の盃盤

左右への 観音びらき、
出で來しは 菩薩に ならず、
『父上』と、西を ゆび差し、
『かしこなる 堤の ひかり、
それぞ わが母の 圓窓。』

『わが身 先づ 告げ來たらん』と、
その庭の 垣根を 入りて、
をとめ はも おどろきにけり—
おのが身を 山に 運びし、
その人は 母と 酒ほぎ。

『けふを また 酔ひて つぶしぬ—
いろ戀の 深きを 見ても、』

實に われは 京の 染め屋』と、
紺染めの 手は かきいやく、
白玉の ほそき 腕くび。

『こよひ をば こゝに 送りて、
あすは また よその 花染め—
わが 包む 兒をば 如何に』と、
白き手を 邪険に もぎて、
母の顔 窓に 向ひぬ。

かけなる は かしら 引き込め、
その答 ひそかに 聽けば、
『世の戀に 兒は 付き物 ぞ、
生れなば、また 棄て去りて、
なが見目の 若きを めでん。』

をとめ子 は 驚き怖れ、
川ばた に 走り 來りつ。

『父上よ、如何で しのばん、

われは、かの谷 に 歸りて、
死ぬべし』と、泣きくづほれぬ。

『左まで 母、無慈悲 に あらじ、

われ、之を なだめやらん』と、

いけ垣 を入れば、聽ゆる

うらみ聲、『なれこそ 憂けれ、

遺傳 をば 人に 隠して。』—

『そは つらし、よし 隠すとも、

知らるれば、かの兒 の如し。』—

その父 の 國栖 の 山人、

うはばみ の うろこ取り をも

とく 棄て、なれを 戀ふなり。』—

『その戀 も、黄がね の うろこ

飲まされば 腐る日 あらん。』—

『いな、われは 飲みしに 等し、

身も 魂も 斯く 燃ゆるを』と、

相いだき、口 相吸ひぬ。

うろこ取り、ただ 怒る のみ、

之を 避け、歸り 來たりつ。

『愛しき兒 よ、われは 二たび

大和なる 深山 の 住まひ、

森の香 を 寧ろ しのばん。』—

川ばたの 観音くわんおんびらき、
また人の 菩薩ぼさつを 閉し、
その父の 脊せなな に 負はれて、
行く道みちの うらみも 重く、
深山みやまへと 闇を 消えたり。

五 水晶洞

大和なる 大臺おほだいが原、
森の香 や 深きに 凝りて、
吉野川 流れそめたり。
その岸を のぼり 登れば、
梵宇ぼんう 以て 手引く 洞 あり。

その洞に 入ること 一里、
水晶すいしょうの 眞中まなかを うがち、
なみ 奥に 流るゝ 大河、
黒水くろみづの 響きも 高く、
死の川しのかがの 瀬にこそ 似たれ。

地心ちしんより 流れ來たりて、
地心へと またも 歸るか。
おほ洞おほぼらの せまりたる 底、
響々と 闇を 振ひて、
その響 逃ぐる口 なし。

この水に 手足 ひたせば、
手の先の 痛みも 亡び、
つま先の 傷も 癒ゆると、

あはれ、また、かたゐの人は
からだをも 浴びに 来るなり。

國栖人の娘も、こゝに
全復のいのりは 久し、
されど、かれ、壞れ 増りぬ、
兒を 棄てし 母を 棄てし兒、
父に さへ やまひ 移して。

あはれ、わが 國栖の 山人、
つひに この 御洞の あるじ、
うはゞみの 體を 振へど、
また 生ふる うろこの 如く、
朽る身に 戀のみ 光る。

その光 いや若やぐを

形なき 手に あつめ見よ。

この奥の 闇に 供へて、

水晶の 壁に かがやく、

蠟燭の 火にこそ 勝れ。

身は もとの 六部に あらず、

つどひ来る 人を 計へど、

皆 共に 顔は むらさき。

その數に 妻も まじりて、

兒の そばに あるをも 知らじ。

戀のしやりかうべ

無形律詩として口語の散文詩を書き初めたのは僕であつたと云つてもいい。が、この意味で僕のおこを追つて来たものは殆ど無かつた。ここさらに無形律を出さうとしても六ヶしいと見えてだ。僕もかかる散文詩を書き初めたと殆ど同時に、この散文詩の心持ちを小説に擴張出来るを考へて、創作の方面ではこゝへ「詩界に別れる辭」まで書いて専ら小説に向ふやうになつてしまつた。僕に取つては、この明治四十一年、二年、三年頃の作を集めた第五詩集は詩と戀のしやりかうべである。が、その當時僕がおのづからに活躍させた日本語の無形の音律に添つてこれを讀んで呉れる讀者が少しでもあらば、僕の希望はこれに過ぎないのである。

大正四年二月

泡鳴識

はしがき

無形律詩として口語の散文詩を書き初めたのは僕であつたと云つてもいい。が、この意味で僕のおこを追つて来たものは殆ど無かつた。ここさらに無形律を出さうとしても六ヶしいと見えてだ。僕もかかる散文詩を書き初めたと殆ど同時に、この散文詩の心持ちを小説に擴張出来るを考へて、創作の方面ではこゝへ「詩界に別れる辭」まで書いて専ら小説に向ふやうになつてしまつた。僕に取つては、この明治四十一年、二年、三年頃の作を集めた第五詩集は詩と戀のしやりかうべである。が、その當時僕がおのづからに活躍させた日本語の無形の音律に添つてこれを讀んで呉れる讀者が少しでもあらば、僕の希望はこれに過ぎないのである。

死外七篇

戀のつた 一胸のきしめき

時計の ちくたくが 自分の 動悸と なつて 響いて來た。
 すると、今まで、どこだか 知れない
 暗い 海の 真ん中で、大きな 輪がたに 漕ぎまはされて ゐた。身が、
 身の舟 と 共に とまつて 明るいところへ つれて行かれる。
 それは 廣い 野邊だ――

夢に 花が 咲き、花に 夢の かをり、
 かんばしい 風に 吹かれて 浮き世は 千里、
 遠く ひろがる 眼路の 末に
 ゆらぐは 木の葉。
 その きらめく 蔭 から、誰れだか 知れない 人の
 水汲む なつかしい 音が 聽える。

あんなに 楽しい 世 なら、
 苦といふ ものは なかつた だらうに――今一度
 あの 井戸 に 行きたい、
 あの 水が 飲みたい、
 あの 水で 拵らへた 酒が 飲みたい。

ここへ 來たのは 間違ひで あつたらしい。
 かう 思つたら また 急に 闇の崖

戀のしやりかうべ

うつら／＼の胸さきに迫つて来て、
息が詰つたのは底も知れない虚空に落ちて行くのだ。

『あ！』と、思はず聲を挙げたら、

『あなた、あなた！』と女房の聲、

『しつかりなさい！』と息子の聲、

かしらに娘、右には隣りの妻、
その他の人々もゐるらしい。

矢ッぱし井戸端の室に苦しんでゐるのだ、

聲も出ないこの胸のきしめきしめ！

畜生！

わが身のことを云つてゐたのか、

今聴えた葬式準備の話？

二 釘うつ響

けふに限つてはツきり聴える

隣りの寺の本堂新築の……

どこの大工だらう——吉公らしい、

かな鍮を使ふ手がなか／＼利いてゐる。

あのお寺の和尚も

年來の素志を爲就けるのだ。

あたらしいのが出来て、

古いのが取りこわされたら、

さぞ立派な見えになるだらう。

和尚の胸の様に、おだやかな

戀のしやりかうべ

池に——鯉は泳いでるだらう——その新堂が映つたら、
 わが家の二階からも見える
 この世の外の屋氣樓！
 吉公、しツかりやつて呉れ。

トン、トン、トン、トン、トントン！
 トン、トン、トン、トン、トントン！
 かな鎚の音——

どうしてけふは聲が暗い？
 どうしてけふは響きばかりが近いのだ？

わが耳に釘うつのではなからうか、
 このトン、トン、トントン？——

あ！わが身は、もう、和尚よりも早く、
 別な新築に這入つてゐるのだ。

葬儀屋が来て、

わが棺の蓋に釘うつひびき！

三火葬

燃えるわ 燃えるわ、
 石油に火をつけた様だ！
 ぼうくと燃える音は
 どこからも逃げる道がない。

このまま立ちほだかつたら、
 不動の神力さながらだらうに——今、
 狭く、固くかこんで、仰向けの
 わが身を焼く火は——

戀のしやりかうべ

音ある せいかに——風を つつむ 赤い 眞綿だ。

別に 靈なる ものが あるなら、
見えぬ 文字の あぶり出し日記 も 出ように——
見えぬ 字も ない、感じも ない、
熱くも なければ、痛くも ない。

生きたいと もがけばこそ 熱い いのち——
ああ、今や、宇宙と われと が 全く
燃え盡きる 時が 来たのだ！

三六 縁 日

二十日間は 日夜 父の 看護、
十日、十五日間は 父の なくなつた 跡の 始末、

僕は がっかり 勞れて しまつた。

墓と 死と 死の國と に
餘り あたまを つつ込んで ゐた から、
陰府 の 臭ひと 勞れと が 一緒に なつて、
鼻さきに ちらつくのは うす暗い 神経だ。

僕 自身も 早や 一段 低い
夢の世 に 落ちて 行く 氣が して、
手は 空しい 物を 握り、
足は 空しい 物を 踏む 様だ。
からだは 何となく 軽くなつて、たわいが ない。

ふらりと そとへ 出ると、
お地藏さま の 縁日だ。

戀のしやりからべ

夜ぞらを 赤く 照らす 露店の ランプ、
いくつもの いくつもの かきなり合つて、
遠い様な、近い様な 光が
数多く 僕の 目に 映じて 来る。
僕は 足もとが あぶなく なつて、
その光 の 範囲へ 踏み入り かねた。

鳥渡 踏みとまつて、

からだ の 釣り合ひ を 取つて見た。

大道が 僕の 足に こたへて 来た。

もう、大丈夫 と、歩み出す。

あ 屋 がある、きんつば屋 がある。

おもちや店 がある、古本店 がある。

不断は 氣に とめなかつた 物が、皆、

不思議に おもしろくツて たまらない——
丸で 新らしい 世界だ。

いそがしく 働く 目を 轉じて、

並んでゐる 植木屋 の 前を 通ると、

父 在世の時は 縁日 の ある 度毎に 出て来て、

ここいらで、好きな 植木を ひやかした の だらうと 思ひ出した。

然し、もう、その人 は ゐないのだ。

ぶんと 焼き鳥 の にほひが して来た。

何だか 喰つて 見たく なつたので、

その店 の うちしろへ まはつた。

暗い 陰 から

明るい 大道を 見てゐると、

戀のしやりからべ

ぞろぞろとおほ勢の人が通つて行く。
その中にまじつて、圖抜けて丈の高い、
立派な白髯の老人の
いそいで行くのが見えた。

「おや、お父さん！」

僕「これを口まで出さないうちに、

僕の回復しかけたよろこびは

その人のうしろ姿と共に消えてしまった。

庭木の刈り込み

父の代に大事にされた庭木を

僕は唐ばさみで刈り込もうとした。

まだ時期が早いと妻は云つた。

然し、僕の胸の様に

鬱々として繁つて来る庭木を

そのままにして置けば、

書齋はうちそとから陰鬱な壓迫だ。

うす暗いまはり椽の隅にしゃがんで、

うす暗い心の目を放つと、――

時は文月だ、――

物憂い梅雨間の晴れ日、――

梅の木ながの青葉は、

重い雨に幾たびも打たれた爲めだ、

黒ずんで、

少しも冴えた光がない。

目を つぶつて

考へてゐる様な その枝葉の かげに、
父は 白い 口ひげ を ひねつて、
毎年、粒立つ 木の實 を 仰ぎ見た のだ。

僕の 子供の 時も かれは さうで あつた、
近年も 亦 さうで あつたらう。

ところが、僕の 諸方を 放浪して ゐる うち、
いつのまにか 父は 亡くなつた。

否、亡くなつたの ではない、
僕の 記憶と なつて 抜け出た のだ。

最後の 二十日間、

朝に 晩に 看護して ゐた のは、
僕の 疲れた 神経の 一端に 觸れた

もぬけ の 土くれで あつたの だらう。

どうも、この 薄暗い 樹かげに、

かれは、見えないが、

まだ 立つてゐる 様な 氣が する。

それは 死のかけ かも 知れない。

と云ふのは、僕が 多年

生活に 疲れ、奔走に 疲れ、放浪に 疲れ、

生の 苦しみ――それが いのちで あつた――を 味はつて 來た 今、

父の 建てた 家を 譲り受けた 氣持ち は、

一肩 おろせた だけに、

いよいよ 死に 近づいた 様で ある からだ。

庭の木 を 刈り込む 様な ことは
夢にも 見なかつた 初めての 経験だ。

戀のしやりからうへ

はしごを梅の幹に立てかけて
なかばそれに攀ち登つた時、
不馴れの爲めに

あただが すらふらして、目まひがしたが、――
元來、僕は机を家とする筆の人だ、――

こんな植木屋の眞似をする様になつたのは、
随分氣のゆるんで來た證據だとおもつた。

實に僕は疲れた者、倦じた者、

刹那の間でもぐツすり一安心したいのは山々だが、

然しまた死人の安住は得たくない。

睡い様で覺つてゐる神經の働きが、

地上を離れては、一層

僕の目前にちらついて見えた。

ふと、かな物の臭ひが動くと、

新らしい様な而も古くさい様な感じが、

黒ずんだ青葉からつたつて來て、

僕の使ふはさみの音に聽えた。

ちよきん、ちよきん！

またちよきん、ちよきん！

何だか、僕が自分の身を切り縮めてゐる様だ。

そして、また、固い枝をはさむ時、

顎を明けてはさみの手ごたへを受け、

しツかりと宙に齒をかみ合はせた。

亡き父がさういふ時にいつもさうしたのを思ひ出し、

僕はぞつとした。

死人が僕の身に乗りうつつて、

戀のしやりかうべ

僕の身を刈り込んで、わたの二ではなからうか？

ハンモク

熱くて溜らない 日が
嚼んだ 氷の様に 身に しみ込む 頃だ、
眞夏の 空に、
蟬の 聲が じいじい
僕の あたまを 煮えくり返す。

廊下の 柱と 柱とに ゆはへて
低く釣した ハンモク の 中で、
僕は たわいもない からだを
たわいもな、横たへた。
自分の からだ のか、何だか 分らない おもみが、

左右に 揺れて、
ありも しない 風を 待つて ゐる。
と 思つたら、突然、自分は 百万年 以前
高い木 の 枝に 眠る 猿で あつたと 云ふ考へ が 浮んだ。

きのふ は 既に 前世界 だ――
ゆふべ、高い ところ から 落ちる 夢を 見たのは
夢 では なく、實際、おほ昔、
生々繁つた 深森 の
枝から 枝へ 渡る 時に、
あやまつて
すべり落ちた 記憶で あらう。

今 落ちない のは 不思議だと、
仰向いて 空を見た。
戀のしやりからべ

浅い ひさし と それに かぶさつてゐる
庭の 松の木 との 間から、
熱した おほ空 の 廣がり が 迫つて 来て、
僕の 呼吸が 苦しく なつた。

前世界 から 生活に 疲れて 来た 身體が、
ハンモク の 中で、揺られて ゐる 様だ、――
自分 の 身が おもた過ぎて、
何にも する 勇氣が ない。

このまま 死ぬる なら 死んでも いいが、
さりとして、また、未練の ある この 人生。
いつまでも 眠つて ゐられる ものなら、
死んでしまふ のとは 違つて 安心 だらうが、
さうさう、永遠 まで

頼みの 綱は 朽ちないで ゐなからう。
と、どこからか 羽根が 生へた 様に、
僕の 考へは 百萬年 以前 から
百萬年 以後に 飛んだ。

くだらない 空想だ と 思つたが、
何だか、醒めて ゐて、おそはれる 氣持ちだ。
夏の 蒸し熱い 呼吸は、
乃ち、僕の 呼吸で あつた。

ああ、金が 欲しい！
僕を 解して 呉れる 女が 戀しい！
大事業を 爲たい！
らしい 句を 得たい！
さまざまの 考へが 一時に 浮んで 来て、
戀のしやりかうべ

蟬の聲に不安の和聲を添へた。

ハンモクは實に不安な住ひだ、

ぶらぶら動くたんびに、

僕の胸は息詰まる思ひ！

僕その物

いろんな思想が、

書齋の空中から、

鉛の彈丸を降らしたのだ。

それが熱い間は、

おほ粒の露の様に融けて、

僕のからだに氣持ちよくしみ込んだが、

冷めて來たら、

あたまから先づ重くなり、

精神の働きが殆ど全く蔽塞する。

筆を持つ手が働かなくなり、

からだか意久地なく小さい火鉢をいただく。

動きたくもない、

横になりたくもない。

そして、障子を以つて圍まれたこの書齋、

『趣味』やら『早稲田文學』やらが散らばつてゐる上を、

目のくもりと共に、

薄ぐらいゆふぐれが押し寄せて來る。

目の前の電燈をひねると、

僕は十六燭の光に堪へ切れない、

戀のしやりかうべ

息詰る 様な 気が して——
よくよく 疲勞したのだ——
ふらりと 僕は 家を出る。

うすら寒い 道路を 電車に 乗つて、
運び切れない 重荷を ばせると、
自分で 自分の むどころが 分らない。
外套に くるまつたのは、

鉛の 冷たみ、
重い 足の 下から がうくと
車の きしめきが 傳はつて 来て、
抵抗力の 抜けた 全身を しびれさせる。

僕は 留守で あつたのか？
それとも また 夢を 見てゐたのか？

いつのまにか 日比谷を 過ぎて
堀ばたを 通つて ゐる。

お堀の 水が 明るいので (五時 過ぎだ)
ふと 気が つくと、
向ふの 石垣の 上の 松の 枝を よけて、
水色の 空に
かかつて ゐるのは 三日月——誰れの 姿で あらう！

寒いのに 顫へて
あくびを したと いふ またたき、
傾むいて ちらくする 光は、

(鉛の それだが)
僕の 經て來た 疲勞の 生涯を
そのままに 活かして ゐる。

舞のしやりかうべ

みづくした空を、

衰弱 したたり 倦怠の 光線――

夢中の 輝き――うつつの 力――

思想の 弾雨は これで あつたらう！

書齋の 空は ここで あつたらう！

寒さうな 堀中の 水面にも

あつたかい 血は 通つて ゐるのか、

常若の まなこが 開らけて、

僕の ゐどころを 映した と 思へば、

太い 電信柱に 遮ぎられて、

その まぼろしは 消えた――

電車は がうくと 進行して ゐる。

然し 進行しないのは 僕だ、

水面の まぼろしを 追ひたい、

三日月の 光を 見て ゐたい、

そして 書齋と 思想とを あけては ゐない、

否、僕 その物は いつも 僕 その物だ、

寒 月

宮城の 黒い 森の 上に

圓い 月か 出てゐる、幽霊の 様だ。

熱もない 錫の かがやき――

焼き盡す 力の ない

地獄の 火に まとほれて、

僕の 霊が 浮び出たので あらうか？

戀のしやりからべ

青い影！ つめたい あらはれ！
死の光！ 無感覺の しるし！
僕には 殆ど 関係がない。

然し 電車が 進行しても、
月は いつまでも 電車の 窓を 去らない。

見つめて みると、
その 疲れと 冷たさが 段々
僕の 身に しみ込んで 来て、
車臺の 隅に 小く なつてゐる 僕の からだが、
あたま から つま先き まで、
外套の 短かさを 感じて ゐた。

二のしやりかうべ

「お母さん！ お母さん！」
と云つて、死んだ ものを 呼ぶのだ。
僕は ぎよツとして あたさを もたげた。

病人を 見ると、仰向いた まま、
久し振りの 優しい 微笑を 浮べて、
目は つぶつて ゐる。

しんとして、

鼠一匹 騒がない 夜中、
臺ランプの 光に
時計の ちくたく ばかりが 明らかだ。

戀のしやりかうべ

そのこまかい確かな刻み、
それが僕の脈搏に傳はつて、
刻一刻、

快樂の夢は羽ばたきをして過ぎ行き、
心細い執着の緒綱が身を引き締める。

死にたくはない、
離れたくはない、

然しこの執着！この苦痛！

きのふは罪だ、良心が責める、

然しその良心も亦罪であらう――

男性にはまだしも堪へられようが、

この無邪氣な子をどうしよう！

どうせ死ぬものなら、
悔いなく恨みなく苦みなく殺したい。

しんとして、
外には何物が窺つてゐるか分らない。

『お母さん！』と、また輪廓のぼやけた一聲、
瘦せた顔に微笑がなほ更らいちらしい。

夢を見てゐるらしいので、

そのあつたかい胸から
僕の腕をやはらかにはずすと、

逃げるものを追ふ様、
急に空を攫んだ。

戀のしやりかうべ

『しーちゃん！ しーちゃん！』と、静かに呼んで見たが、
覺めようとも しない。

僕も 考へた、呼び起して、苦痛に 返す よりも、
死ぬまで かうして ゐさせる 方が まだしも 功德だ。

早く 出來た 子なら、

僕には 總領娘 ぐらゐに 當る 若さだ、

無病 息災で あつた きのふは、

だだを 抱た ことも ある、

泣いて 無理を 云つた ことも 思ひ出される。

そして 今や、

ただ その 衰弱と 狂妄との 喰ひ物に

僕を 引きつけて 置くの かも 知れない。

過ぎ去つた 快樂は

現在の 僕を 満足させるに 足りない――

執着は もはや 愛で なく、

僕も 亦 自分の 苦痛の 餌ばを 求めて ゐたの かも 知れない。

ランプの 光に 獸性の 目覺め、

(それも やがて 肉 その物の 腐爛に 包まれて 行くの だらう。)

僕の 手足に 女の 存在を 知らせるのは、

既に 僕の 病毒を 多く 運ぶ

その 悪血の あつたかみ ばかりだ。

兄弟を 棄てた 女、

妻子を 離れた 男、

戀のしやりかうべ

(ふたりの間はもとの他人だ。)

明き屋 同前の二階、

燃える ままの光、

(すすけた肉は腐つて行く。)

快樂のほとぼりがなくなるに從つて、どうせ死んでしまふ僕等、

苦痛の 中の 快樂も (なくなれば) 一層強い 死だ。

ただ それまでの 連続——刹那の 衰頹——

時計の 音の刻 一刻は、

二つの しやりかうべを並べて 刻むのだ。

抱き合つた 寢床の うち、

互ひの 口は

天井に 向つて 白い 息を 吐き出して ある

演 説

演壇に 立つて コップに 水をつぐ、

その 水の 中を 凝視すると、

男女聴衆の かほがほが 一つに 映る、自分のも 映る。

恐怖と 意気込みとは その水の あぢだ、

一くち 呑むと、

興奮した 神経が ひやりとして 靜まる、

そして ビストルが 今にも 響いて 來さうだ。

その 水の 中を 凝視すると、

男女聴衆の かほがほが 一つに 映る、自分のも 映る。

聴衆に 向つて 演説 するのか、
それとも また コツプに 向つて するのか、
いづれとも 判断が つかない。

(コツプには 大きな 耳が ついてゐる 様な、気がする。)

聴く ものには 聴えるのだ、

聴かない ものには 聴えないのだ、

いつのまにか オスカ ワイルドの 話が

僕 その物を 説いて ゐる。

場内は ひっそり して、

人々の 息の にはひが やはらかに

僕の 鼻さきを 夢の 様に なでるのだ。

ガラスに 映る だけの 井は 頼母しい、

(が、然し、そこに 破裂も あらう。)

毒か 薬か 分らない コツプの 水を 凝視すると、

男女聴衆の かほがほが 一つに 映る、自分のも 映る。

甲州の印象

一

もう暮れて 行く 甲州の 山々、
富士の いただきが 先づ 隠れる、
その 手前 の 一列が 隠れる、
その また 手前 の 列が 隠れる、
この 數列の 連山が みんな 見えなく なつて、 目前に
田と つづく 眞ツ黒な 森も ないほど、
灰色の 雨霽が かかつて しまつた。

鹽山は 家の うしろで 無論 見える 筈が ないが、
左りは 笹子峠の 山脈も 薄らいで、

宿の 裏庭に 近い 笹やぶ ばかりが 黒い。

右の 後ろ手 からは、甲府の 方に 走る 山が ぼろつと
あたまが 見えぬ 大牛の 脊の 様に 横たはつて、
その脊の 骨ぐみ だけは 薄く しめつぽい 輪廓が ついてゐる。

かう云ふ 山々の 間に 見えたのは 廣い野、青田、
遠い 正面の 山ふところ から かけて、その麓 まで
今年の 水害の 跡、赤禿げの 山腹、白びかりの 砂道、
今年 またの 溢水（夜あけと ゆふ暮には 銀河と 見えた。）
朝日 ゆふ日の それに きらめき映る 流れ。

涼しい 夏の 風に 浪打つ 四方 一面の 稻穂草、
人の 若い時を その 目さましい 緑に 見せて、
おほ浪の 様に 揺れるのは 僕等の 心、

戀のしやりかうべ

戀の不安はこの廣い青海に浮んでゐる、
(但し、僕等の不安に底のないのは、
實を結ぶ地の底が見えないのと同じ様だ。)

この海の岸近くに——しーちゃんも覚えて ぬよう——牛小屋、
稻の葉浪に見え隠れて、その柵内で、
水に浸つて 喜ぶ 水牛か 何かの様に、
親牛 小牛が 澤山 遊んで ゐて、
時々 もうく 鳴くのは 丁度 僕等が、
戀の 水ぞこに 息詰つて 懸命に
救ひの 空気を 呼ぶ 様だ、(しーちゃん、
僕等にも かう云ふ ことが 度々 あるでは ないか?)

また 鐵道線路 に 桑畑——かう云ふ 現はれは すべて
やみ夜と 瞑想と の 眼に 消えて 行つて、

動くものはただ僕の心ばかり。

二

取り残された 旅は つらい ものだ
しーちゃん まだが ゐなく なつたのは 丸で 闇。

その闇を 欄干に もたれて 見入つて みると、
末も 分らない 今も 分らない 一すじの 黒い道を、
黒い 影、喪服を 着て 通る 影、
無言(僕は 半ば つんぼに なつた、)沈黙(僕は 物を 云ひたく ない、)
悲痛、苦悶、死 などの 靈が うつ向いた まま
しくしく 泣いて 通つて 行く。

よくよく 寂しいと いふ ことを 覺えたの だらう、

誰れも 相手に する ものが ないのだ。
渠等も その 前世では 世の 人々の 爲めに 絶叫し、
その 意見も 吐露し、その 議論も 戦はした のだが、
相手が 分らないので 根氣負け をして 喪服を 着けた。

それが また 一人 減り、二人 減り、三人、四人 減り、
黒い 道の 黒い影は、草葉の 露が 朝日に 當つた様、
みんな 無くなつた。では、もとの 見えない 光か？ さうではない。

死と 云ふ ものが 渠等を すべて 呑み下だし、
いち度 産れた 兒等を また 呑んでしまふ
鬼子母神 の 腹の 様に、秘んで ゐた 死の 影が
段々 大きく 脹れて 来て、僕の 闇に 合した。

その 闇が また 僕 自身と 合したので、

眞ッ暗な 死は 戀、しーちゃんの 亡くなる 時だと 思はれた。

(ことわつて 置くが、しーちゃん、君の 生きて ゐる間は 僕も 死なな

50)

三

どういふ 寂しい 闇——霧——深い——の 中から、

しめッぽい あかりが 一つ またたいて ゐる。
牛小屋に 遠くない ところだ。

その あかりの またたき には、しーちゃんが きのふ

汽車で ステーションを 立つた 時の 伏し目が 思ひ出される、

(しーちゃんは 僕に 別れる時 目 潤んで ゐた のだ。)

別れは つらい、戀も つらい、その つらさを 知つて ゐるの だらう、

あかりは 今 しよぼく 泣いて ゐる。——
女だ、男子は 決して 涙を 見せない。

その あかりが——居据つて ゐるのだが——動く 様で、
ちらくして ゐる 間に 少し 大きく なつた 氣がする、
闇の 中に たつた 一つの 慰めだ。

恰も 消えない 露——日輪の 光を 晝間から 一身に吸ひ込み、
目くらの 夜を 澤市の 妻 となる 氣だらう。
(僕が 若し 全く つんぽに なつたら、しーちゃんか 僕の 耳だ。)

その 露 ばかりの 光を 慰めの 夜に、
小牛の 聲が 無言を 破つて 聽える、
何だか 求める 物が あるかの 様な うなり聲 だ。

一度、二度、三度、四度、五度、
小牛が 鳴くに つれて それが しめつた ランプの
聲に なつて、ヤッぱし 同じ 濕ッぽさだ。

ランプと 聲、慰めと 求めが 一つに なつた のだ、
戀と 不安が 合體したのだ、
しーちゃんと 僕が 同じ おもひに 浸された のだ。

四

去年の 水害に、鐵橋の 破壊、
田地、道路、家屋、人畜の 流出、
山麓の すべり出し、大岩石の 移轉、
川流 沼澤の 滅却、奇變——
やま津浪の 猛烈な 勢ひに、

戀のしやりかうべ

或 郵便局長はその 妻子の

氏名を 手足に 縫ひつける ひま さへ なかつた。

すべて こんな 物語りを 聞いた 日だ、

今まで 晴れてゐた 空が 午後 から 曇つて、

富士の 方面 から 段々の 大風雨、

雨は ちぎつて 投げる 様——おほ神鳴りも 聴える。

急しい 雨あしは 四方の 山々を 閉さす、

宿の 女中共は まだ 時でもないのに 雨戸を 締める、

晝間を 殆ど 眞ッ暗な 闇、

之を 時々 破るのは おほ稲妻 の 屈折——

ぴかり！ ぴかり！

また、ぴかり！ ぴかり！

その 明滅の 間に しか

萬物と 僕等と の いのちは なかつたの だらう。

然し、戀の つづく 如く この あらしも つづいて、

ほんとの 夜に なつた 時は まこと 僕等の 世界だ、

あらしは ふたりの 枕もとに 響いて、

物凄^ない 奈落の眠り(これが 戀の 心だ)を 實現した。

宇宙 萬物を 無にした 妖女^{まじよ}は しいちやんだ、

影も 形も ない 肉の あたたかみ、

之を 抱擁する 心には 底が ない。

五

汽車は もう 幾たびも 往復した、

再び 會ふ までは 僕は その 回数を かぞへて ゐる だらう。

往きにも 田の 間まで 白い 煙りを 吐き、
復かへりにも 亦 同じ ところで ぴいと 鳴る、
その笛と 白けむとで いつも シイちゃんを 思ひ出す。

シイちゃん、君が 出發して から 急に 稻の 穂が 出だした 様だ、
氣が つかなくつた のだらう。——然し 汽車の 笛と道とは變らないが、
田を 渡る すず風は 四五日來 大分
ひイヤりして來て、ゆふべから 降つづいた 秋さめに、
僕は もう 蚊屋かやを 奪はれ、室には 障子が 填ほつた。

きのふ まで ふたりで 親しんで ゐた 室が
丸で 初對面の 様で、柱の 姿見に 映る 僕の 顔も
何だか 他人の 様に 瘦やせてゐる。——シイちゃん の留守を、
戀の 寂しみと 一緒に 秋の 景色が 舞ひ込んで 來たのだ。

ゆふべも さうで あつたが、今夜は 更らに 寂しい、
あすは 尙更ら だらうと 思つて 床に 就くと、
掛かつてゐる ランプが 田の中の 一つ火の 様で、
僕の 心の おほ闇に 小い あかりを 得た だけ
却つて 求める ところが 多い。——小牛の 叫びは 腹わたの
中から聽える。

いつ又 シイちゃんに 會はれよう？
もう、二三日、——
千萬年も 隔つて ゐる 様だ。
これが 戀の 時間と 里程 だか 知らん？

六

シイちゃんは ゐる 間まに 發熱して 三十九度 二分の 熱、
戀のしやりかうべ

それを介抱してゐる時は心配であつたが、然しまた忙しくツて、寂しさをおぼえなかつた。

僕は獨りになつてから、

直ぐ下痢をして——氣候の變り目だ——

けさ膳にのぼつた物が全く喰へないので、

今更らの如く秋の寂しさを覺え出した。

きのふは蚊帳を奪はれ、

けふは障子が填つた室、

左右を返り見てもほかに息するものは無い。

火を吹き消した闇の寢床を抜け出て、

僕のたましひは軒下の小流れに浮び、

ちよろ／＼いふ音と共に、(僕はまだ一方の耳が聽える、)

田の眞中へ——會てしーちやんと散歩したあたりまで——

行つて見たのだらう、ぼんやり歸つて來て、

無言で僕の胸に這入る黒い影が見えた。

何物、だらう？僕はかう質問した、(自分のたましひを

忘れてゐたのだ。)然しその姿を闇に見失つたら、

急に僕の體内に水音の様な悲しみが湧いて來て、

胸の裏がはに苦痛を産みつけるものがある、

(しーちやんにむしり取つて貰ひたい。)

然しその物が黒い影だ、たましひだ、

生命だ、戀だ、しーちやんの置き土産だ、

それがまた僕の詩歌だ——しーちやん、

君がゐないと歌はいくらでも出來ようが、

さて、僕はいつまでも君と離れてゐたくない。

七

驅けれ、驅けれ、汽車、
僕の むくろを 乗せて 驅けれ、
僕の 戀と たましひ とを 乗せて
しーちゃんの ところへだ、——しーちゃん にだ！

僕は 今 理想家だ、
しーやかうべ の 様に 碎けて、その 手足 の 様に、
からだ と 心とは 別々に 關節が はづれてゐる。
しーちゃんの ゐない 甲州の 山野は、ああ、厭だ、
昔の 骨塚ッ原か 鳥邊野 だらう、
速かに 去れ、速かに 退け、この 荒涼たる 死國！

南に そびえて 無言、沈黙、
灰色の 空に 黒い 輪廓を 畫かく のは 何だ？
富士——これ やがて 僕等の 努力と 熱心 とを
無と 無自覺と に 葬つてしまふ 墓じるし、
萬人を 臨見 壓迫する 高津城、
残酷な 奥津城だ！

その他 大小の 山脈、連山も
狭苦しい 晝間の 光に 限られて、
小い 宇宙の 棺に 死んでゐる、
活氣が ない、奮發が ない、無心無熱だ、
(僕は、しーちゃん、目 よりも やみ夜が 生命だ。)

窓外に 開らけて ゐる 青田、桑田、
その間を ぐつて行く どぶの 様な 小川、
戀のしーやかうべ

昨夜の雨に力を得て
はち切れさうな粒を誇る葡萄畑、
しいちゃんによく親しんだ町の子供、
しいちゃんの廂髪を笑つた村の百姓、
それらも何だ？ すべて死の喰ひ物だ、
すべて死の硫黄じみたにほひがして来る。

驅けれ、汽車、速かに しいちゃんに、
僕は 臨時の理想家となつて（僕の心身の
關節は しゃりかうべの手足の様に はづれてゐる、）
速かに この死國の 山野を のがれたいのだ。

がッたん、がッたん、がッたん！
また がッたん、がッたん、がッたん！
その音が 急に 僕の 今 ぼんやりした 胸の やうに 眞ッ暗になつて、

鳴り頻る 神鳴りの 様な 響きが して来て、

（僕が いい方の 耳を 押さへれば、遠雷の 音に 聴えた、）

あせつて 夢中の 僕には、餘り 不思議だ、

汽車は 跡戻りを してゐる——

僕が しいちゃんを 追つて 逃げる のに 氣が付いて、残酷な 死が

僕を 途中で 引きとめたの ではないか と思ふ とたん、

びいと 汽笛が 鳴つて——トンネルを 一つ 出たのだ——

また 別な トンネルに 這入つて 行く。

こつそり 忍んで しいちゃんの ふところまで 行くのだ と思へば、
追ッかけて 来る ものが ある 様で、

甲州の 山野は 勿論、

中央線の トンネルだらけも 何だか 物凄い。

一緒に 来た 時は 夜で 氣が 付かなかつたが、

戀のしゃりかうべ

有名な 笹子トンネル に 死の 壓迫を 七八分——
それを 出てから、例の 流れ出た おほ岩 その 高さ
拾間 ほどのが、川でも 深い おほ川跡 の 眞ん中に、
或 神社の 流れ出た のと もろとも、
ころがつて ゐるのが 見える——やツばし、死の 遺物！
八王子へ 来てから 生き返つた 様な 氣がする——
死の おそれは なくなつて、僕の からだの 節々に
いのちの 氣が 循環して 来て、
理想家に 段々 生きた 肉の にほひと あつたかみが してゐる。
戀よ、しーちゃんに 近づいた のだ！

驅けれ、汽車、速かに、
僕の むくろと たましひ とを 乗せて 驅けれ、
冷たい 死と 孤獨と を 離れて、
あつたかい 死と 孤獨 との 東京に、

町と 人家、人と 友人に 満ちた 寂しみに、
苦悶 苦悶の 生涯に、
肉と いのちの かをりある 死に、
肉靈合致の 孤獨に、
ああ、しーちゃんの ふところに！

一 片 草

戀のしやりからへ

戀のしやりからへ

樺太の雜感

一 汽 車

闇夜を 横切つて
東北の 廣野に 出た 汽車、
いつのまにか 僕は
青い 夜あけの けしきに 目ざめて ゐる。

光も 青い、野も 青い、
窓の がらすに 垂れる 夜露の 名残りも 青い。
自分の 吐く 息も 青い 様だ。
すると、僕には 大きな 青大将が
大地を のたくつて 行く あり様が 浮ぶ。

がッたん、がッたんの 音が 慣れツこに なつて、
疲れた 神経を ますく 鈍らしたの だらう、
餘り 耳さはり には ならず、
却つて それが、土地と 氣候の 變化に 添ふ
僕なる 物の 脈搏——身うちの 脈搏——の
冷ツこい のたくり としか おぼえられない。

僕は その ぬたくりで 進んで 来た、
闇夜と 追想と 多くの 山河とを 通り過ぎて 来た。
そして、その 疲労が さうした 色と 感じ とに 出たの だらう。
トンネルを 這入つて また トンネルを 抜ける とたん、
ふと 室内 を見れば、
昨夜來 話し合つて 来た 婦人客が、
これも 亦 青い 顔を して、眠つて ゐる。

『もしく、あなたの降りる場所が来ましたよ』と、呼び起してやるさへ不快な程の顔つきだが、さて、その女が身づくろひして降りるとなると、僕の脈搏がそれだけ減ずる様な気がした。

二 乗り込み

海上に合唱の聲が聴える、僕の解はそれを目がけて進むのだ。

夜の海上はうす氣味が悪い、自分はどこへつれて行かれるのか、聲ばかりを追ふて海妖の國に至る様だ。

碇船の帆船や、大小の汽船やの間を縫つて、船の音がぎうくと進んで行く。どこまでそれが行くのか？

ただ合唱の聲が赤い舷燈のあがるところから聴えるのが分つて来た。

『高砂丸、お客さんだよ。』—『おう。』

そして、浪の光をたよりに僕は無言で巖丈なタラプをのぼつて行き、薄暗い客室に下だると、急にむツとする臭ひだ。

そして、例の合唱は

戀のしやりかうべ

自分の 胸から 響く のに 思はれる。
初めは ただ わア〜 云つてゐる ので あつたが、
よく 聴くと、

段々 秩序が ついて 来る。

コラサア とも 聴えるし、

ヤレコラサア とも 云つてる 様だし、

また ドツコイシヨ とも 響く。

コラサアは 一二名の 聲だが、

ドツコイシヨは 多くの ものが 出すらしい。

順序づけると、

コラサアと 低く 出て、

ヤレコラサアノ で あがり、

ドツコイシヨと 非常な 力が 這入る

それを 繰り返して、

船底から 荷物を 出して ゐるのだ。

コラサアで 引きずつて 来て、

ヤレコラサアノ ドツコイシヨで 荷口へ あげる。

重い物は 急激に、

長い物には ゆっくりした 合唱だ。

ヤ、レ、コ、ラ、サアノ、ドツ、コイ、シヨノ と云ふ ゆつたり

した 聲で

細長い 材木が 出るのを見て ゐた 時、ふと 氣が 附いたの だが、

荷口に また 一人 ゐて、

出た荷を 悠長に 數へながら、

ヒト、フター、ミイ、ヨー と、そとの 舳に 渡してゐる。

そして、再び、コラサが 重さうに 出ると、

ヤレコラサアノ、ドツコイシヨ といふ 強力な 響に

戀のしやりかうべ

ヒト、フター、ミイといふ 悠長な 聲が 却つて 反對の 大調和を 保つのだ。

それが、聴き 且 見てゐる。僕の 心に、
そのまま しみ込んで、離れ難く なつて 来た頃、

合唱隊は 別々に 分れて、
亡者の 如く、おなく なつて しまつた。

急に 寂しく なつた 船室には、

僕 一人——乗り合ひ客は まだ 来ない。

小さい 窓 から のぞくと。

小樽の 街の、あかりが 心細く 見える ばかりで、

樺太 までの 航海が

僕には おぼつかない 様な 氣に なつた。

そして、胸には、なほ、

ヤレコラサアの 合唱が 賑やかに 響いてゐる。

三 罐詰製造所

廣い 板圍ひの 家だが、

ぴか／＼ 光る 丸罐の つみ重ねを 除いては、

ほかに 何にも ないと 云へよう。

がらん洞の 家に がらん洞の 丸罐が 澤山 積んで あつて、

それに 蓋づける ものも むれば、

指を 脹らして ニスを 塗つてゐる ものも ゐる。

その そばの 大きな ゆで釜には、

百四五十度の 熱湯が 煮え滾つて ゐて、

職人頭は そこから 重い 罐を 一つ宛

戀のしやりかうべ

取り出しては、おれの 手加減を 見ると 云はない ばかり、
うまく ガス抜きを やる。

由さんが、鼻唄を 歌ひながら、さきに 立つて、
五尺 六尺に 餘る 蟹を 澤山 運び込んで 來ると、

『さア、事だ』と 云ふ 勢ひで、皆の ものが
急がしい 手を 一層 急がしく 使ひ出す。

そして、由さんは、他の 人々が ふと ニス塗りの 手を 休めて
煙草でも 吹かして ゐるのを 見ると、直ぐ

眞ッ赤に なつて 自分の 女房に 當り、

『この 婆々アめ、何を うツかりして ヤアがる』と ど鳴りつける。

女房は それと 知らない から 反抗する、つかみ合ひに なる。

その 結果は、お互ひの のしり合ひが やかましくなるが、

それだけ 却つて 仕事の 手は 進んで 行く。

罐の 蓋を つける もの、ニスを 塗る もの、

蟹の 皮を 剥くもの、身を 洗ふ もの、

罐を 煮る もの、あげる もの、――

急がしい 時は 二日でも、三日でも、

徹夜を して 碌々 眠る ひまも ない。

風呂の 立たない 海岸の 村で ある から、皆

鯨釜に 湯を 沸かして 這入るの だが、

一週に 一回ぐらゐ では、からだの 蟹くさいのが 落ちる 時がない。

皆が皆、湯を 沸かさないうで、しらみを 湧かして ゐる。

然し、それが

人の 支配の 報酬を もたらすの だから 面白い。

或夜 一度、僕は 自分の 製造所に とまつて 見たが、

戀のしやりかうべ

氣味の悪いと思ふしらみが
夢に僕の頸すぢへのぼつて来たので、
それをふり拂ふと、
小指 ほどもあつたかと惜まれた。

四矛 漁

ゆたかに流れるニストル川、
その中流に浮ぶ丸木舟の
眞ん中に一人の老人―目が窪んで、
濃い眉は迫り、
頬髯、口髯の長い―が立つて、
椴松の皓々たるかがり火を高くかかげてゐると、
舳艫におのゝ一名のアイノが、
鉤つき矛をさかしまにかまへて、

一心不亂、

水中を見つめてゐる。

やみ夜だが、
澄み切つた水の中には、
周囲の森林と共に、
火に映じた紅魚が三つ、四つ、
反れ矢の如くひらめいてゐるのを、
舳さきのアイノが刺し損ふと、
舳べのアイノがつき刺す。
ともべのアイノがつき損じると、
へさきのアイノがぐざと貫く。

その早わざが紅魚のひらめきよりも勝つて来たのを見て、
髯の老人はうちほほゑみ、

戀のしやりかうべ

先づ『それで よし』と 聲を かけた。
すると、二名の アイノは ほつと 一と息 して、
おそろく 額の 汗を ふいた。
二名とも まだ 無言だ。

老人の 黙令に 従ひ、
舟を 草深い 岸に つけると、
渠は ひらり 飛び下りて、
まだ 權を 握つてゐる 二名に 向つて 云ふ様、
『われは トンチ 最後の 末、
今、なんぢ等に 名残り として
矛漁の 秘術を 授けた』と。

身を 轉じて、渠は
その脊 よりも 高い 路の葉、

ヤチ芭蕉の 葉かげに 消え失せて しまつた。

そして この 紅魚捕獲の 秘術が アイノ人の 間に 傳はつた ので
ある。

五めの子

ああ、アイノ娘、ちひさい めの子よ。
かの 敗殘人種、劣等種族 の 間からも、
なんぢ の 様な 美人が 生れたのか？
おほ路、ヤチ芭蕉、とくさ、高よもぎ の 間から サク の 花の 一と
莖が つき出た 如く、
七月あやめ が 高原 一面に しめり氣ある 根を はびこらして、
紫の 花の 咲き亂れた その間 から 黄色野百合 が 一もと 顔を
あげた 如く、

なんぢは アイノ人の 間 から 生れたのか？

父は 幸ひにして 肺結核に 犯されて ゐなかつた の だらう。

母は 不幸中 の 幸福にも 優等人種 の 梅毒を 受けて ゐなかつた

の だらう。

そして、なんぢは、幸中の 不幸にして、

狼の 如き 人種の 犠牲に なるのが 運命 だらう。

不思議な めの子よ、なんぢは

口端に 入れ墨も なく、髪も 結んで ゐるから、

鉢巻の ヘトマエを しないのを 誇りと するだらうが、

それが 却つて なんぢの 不幸を 來たす もとゐるとは 知つてゐま

い？

腰に つるした マキリの から鞆に

やがて なんぢは 身を 入れようと するであらう、

その 戀の 理想は シヤモ 日本人――

一に 番屋の 親かた、二に その 帳場、

三に 船頭、四は 人さきに 立つ 若いもの。

よしんば、それが 一時 叶つた とて、

永續する ものとは 思へまい？

下つて、兵士や 漁師に 移れば、

もう、それが 廢滅の 前兆だ。

『シヤモ 行く』時、

なんぢの 氣は 既に

おそるべき 病毒を 吸つて しまつたのだ。

そして、その毒は

なんぢの しなやかな からだを 腐蝕させ、

なんぢの 皮膚を 侵害し、

なんぢの 骨ぐみを うち崩し、

戀のしやりかうべ

なんぢの 子を 結核、奇形、盲目にし、
なんぢの 子孫の 破滅を 速める ので ある。

ああ、劣等人種の めの子よ、

ああ、なんぢ、アイノ人の 小娘！

なんぢは いつまでも 熊の 如く

人情を 解しないなら 幸福 だろろうに！

手に 持つ 花、黄 並に 紫を 問はれて、

『ゆりに あやめ——』

伊さまに あげる ので あります』と 答ふ。

ゆりに 梅毒、あやめに 結核、

ああ、敗残劣等 の 家庭にも、

一時の 樂みは 宿るの だらうか？

六 焼損林

山火事の あつた 古い 跡だ、

さいはひにして、

風が 上向きに 吹いたの だらう、

榎松や 蝦夷松 の 上半は 焼け失せて、

下半は 幹 ばかりが すべて

白い しやりかうべの 様に つつ立つて ゐる。

その骨、その幹も 亦

長年の 風雨に さらされ、

手が 觸れば 直ぐ 崩れる 程に なつて ゐるから、

再び 火が 見舞ふと、

それらを 取り捲く 榛の木や 熊笹と 一緒に、

戀のしやりかうべ

燃えるのは、わけも ない。

樺太の 山火事は 人為 ばかりでなく、燐によつて
獨り手に 發する ことがある。

それが 數千町歩、數萬町歩を 焼き拂ふ には、
一冬を 越える のは 勿論

二冬、三冬に 渡つた 歴史も ある。

そして、その 勢ひが した這ひに になると、

地下 三尺も 四尺も 焼け込んで、

積雪の 壓迫を 事とも せず、

翌年 までも 越年しつゝ 燃えるのだ。

燐を 多量に 含む 木炭質、

木の葉や 枯れ枝の 堆積に 過ぎない 太古の ままの 土、

而も、焼損林 中の 熊笹の 間だ――

石も ない、眞土も ない、

人の 通る 道も ない。

こんな 山なかの

ぼくぼくした 木炭土を 踏んで、

盛夏の 日光を 受けると 僕は、もう、

内地人の 知らない 火に 包まれてゐる 様だ。

七 眞赤な太陽

單調子な 樺太の 海岸に 獨り

立つて 考へて ゐると、

夕かたの 浪さへ 僕を 招いて 呉れない。

後ろの 草山には、無言で ガスが かよつてしまふ。

目の前 には、靜かな 海が 廣がつて、

矢ッ張り、ガスの 中に 隠れて 行く。

戀のしやりかうべ

そこに、光線を 剥ぎ取られた 太陽が
眞ッ赤な 色を して、
浅い べに茶碗を 浮べて ゐる。

接吻！ といふ ことが 思ひ出されたが、
僕は 愛する 婦人に 遠ざかつて 来て、
その 愛婦に 棄てられた 様に 寂しく なつた。

ハブシの花

ブシの 花は 綺麗な 蝶の 如く
咲いた 色が 紫だが、
その根に おそるべき 毒を 含む。
知らぬ 人は 折つて 花瓶に 挿すが、
知つたら、直ぐ それを 棄てる。

僕に 一人の 愛が ある。
毒婦の 性根を あらはして、
僕の 留守に 僕を 去つたと 考へる。
然し、それが 爲めに、僕は 獨り
いよく ますく 身に 泌む 愛を おぼへる。

九何の爲めに僕

何の 爲めに、僕、
樺太へ 来たのか 分らない。
蟹の 罐詰、何だ それが？
酒と 女、これも 何だ？

東京を 去り、友達に 遠ざかり、

戀のしやりかうべ

愛婦と 離れ、文學的 努力を 忘れ、
握り得たのは 金でもない。

ただ 僕 自身の 力、

これが 思ふ 様に 動いて ゐない タベには、

單調子な 樺太の 海へ

僕の 身も 腹わたも 投げて しまひたく なる。

十 マオカのゆふべ

僕は 袷せに 袷せ羽織

そして、出て来た 藝者は 單衣に 夏帯――

熱い 様な、寒い 様な、

分つてゐる 様な、ゐない 様な

物足りない 歌と 三味と 酒と 洒落とに、

マオカ の ゆふべの お座敷は 暮れ―― しまつた。

札幌の印象

古い 京都の それ よりは 一層 正しく、

東西南北に 確實な 井桁（市の 動脈）を 打ち重ねた 北海の 首府――

石狩原野 の 大開墾地に 圍まれて、

六萬の 人口を 抱擁する 札幌の 市街――

住民は 凡て 必らずしも 活動して ゐるでは ないが、

多くは 自己 一代の 努力に 由つて その家を 建てた ものだ。

然し 渠等の 目に 映するのは、ただ

焼け残つた 赤練瓦 の 道廳、

開拓紀念に 最も 好箇な 農科大學、

いつも 高い 煙突の 煙を 以つて 北地を 睥睨 する 札幌ビール

工場、製麻會社、

戀のしやりかうべ

石造の 拓殖銀行、青白く 日光の 反射する 區立病院、
大通り 散策地の 諸銅像、北海タイムス、中島の 遊園、
北一條の 停車場、南一、二條の 繁榮、狸小路、遊廓、
（それらの 物には、すべて、内地から 入り込んだ 放浪者の
珍らしむ 價値は 殆ど なからうでは ないか？）

放浪者は 寧ろ その他に 注意する ものが ある、

積雪に 堪へる 様に 造つた 平家の 棟つづき、

停車場通り の アカシヤ街、

枝葉は 幹に 添つて 箒の 如く 空天に 逆立つ 白楊樹（内地で 云

へば、いてふの 格）

開拓者が ところどころ 道に 切り残した アカダモ（ハル楡）の 大木、

道ばたに 植ゑ並べた イタヤもみぢの 繁り。

これらが、—— 繁華な 町通りには ある わで ないが——影の 如く、

いつも 行く者の 心に つき添つて 離れない 脈搏の 井桁、それを

縫つて、

田夫 または 田婦が、馬の脊に 乗せた 青物（茄子、胡瓜、西瓜、

キヤベツ、玉ねぎ、西洋かぼちゃ、栗、くるみ、林檎、

唐もろこし、または、大根）を。呼び賣りして まはる のだ。

（放浪者 には、その 百姓馬子の 呼び賣りが 最も 意味深く

新開地 の 市街を 摘出する 様に 思はれた。）

渠、百姓馬子は 速かに 變遷する 季節を

この 靜かな 蔭の多い、外國じみた 市街に 送り込む 神の 様だ。

渠の 荷に 胡瓜、甜瓜、茄子 の 多い ときは まだ 初めだが、

短かい 夏は やがて 栗、くるみ、ココアに 變じ、

おびただしい 唐もろこし や 林檎が 甚だ 少くなる と、直ぐ、

漬け大根 の 洗はれた のが 至るところ の 家根や 木々に かかる。

また 別に、放浪者の 目に 付いたのは、町の 角に こん爐を 持ち

戀のしやりからへ

出し、

簡単に 唐もろこしを 焼いて 賣る ものが 多かつた ことだ。
その 店の 一つを 僕は 非常に なつかしく おもつた——
と云ふ のは、僕の ふらり 外出する たんびに 目に 觸れる からで、
葉の 大きな イタヤもみぢの 太い 根もとに、

晴天 なら 勿論、雨天 でも、根氣よく、店を 張つてゐるのだ。

暑いにも 拘らず、こん爐の 火が かんかん おこつて ゐると、

その上に かけた もろこしの 實は ぶすく はじけつつ、

如何にも その いい にほひが して ゐる 限り、札幌は、

僕の 心に 親しみが あつて、

きのふも、けふも、

放浪者の 酒と 女と（生の 價値も そこに 見えると 思はれた）の

あぢを 途切らせなかつた。

或夜、（銅像も 見えない、白楊樹の 影も 見えない、

銀行、道廳、ビール會社、停車場 なども 見えない ほど、

雨あがりの ガス深い、しめツぽい 夜で あつた、僕は 獨り、

ほろ酔ひ機嫌で、今 別れた 女の 追ひ分け節を 繰り返しつつ

やつて 來ると、向ふに、一つ カンテラの 光りらしいのが 見える。

それが 例の 店で、（然し いつも とは 違つて、）

おやぢは 寒さうに 爐火に しがみついて ゐるから、

『おそくまで よく かせぐ、ね』と 初めて 聲を かけて やると、

『へい』と 渠は 叮嚀に あたまを 下げた が、さも 馴れ馴れし

さうに、

『いつも 上機嫌で、旦那は 御結構です。』

然し その おやぢと 言葉を かはしたのは、あとにも さきにも
それツ切りで、

僕が 孤獨の 放浪に 耽醉して ゐる うちに 天長節が 來た。

いつのまにか 渠の 店は 出なく なつて ゐるし、

戀のしやりかうべ

市中を 歩きまはつても、青物を 積んだ 馬にも 出會はなくなつた。

そして、變色に おそい イタヤもみぢも 紅葉し、

大根は 既に 女郎屋の、ガラス戸で 圍んだ 長廊下に

多く 並んだ おほ樽に 漬けられたの を 見た時、

市街にも、遠い 山山と 同様、白い物が 積り出した。

そして、また 僕は、親しみの 深くなつた 札幌から、

舅の 好かない 婿養子の 如く 追ひ出されて しまつた――

樺太の 事業 との 聯絡も 全く 絶えて――

金も 無く、寒さを よける 外套も 無く、――

東京 から 偶々 追ツかけて 來た 腐れ女 と 一緒に！

闇の盃盤補遺

無言妖女

夢の あや絹、裾の さばき、

枕もとなる 人の けはひ、

優に あたかき かをり――誰ぞや、

かろく わが身の 胸に やさ手。

聲も 顫えて、『君よ、曉の

鐘は 鳴りぬ』と 青き ゑがほ。

ゆるむ 節々 答へ 得せず、

おもき かしらに またも ねむり、

あはれ、もも度、ももの 戀の

戀のしやりからべ

甘き 口づけ 得なば、ここに、
死をも 招きて 死にも 受けん。

春の あかつき、床の ぬくみ、
抜けて うれひに 醒めん。よりも、
とはに いだかん 無言妖女。

土のほひ

君と 二たび、三たび、四たび、
むだの 口つけ、むだの 握手。
無言すがた は にほひ紅の
燃ゆる 火にこそ 溶けや しけめ、
黒き うらみよ、二つ胸に
リデル ゴノサン 物を 云ひぬ。

君し 今なほ 慣れぬ 出で湯、
同じ やまひの 脈を ぬくめ、
あつき 湯けむの かげに 立ちて、
丈の 黒がみ 思ひ 長く
すずし 櫛巻き 巻きつ あらん。

戀や、くちばみ、朽ちて 夢に
土の にほひと そほち 行けど、
君と われとは またも 會はじ。

冬の夜

高臺 沈む
やみ夜の おほ空に、
戀のしやりかうべ

いや遠長く

電車 の ひびき 消ゆ、

今 袖 分けし の 身

世と しも おもほえず、

とて世 の 無言 むごん の 身 み

身にこそ 泌 しみみ渡れ、

まなこの 酔ひは

人をし 浮ぶれど、

冬の夜 ふけて、

わが身は やみの底、

踏む 霜ばしら

さくさく 胸 刻 きざみ、

冴え行く 戀 や

ほのほ の 道 ひとつ。

家根の小露

濕 じりの 山 の

みどりを すくひ取り、

飛びかふ つばめ

それを か ふり撒 まける。

葺 ふき萱 か きらり、

家根 には むら蝿 —

晝 なり、雨 の

過ぎにし 置き土産 みやげ。

無のしやりかうべ

あたかも、倉の

小暗き板じきに、

散らけて まろぶ

珍らの古寶玉。

白きは青く、

青きはまた赤に、

黒める家根を

しぼりて 照り出づる。

その色 強し、

電氣のかよひ路や、

まばらに 光る

小露は 燃えんとす。

ああ、その 小露、

燃え来て また 消ゆる。

短き魂の

きほひや、この 晴れ間。

君ごわれ

若き 血 あらば 戀を 戀ひよ、

そこに 不老も 不死も あらん。

花の 乙女は 老ゆる 早く、

春は 白手を取れる ひまぞ。

相も いだけば、夢は 湧き、

熱き いのちを かをる 樹かけ。

戀のしやりからべ

君とわれとは うつら、うつら、
とはのねむりに 溶とくる 如し。

春のゆふべのいとも 甘あまく、
君とわれとは 溶くる 如し。

君とわれとは 溶くる 如し。
君とわれとは 溶くる 如し。

昔の昔

昔の昔、昔の昔、昔の昔。

昔の昔、昔の昔。

昔の昔、昔の昔。

昔の昔、昔の昔。

昔の昔、昔の昔。

昔の昔、昔の昔。

昔の昔、昔の昔。

昔の昔、昔の昔。

昔の昔、昔の昔。

最近の作

最近の作、最近の作。

カンナの赤い一輪

赤い 口びるの 接吻には、
百年も 千年も 問題では なかつた。
人生も 自然も 全く 融けてしまつて、
嗜慾の 焼ける 夢、
それが きのふ からの 現實で あつた。
だらりと 延べた からだ、
それに あり餘るのは

曾て 求め得よう とした 黄金の 光。
飽きに 飽きたのは、
既に 求め得た と思ふ 自己の 名譽。
そして、その光も 名譽も
亦 問題では なかつた。

おのれの そばに
おのれの 汗ばんだ 疲勞を 横たへた 影、
それを 見るだに、もう、
珍らしくも ない 夜の 勝利品！

一人しか 愛は ない——
その愛を さへ 返り見ないで、
僕は 僕と 共に 目が さめかけた
明け方の 蚊屋を 出て、

最近の作

人工的なにほひと 色彩との
ちらかつてる 小部屋の 雨戸を一枚
物静かに くり明けた。

狭い 垣根の 中に、青々と

露を 帯びた くさ木の あひだを、

ばつと 燃える やうな カンナの 大輪が 一つ、

寝ぼけた まなこに、

ゆふべ からの 情愛を 再現した。

『もう、澤山』と 思つたが、

涼しい 朝風に、

この 夜もすがら 置いてゐた 夜露を

初めて 胸 一杯に 吸ひ込んだ。

——(大正元年八月)——

浅草の女

敏ちゃん、夜ッて 暗いもの、

電氣がある「ぢやアないの？」と、

活動寫真で 賑やかな 通り なんて、

公晝間よりやア あかるいでしょ。

田舎者や 間抜けづらの 間を 縫つて、

對あなたと 手を引いて、歩いてると、

電氣の 光で 太陽 よりも 陽氣に

あなたのお顔ばかりが 輝くわ。

最近の作

ゆふべ だつても、夜更けて から あなたと
あたしの 店さきで 羽根を ついて 見せた、わ、ね。

それに、あの 書生ツボが また 生意氣にも 手紙を よこし、
僕の 心は、夜よりも 暗いつて、さ！

馬鹿、ね。人と 電氣の 都 だわ、——淺草の
公園に のぼる 月を 見ると、

月 さへも あかがねの 色に 鈍つて、とても、
あなたの 胸には 及びツことが ないわ、ね。

あたしの 太陽に 逢へない から あたし、晝間は
いつも 悲しくつて、暗いんだ もの！

人は 夜 だけ なら いいのに、ね、
電氣と あなたが あつて、陽氣で。

——(大正四年一月)——

犬の聲

わん／＼、わんと
うちの 犬の 聲が 聽えて ゐた——
その 聲に 僕は 親しみを 懷いて、今、
有樂町の 事務所で 仕事 最中 だつた。

事務テブル の 上には
深い 霧が かかつて、濛々と
さへぎつてた のは 僕の 視線 をだ。
その 癖、太陽が
僕の 頭上に 輝いて、

最近の作

僕の腹の中までが明るかつた。
僕は 智策を めぐらして
事務上の 命令を いくつも 發し、
訪問客に 對しては また
それぞれ 適當な 應答を して、
新妻を 喜ばせる この 事業發展の
報告材料を 胸に 浮べた。

が、わんく、わんと
うちの 犬の 聲が 聽えて ゐた。
その聲の うへを 濛々たる 靄が 立ち籠めて、
僕の 視線は さへぎられて ゐた。

空想 ではないか、
晝の夢 ではと 僕は 疑つた、

太陽の方か？ 然らざれば、かの
妻が 可愛がつてる 犬の 聲か？

わんく、わんの 深靄——
そして、赫々たる 太陽！

僕は 不思議で たまらなかつたが、
その ゆふがた、社が 引けて から、
山の手線を 目黒で 降りた時、
その 一名物 たる
海と 山との 混合靄が
可なり 深い 谷あひを 閉ぢ籠めて
僕等の 家の 沈んでる
方向 さへも 分らなかつた。

その底から、

うちの犬の聲が聴えたやうだ、

わん／＼、わん／＼——これだ、なと思ひ、

僕はそれに引かれて、目黒坂を

何よりも親しい氣持ちで、下りて行つた。

僕、そして、妻と犬とに迎へられたが、

なほ僕の頭上には

赫赫たる太陽が輝いてゐた。

そして、うちの犬の聲が、

吠えてもゐないのに、

わん／＼、わんと聴えてゐた。

——(大正四年二月)——

監獄の壁

朝から、僕は

監獄の壁を見てゐる。

夜になつても、亦、

監獄の赤い壁だ。

あまり廣がりの大きな壁を、

あまりに長い間のことで、あるので、

僕には、その壁が

巢鴨中に延び、

また東京中に渡つて、

赤いものであるかの印象を與へた。

そしてその赤い色は

僕のからだをめぐる血、

それを塗りこくつたやうに思へる。

市中で 安直に 販賣する 道德には、
 高價な 血は 調合されて ないが、
 巢鴨の 監獄に 閉ぢ込められた 不道德には、
 野心や 嫉妬や 窮迫 から 來た 眞珠の やうな 眞相が 輝く。

僕も その 壁に 向つて、
 或時は 泥棒——或時は 人殺し——
 また 或時は 強姦、詐欺、
 偽造等 の 夢を 見て から、
 巢鴨は 僕の 世界で あり。
 監獄の 壁は 僕の 皮膚、
 僕の 胸廓で ある ことが 分つた。
 そして、朝 から 僕は
 監獄の 壁を 見て ゐる。

夜になつても 亦、
 監獄の 赤い 壁だ。

——(大正四年二月)——

朽ち行く女

嚇々たる 太陽の 中を、
 こら、汝、淫婦よ(女にして
 淫婦ならぬ ものが あらうか?)
 絹布を 着て
 ぬかるみ ころがる 淫婦よ、
 それか 女が 産んだ 女の 本性は?

ぬかるみ の 中にこそ
 却つて まことの 靈も 輝くを、
 分離して 最も 親しく

最近の作

思ひ知つたか (然し、既に遅い!)
みだらな合致の而も誠實な征服に?

いのちの残る限り

ころがるだけころがれ!

その裾から出る汝の裸體よ、

—恨み、怒り、復讐の念—

悔いるだけ、もがくだけ、

汝の内容は

わが太陽に吸収さる。

太陽の使ひか、見よ、

どろにまみれて生きながら朽ち行く

汝の白いかた足をつかんで、

三足の鳥が汝に向けてるのは

肉じきの口ばしをだ!

征服の光りに感謝せよ。

僕もこれほど

汝に親しんだことはない。

斯くもかがやかしく

汝が朽ち行けば行く程、

僕に満ちるは一しほ誠實の力。

—(大正五年二月)—

するせん道化者

つつしみ深い道化者か、なんぢ、

わざ／＼太陽のひかりの薄い時節に

世界で最も日かげなとこの間の

つめたい水盤のなかに獨りで寂しいほほゑみ?

最近の作

誰れ だつて 求めように 名譽 と 競争 と の 熱天 を！
 誰れ だつて おもしろからうに 奮闘 と 成敗 と の 日なた は！
 誰れ だつて、あたり前の 社會 は！ 然し 汝 だけは 全く、
 へうきんにも 生れどき、生れ場所 を 違へて、云はば 随分、
 見よ、被造物 の 色 と しても 香 と しても、
 廣い 世の中 に 不愉快 窮屈な 位置 を 占め——
 内部は 赤く 熱してる だらう が それを 見せぬ 木瓜 の 花か、
 それとも 心ちう には 最も 派手に 棚引く 東臺 萬朶 の 雲を
 おもて向き
 不遇 に して——但し、消極的に 高尚がつた 隱者 ではない。

なんぢ、つめたい 水盤 の なかの すゐせん、
 一生 の なみだ をか ここに 獨りで その 香に ほほゑむ 道化者
 よ！

——(大正五年・月)——

蜜蜂の靈よ

蜜蜂 の 靈よ、——人間 だつて、
 死後は 何も ないのに——まア、ある と してだ、
 お前に おれの 弔詞を 述べさせて 貰はう。

おれが お前を 熱心に 飼育 したのは、何も、
 女房 の 贅澤費 を 拵へる 爲めでは なかつた、
 否、女房 の 好きな 一存で
 あの男 に 渡させる 爲めでは なほ 更らだ。
 ところが、お前を 下手に 預つて 飼ひ 殺した 男は
 ——ちゃん ちやら、をかしい！——
 それを 正義 だとか、人道 の 爲め とか云つて 來た
 獨逸 や アメリカ の 耶蘇 よりも 一層 尤もらしい。

最近の作

然しまだ お前は仕合せで あつた。
 あの男は 今や お前の かはりに
 おれの 子を取ら込んで、
 無邪 幼稚 の 人間を まで 飼ひ 殺しに する爲め、
 おれを 逆ねちに 訴へ ようと してゐる。

——(大正五年四月)——

兎の憤激

鼻ほくろの 哲學者よ、あまり
 主人がほに われを 無言だと 見て、
 汝の 偽善を 取り繕らふ 手段に すな。

汝は、然し、燕の 留守に 燕の 巢に 這入り、
 夜の 十二時 過ぎ までも 話し込み、

早く 歸れよ がしに 取り 扱はれても、なほ
 それを 自分に 對する 尊敬 と 思ふ ほど、
 それ ほど 自信 の 深い 好人物 だ。

汝の 姪に 子を 生ませて、それが
 既に 二十歳 前後に なつてる とも 云はれるのに、
 今 なほ 四十二三歳の 友人に 一つ うへだ と云つて、
 汝は 尤もらしく

汝の 五十づらの 皺を 鼻ほくろの 上に 寄せた。
 そして 一たび 汝を 『先生』 と 呼んだ 若者は、
 汝から 第一流の 批評家 として 世に 紹介された。

既に お弟子 も あり、自信も あり、
 奇蹟の 子も あり、神秘 の ほくろも ある 汝の 羅曼主義、
 功利主義 折衷の 哲學 では あるが、

最近の 作

内容にはなほ物足りぬところがあると見えて、
——それも、出来そくなひの獨身者としては尤もだが、——
兎角、汝は人の亭主の
明き巢をねらひたがる！

人の見限つた女を、でも、この度また、
欲しければ貰つてやつてもいい。
まだ然し籍がぬけないのに、
わざ／＼離婚訴訟の渦中に飛び込んで、
その女の旅さき府中までも追ひ行き、
女の家へは行きたくないからだと惚けがほ。
そして、實は、どうだ？ 探偵の報告に據ると、
『田中十無』に婦人のやうな聲を出させて、
たび／＼ほくろの鼻のツそり
女の門に入れるのは、いつも

午後九時過ぎからである。

汝、うすのろの哲學者よ。

『世間の交際がうるさいから
兎でも飼つて』と、よくも、よくも、

汝の無内容と頓痴氣とを韜晦する爲め、

無言の動物とあなどつて

主人がほにわれを踏み臺にした！

——(大正五年八月)——

生活の寂しみ

『棄てたツて、また歸つて来るよ』

と、七歳の子は不平さうに獨り言を云つた。

渠の愛してゐるエスを僕は、今、

三度目に——今度は僕自身で——棄てて行くのだ、

最近の作

『なアに、もう、歸つて 來やア しない！』

かあい さうだが 仕かたがない——

近處の 店の 煮えくさしの おそば や

なま魚の 腹わた なぞを 喰はせられた 爲めに、

育ち盛りを 成長したのは 兩方の 耳ばかり——

兄弟並みの 半分 しか 延びぬ からだに

ほそい あばら骨を 刻み付けて、

どす赤い うんこを——たまつた もの では 無い——

臺どころ先き や

折角 冬取り大根の 種を 播いた

門内の 畑や に 仕散らかす のだ もの。

人に 見られても 見ツともない 犬だと 云ふので、

僕は——日が 暮れて から——

エスに 貳拾錢の 運賃を 拂つて、

山の手線 を 巢鴨 から うぐひす谷 に 下りた。

そして 坂したの 電信ばしら に

わざと 切れ易い ひもを 以つて つながが 早いか、

逃げる やうに

僕は 坂を あがつて 行つた ところ、

あとを 慕つて——さも 一杯に らしい——

あはれに 泣く その きやん／＼が

僕の 兩あしに まとひ付いて 困つた。

つき當りの 公番まへ を、何だか、

叱からは しないか と云ふ 氣持ちで 曲り、

竹の臺の 廣い 眞ツ直ぐな 道へ 出ると、

ガスの 光りを 籠めた 樹木の 暗い 蔭が

兩がは から おツかぶさつて 來ながらも、

最近の作

なほ それに 包み切れぬ 眞中の 地上は

——それを 踏む 僕には——

向き出しの おそれ であり、

また 新らしい 思ひ切り の 力で あつた。

追ッかけて 来る 小い 黒い 影が ないかと、

一、二度は——ぞつと しながら——

敵か をんりやう かを 豫期して

後ろの 方を ふり返つても 見たが、

三度 四度は 何でも なかつた。

上野の 廣小路から

市内電車 で 歸つて 来た 時は、

七歳の 子は 何も 云はなかつた。然し、

少し 経てから 兄ども と 語るのが 僕に 聽えた、

『お父さん が 歸つた から、もう、

エスも しつぽ を 振つて 歸り さうな ものだ』と。

僕は ふと 僕の ふる傷 を 思ひ出した、

そして 『どう だらう

今 一度 この 三人の 子らを 棄てて 出たら？』

但し、あの時にも、僕が 純全に 生きる 必要上、

僕の 家庭 と 情愛と を 犠牲に した。

そして 今回 また エスを 棄てた のも

あかい 粗相を 仕散らかす 爲め、否、否、

折角 芽の 出て来た 大根畑 を きたなく する 爲めだ！

——(大正五年十月)——

ラザロの姉妹マルタ

妻も、友人も、はた 仕事も、

すべて 僕に 手ごたへ を 失つて、

最近の 作

生活せいかつの寂さびしみを最も深く感じた時、
癩病しかびんラザロの姉妹マルタよ、
姉らしく立ち働らく透きとほつた肌のマルタ、
僕は思ひ出す汝きぬのきぬ一重ひとへ、
はだかも同様どうじやう正直な焼き持ちを。

汝の利口な妹マリアがいつも、
抜けがけして耶蘇やそにはんべり、
くつろぐ耶蘇の足に塗つたナダル油なだるあぶらを、
自分の房ふさぐ々した髪の毛でぬぐひ取り、
室内しやうに廣がるかをりに押し忍しのんだのは、
信まことも愛だ、そして
愛はをんなには戀こひであるを！

透きとほる肌のマルタよ、

汝が歡迎きんげいの給事きよじに『心入り亂れ、』
主に近づいてナルダの満ちたかをりに胸むねを轟とどろかしつつ、
優しい目に見張つたのは汝きぬのきぬもぬげた恨み、
『主よ、何とも思はざるか、わが妹
われを獨り残して働かしむるを』と。
憎いほど向き出した心のとろけ！
みだらな夜中やちゆうでなかつたのが、否、夜中の握手を
得なかつたのが汝一生の不合せだ。
唐變木たうへんぎ耶蘇はこの時にも
『マリアは既に善業ぜんごうを選びたり』の道學だうがくを説いた。
叶はぬ思ひは私かに敵を養ふと云ふが、
汝にはその後ごまでも歸依きえ心があつたか、どうか？
耶蘇の張り附けられた十字架じゆうじやうのもと、
また石を置かれた墓場はかばなどへ集つたもの等のうちには、

兎に角、

數名の マリア の 名は 書物に 出て ゐるが、
マルタ よ、汝の だけは 一つも 見えて ない！
歴史 その物も 既に 無だ。

が、僕は 汝の 行くを 思ひ出す たび 毎に、

——戀を 知らなかつた と云ふ 救世主 など どうでも いい——
ただ 寂しい 肉の ふるえを 覺えないでは ゐられない。

——(大正五年十二月)——

瀬戸の火鉢

あまりに 書齋が 寒いので、何も 考へば まとまらない。
筆を 投げた まま 獨り 僕は、
圓い 周圍が ふくらんで 行つて 中の方へ 突然
直角に 延びさがつた 火氣だもちの ある 瀬戸の おほ火鉢に
兩の 肱を かけて、

ふと 考へた こんな ことを——

なぜ 僕に 斯う 親しみが あるのだ、

火氣を 遠巻きに して 保つ だけの こんな 物が？

どうも、その 中に かた炭の

火がある 爲め ばかりでもない やうだ。

さきの 妻に 同じ 大きさの を 取られて から、

これも 二代目の だが、然し

前後の 妻 よりも 元來が つめたい

この 瀬戸に 僕の 心が 常に 引きつけられる！

しんかんと した 夜中を、

あたま から 落ちて

火中に 小さく 燃え焼ける ものは 何か？

これが、乃ち、多年の 習慣で、

最近の 作

知らず 識らず

僕の心を 火鉢に 引きつける もの だらう。

どこから とも なく

そら 炷き の くゆり か？ 否、 かんばしい

香水 の かわき行く にほひ か？ 否、 否、

もつと、 もつと なつかしい

人間 の 血 の 固まつた のを あぶり焼き！

氣が 付くと、

相變らず 僕は 肱を 火鉢 の ふちに 乗せた まま、

かゆい あたま から

両手で 頻りに 大きな ふけ を かき落し、 拂ひ落し、

その 焼ける にほひ を 嗅いで ゐる。

——(大正六年四月)——

森ヶ崎の朝

一三日のうちに、

新たに 親しみを 得た

古なじみの 森ヶ崎 である。

けふも、 自宅に ゐる よりは 早く 起きて

一あび した 鑛泉 の あつたかみ、

その 違つた 勢ひを 楽しみつゝ、 今、

定められた 二階 の 坐敷 に 坐わつて

そとを ながめて ゐると、

僕を 呼び起して 呉れた 鳩が 一つがひ

曲り出た うへの 家根 の はづれに とまつて ゐて、

くらくくと しめやかに 鳴いてる の だが、

最近の作

したの トタン家根 から
日なたぼツこの 猫が 一匹
それを 頻りに 氣にして 狙つてる。

登つた 日は 見えないが

右の方 から ゆつたりと その光 を さして、

正面の 海は

ぼうつと 一面に 靄で うづまつてる。

そこに 眞ツ白な

蒸汽船 の 姿が 遠く なり、

若しくは 小舟 の 帆かけ が

ちらほら なり 見えないと、

僕の心 は まだ 全く 白紙 の やうだ。

けれども、けふは 何となく

自分の おほ仕事 が できる 確信が あつた。

じつと ゐ坐つて

白紙 の やうな 海を 見つめると、

目に くつきり 立つてる

浪添ひ土手 の こればかり かけ離れた 一つ松、

その うへの 方から

帆かけ が そつと 現はれたが、

右へも 左りへも

夢ばかり だつて 動いて ゐない。

いつのまにか それへ

—— 左り からも 右 からも ——

数は 二つ なり 三つ なり

段々 寄つて 行く 同じ かげ、

すべて 光線を 横さまに 受けて

最近の作

こちらへは その 暗い うらを 見せて ゐる。
それらが 松の あたりを 目あて
すべて ごつちやに 重なり合つた ので、
多少 光ある とち霧のおもてを
黒ずんだ 灰色の 森が 浮んだ。

その 手前では、相變らず

つがひの 鳩が ぽつぽと 鳴いて、

おほ家根の はづれを 離れては また

直ぐ その はづれへ とまつて しまふ。

したなる だまり猫は 溜りかね

——家根の 傾斜を あやぶみ ながらも——

最後に 鳩の 飛びかけが見ると、

届きも しない のに

飛び付かう と したが やめた。

風は なく、

鐵瓶の 湯ばかりが ちんく 云つてる 森ヶ崎、

一月 十八日の 障子明けツ放しの 朝は、

——からだも いぢけないで——

僕が 筆を 取り初める 爲め

而も 引き締まつた 氣ぶんで あつた。

——(大正七年三月)——

外交政策

ヤンキイは ヤンキイだ、

ロスケは ロスケ たらしめよ。

僕が わが 國の 行ふべき

外交政策を おぼへたのは

市中を 走る 電車 の うへでだ。

最近の作

ふと居ねむりから覺めると、
反對の窓にもたれて

そとをながめてる小娘があつた。

不思議さうにその母を返り見て、

『おうちが皆あと戻りしてる！』

『何を云ひます』と、その母はたしなめた、

『電車が走つてるのですよ。』

蓋し進むとは置き去りにするのだ

動かぬものを、そしてまた

反對に進むものを！

——(大正七年四月)——

植る忘れた百合の赤芽

しつとり降る春さめにまんべんはない。

然し、その地をうるほす結果には

豫想通りのもあるし、また僕の意外なものも。

ひな菊は毎年のやうにその赤、白の小さな花を、

さくら草はまた相變らずそのちどれた

もえぎ色の短い葉を、そして

僕が或友に貰つた鐵砲ゆりは

そのうるほひあるかしらを出した庭に、

思ひも寄らなかつたのは、詰り、何とかゆりで。

去年の秋の末に——もう、すがれ時だつたが、——

人の留守を尋ねたしるしとして

この一根を買つて歸つたのだけれども、

その後向ふからさたがないので、僕の心には

人をもそれをも植る忘れてゐた。

まんべんなく降る春さめに今や

太い 赤い 芽が 二つ も 出てゐる のを 発見して、
僕は その人 を 思ひ出す と 同時に
その人 の 無挨拶 をも 許す 氣に なつた。
——(大正七年五月)——

胸の海

小さめが あがつた、平らかな 海に 小さめが——
のり取り舟 も たつた 一杯 だが、靜かに
自分の 目の前を 浅い すなご海 の うへ、
右 から 左りへ 軽く すべつて 行つた。

海 の あなた を 見渡す と
陸に 平行した みを を 示めす 立て木、
それに 而も 一定の 飛びくな 間隔 が あつて
人の 目を 少しも 妨げないで 見える 限り、

曇つた そらを
灰色 に 反映する しほ光り の そと輪 よ。
自分の 目を を ずつと 遠く
遠巻き に 巻く 多くの 帆かけ、
ぼんやり と 列なつて
動きも しないで ただ 一列の やうに 浮んで ゐる。

その 帆の 長い 列と 立て木 との あひだ を
左り から 右へ 無形の 一直線 を ゑがいて、
その うへを 四 五隻 の 汽船が
——一度に 兩方の 目で 見渡せぬ 程の 隔てを 置いて——
うすら黒い けむり を あげて ゐる 無言！

その 眞ん中 へ
下駄ばきで 乗り出た 自分は
傘と 共に 耳を すぼめて、ひそかに

最近の作

なんだか大きな聲、
いや、小さいがそこ深い叫びを
ただ自分ばかりが聴いてるやうなところ持ち。

その聲は、後ろの方で

小鳥がちゆうちゆく云ふそれでもない。

山谷の方ではまた

電車の音がするが、それでもない。

左りの沖べから鳴つた汽笛。

品川あたりの製造場から時を報ずるぶう、

どこからか響き聴えた子供の話し聲、

なんだらう若しそれらでもないとすれば？

いちめんにしめつた高石垣の、右手四五十間さきの鼻、

六郷川の川口をこの土堤と直角に

三枚帆の船がよこ帆で三杯も現はれて

順々に沖へ出たが、その船々の帆かけ

それがまた順々に自分の方へは

三本づつの帆ばしらとしか見えなくなつても

なほ自分の聴いてる聲はおもてへ出ないで

自分の身うちばかり内攻してゐる。

そしてどこまでも廣がつてる海

それはまことにじれつたいほど平らかで静かだ。

自分の突ツ立つ目の前なる森ヶ崎土堤よ

申しわけのやうに寄せる浪のひたく、

それが寧ろ今の自分に最も近しいやうだ。

いや、兵兒帯に挟んだ懐中時計のちくたく

その方が一層自分を近しく、どき付かせる！

さうだ、自分は傘をすぼめてから今まで

最近の作

——三枚帆は 段々と 三本の 帆柱ほしじに見えて 行つたが——
 この 広い 静かな 海べに 立つて、
 もつと、もつと 自分に 近い 或物を 待ちつつ
 自分の 胸を、さうだ！ 獨りで 浪なみうたせて ゐるので あつた。
 ——(大正八年一月)——

きりぎりす

門内かどうちの 小ばたけに
 胡瓜きゅうり や 茄子なすの 無くなつた 晩秋の ゆふべ、
 とまる ところを 求めて、きりぎりす
 ぽつねんと
 ——但し、饑ゑに 燃える 物乞ものこひ——
 玄關げんかんさきの 敷き石しきいしに 來て
 その ほのほも 細る 翡翠ひすいの 羽はふるひ、
 なほ 切れぎれに いのちを ちゃん—ちゃん—ぎい—！

敷き石のうへに きりぎりす、

つめたい石のうへに、

もう 飛ぶ ちからも 失うせて、ただ 獨り、

この 秋の 日を 消え行く 生せいに 對して、

その かすれた 聲は 然し 最後の 雄おとこだけ！

——(大正八年八月)——

日光

山は 高く、樹木じゆもくは 繁り、
 星あかりをも 黒くろめてる 日光にっこうに 來て、
 たま／＼ 天皇陛下てんかうてんげの
 おそばもとに 在る ありがたさよ、
 離宮りきゆうばかりは
 水氣みづきを 多分たぶんな 夜よぞらをも 照あらして、

最近さいきんの 作

白晝と輝く多数の電燭光！
 僕は沈黙考の窓に倚つて
 それに吸収せられ、
 それを吸収しつつ自分も亦、
 ありがたや、このちからが胸一杯
 日本的政道人道の福音を、
 さうだ、世界に宣揚する！

中禪寺湖

あけがたには濃いむらさきを、
 そしてゆふがたには黒すんだ
 藍を流す中禪寺の湖水よ。
 天に近く、
 四方の山々に持ち上げられてればこそ、

つき夜の頂きに放つ金色の光り
 男體、ふたら富士が威壓する
 三百餘尺の深さある重みをも、
 さうだ、この湖水は大きくたたへてる！
 そのただ中を僕は夜月に小ぶね
 ぼつねんと浮かんで、
 浪ばかりひたぐの静けさに
 天地の平均を呼び沸かす、自己の
 獨存合致の力を感得た。
 —(大正八年九月)—

今の詩界

印刷された回覽雜誌ばかり出る
 現今の詩界と云ふはたけへ、たまぐ
 氣まぐれな丹頂の鶴が下りて、

最近の作

その口ばしをしたに 向けて 云ふ には、――
『おい、田舎初段の 詩人氣りらよ
カペンタ や トラウベル の やうな ヘツぽこ詩人を ても
流行思想 に かぶれる 爲め には
われ勝ちに 擔ぎ出さねば ならない の か？
いや、ホイトマン を ても だ、おい、
どう 受けて いい かも 知らないで？
お前ら の リズム など には、
さうだ 無形にも あり も しない リズム に、
民衆思想 なんて うわツつら の 言葉 で――
世間見ず の 愚鈍さ、不敏さ、
斯う 云ふ おれ の 一と聲 さへ
豚 に 玉 を 投げ與へる やうな ものだ！』

こやしの臭ひ

眞夏の 午後、
ふんどし 一つで 僕は
菊 と カナナ とに こやし を やつた。
そして 縁がは によつて
その にほひ を かいでると、
自分 が 地上 に もえ出させよう と する
藝術 の すがた が 豫想 された。

藝術上 の 道學者らは
遠慮なく はだか を さける が よからう、
鼻 を つまめよ また 間違つた 唯美主義者ども！
僕の 創作 は
天上 の 完成 ではない、
くさい にほひ に 育つ 地上の かをり、
こやし を 絶やせば

直ぐしをれて行く 赤や黄の花だ。
——(大正九年十月)——

ゆふ焼けの富士を遠く

ゆふ焼けの富士を遠く
脊なかにして臨む六郷の川ぐち、
海の向ふから
一抹に消えて行くのは穴守、
羽根田の薄くかすれた出鼻。
静かな浪と共に
そこぐらい誰そがれが押し寄せて来て、
こちらの高い石垣土堤のすそ、
小舟のうへで
まる木の魚を取りつつあつた漁師に
世間ばなしをし向けてゐた僕は、

いつのまにか、自分ばかりになつてしまつた。
——(大正九年十二月)——

太陽よ

その勢ひかくくたるとき、ああ、太陽！
なんぢは力づよくあまりまばゆくて
かたちは見えぬ、
心の奥まであまねき光りその物であつた。
いや、その光りたるをとほり越し、
この天地を時々刻々に創造する
融化和と綜合その物であつた。
今や大海のはづれにただよつて
大きな赤の玉と色取られて見ると、ああ、
他の萬有とは分離して、全く
一つのゆふ日その物ではないか！

ああ、太陽よ、これ
なんちの死を告げるのか、それとも、
僕ら人間をただ真ツくらの
ちぎれちぎれに見限つて行くのか？

——(大正九年三月)——

泡鳴全集 第九卷 終

大正十一年四月十五日印刷
大正十一年四月十八日發行

泡鳴全集 第九卷

(非賣品)

個製本

著者 岩野美衛

發行者 中塚榮次郎

國民圖書株式會社代表者

東京市麴町區内幸町一丁目六番地

印刷者 長谷川美麿

東京市麴町區山元町二丁目十四番地

印刷所 國民圖書株式會社

東京市麴町區内幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話 銀座七八三番
板橋東京五三二九八番

發行所



發行所

東京市豊島区西目黒一丁目六番地
國民圖書村友會



明國書 國民圖書村友會

明國書 貝谷 川 美 淵

發行所 中 野 榮 大 源

發行所 岩 井 美 齋

大正十一年四月十八日發行
大正十一年四月二十五日印刷

國民圖書村友會

印刷本

WASEDA
日東堂書店

